# 前宮村の交通と通信

田中　桂

## 交　通

一、本村の交通概要

本村は稲葉郡の東南隅にあって、南は木曽川を隔てて丹羽郡草井村に対し、北は各務原を隔てて蘇原、那加に接し、東は鵜沼村、西は中屋、更木村に隣接している。為に南北の交通は極めて不便で、東西の交通も利用する交通機関もなく、道路も屈曲し狭隘で不便な村であったが、風俗人質は純朴で人情も又篤かった。

二、隣村との交通状況

1南方へ通ずる道路

木曽川の清流指呼の彼方に愛知県が見えるが、附近に橋もなく、僅かに草井渡船によって通ずるのみで、河川の増水時は川止めで、往来は出来なかった。

草井渡船　　昼夜渡河する。

岐阜、愛知両県で経営し、無料であった。

船頭は三人で、人、馬、諸車を渡河させる。

両県の経営の前は（昭和二年以前）本村で責任をもち、入札請負で経営し有料であった。

人　一銭。　自転車　二銭。

荷車　三銭。　馬　車　五銭。

但し夜間は倍額

草井渡船の前身は相当古くからあって、承久の乱に於ては、摩免戸渡の名にて記されている。

当時に於ける其の他の渡船

鵜飼屋渡船　鵜沼小伊木　個人経営

小淵渡船　北島の南方　〃

鹿の子渡船　〃

笠田渡船　県営無料

2北方へ通ずる交通路

各務原飛行場が存置される前までは、北方には自由に通行出来たが、飛行場が出来てからは次第に制限せられ

岡田式渡船

て、非常に不便になった。

(イ)頬白坂を越えて各務原を横ぎり、蘇原村の野村で中仙道に通じていた。北方に通ずる道路中で最も重要なものであった。各務原はもと原野で、関街道、山県街道を始め北方に通ずる道路が数条あって、通行は自由であったが、大正五年に飛行第二聯隊、大正七年に補給部、大正九年に飛行第一聯隊が設置されて、順次交通路が制限されて、遂に通行禁止になった。

(ロ)長平の東から、補給部と飛行第二聯隊の中間で各務原を横ぎり、鵜沼の三池を通って中仙道に交叉する県道即ち関街道は、関から草井渡船を通り愛知県古知野に通ずる道路で、以前は関方面から往来が頻繁であった道路で、これは禁止されなかった。

(ハ)前渡下切から飛行第一聯隊を左廻して、那加に通ずる道路。

(ニ)両内野から飛行第二聯隊を右廻りして、鵜沼地内から中仙道に交る道路

3 東方に通ずる道路

両内野から鵜沼の小伊木を経て、犬山方面、山崎から中仙道に出る道路。俗称これを筏道といって、犬山以東の筏乗りが朝筏を下して笠松まで下り、堤防を上流に向ってこの道を通行した。

4 西に通ずる交通路

(イ)前渡、下切を通り上中屋、笠松に通ずる県道。

(ロ)堤防を道路として通る。県道より頻繁であった。

(ハ)下切から山脇を通り、上戸、大佐野、井桁前、大野に通ずる道路。

三、現在の交通路

南方に通ずる草井渡船も、時代が進むにつれて利用者も少くなり、自転車、歩行者が渡る程度となり、時々洪水後は川の流れが変り、渡船場の位置も変更され、長い礫石の川原を歩いて渡船を利用していた。

然し関、各務、蘇原、前宮、草井、古知野其の他附近の住民は、早くから架橋の声高く、当局者は何回となく協議し陳情してその促進に努力せられた結果、昭和四十四年四月待望の愛岐大橋が開通された。同時に古い歴史



をもつ草井渡は消えていった。

北に通ずる道路は、愛岐大橋の開通に伴い、現在大橋から国道二十一号線まで新しい道路が出来上り、将来各務の西部を通り関に通ずる新道路の開通も間近である。愛知県側でも江南線が殆ど完成され、名古屋への往来は非常に便利になる。

飛行一聯隊を左廻して那加、岐阜へ通ずる道路は、戦時中禁止された。終戦後聯隊跡は米軍の基地となり、其の後航空自衛隊の基地となった。この道路の復旧については、附近住民の声高く其の要望が入れられて、前より少し南側を左廻りする道路が出来た。これは前宮にとり又一般の人にとっても重要な道路で、那加、岐阜方面へ通ずる主要道路である。この道路も、自衛隊ミサイル基地設置によって、三井山の南を迂廻せねばならぬ様になるとの噂も伝えられている。

西に通ずる道路は、下切、中屋、大野を通って、国道二十一号線に通じ、現在は岐阜行バスが運行している。木曽川堤防も、中屋地内境川の橋から前渡西町までの残りの舗装が全部完了し、砂利や山土を積んだダンプカーが唸りを立てて走っている。

東えの筏道は、道巾も広められ自動車が頻繁に走っている。

四、交通機関

昭和七年頃の統計によると、本村内の交通機関は自転車が重なもので、戸数四百八戸の九十三%即ち三八二台保有され、一戸に二台以上所有するもの二十戸であったという。

当時の統計によると

| | |
|---|---|
| 自転車 | 三八二 |
| 荷車 | 二二一 |
| 荷馬車 | 六 |
| 三輪車 | 一 |
| 小舟 | 二 |

今日自動車の普及は大変なもので、本村においても自動車又は小型運搬車を持たない家は僅少であって、農耕にまでも自動車で往復し、自動車万能の時代となった。汽車は高山線が、大正九年十一月に岐阜、各務原間が開

通し、岐阜方面に出かける人の唯一の交通機関となった。その後昭和九年十一月に高山まで開通した。

各務原電車は、大正十五年一月に安良田駅から各務野駅（三柿野）まで開通し、運行回数の多い電車の利用が、通勤者、学生などの間に非常に多くなった。その後同年八月に二聯隊（各務原）まで、昭和二年九月に東鵜沼、（新鵜沼）まで開通し、東廻り名古屋方面への往復が便利になった。高山線や各務原線を利用するには、那加から各務原まで出なければならない、何とか村を通るバス線がほしいという声もあり、村当局並に村有力者の努力によって、昭和二十七年三月二十五日に岐阜、前渡間のバスが開通した。

其の後大伊木まで延長されて、現在朝の岐阜行、午後の前渡行は満員で、朝七時から午後八時まで十一往復運行している。

## 通　信

### 一、郵　便

本村は鵜沼郵便局の管轄で、一日一回集配された。当時の郵便函設置数は六箇所で、

下　切　　日比野範治方
前　渡　　長瀬林作　方
長　平　　丹羽政衛　方
北　島　　永井義郎　方
山　脇　　小島源太郎方
新　田　　永井傳吉　方

であった。

然し前渡、若宮は機業の多い関係から、那加郵便局の利用が多く、その利用度は鵜沼局を凌ぐほどであった。

### 二、電　報

取扱局　1 鵜沼郵便局　前渡西区以東
　　2 那加郵便局　若　宮

### 三、電　話

昭和七年ころの電話（那加交換局）架設者は、下切の磯谷貞一氏一人で、借用利用する人が多かった。



四、各務原前渡郵便局

1 沿革

昭和一四、九、一六　前宮郵便局開局。
　　（為替貯金、郵便事務取扱）
〃　一六、二、一　電報配達事務を鵜沼局から分離開始。
〃　一六、三、三一　電信交換事務取扱開始。
　　加入口数　五
〃　三一、六、一八　那加、前宮局間の市外線開通。
〃　三七、六、一九　前宮地区自動交換無人局完成。
〃　三七、八、一九　前宮局手動交換廃止
　　自動交換局に
　　加入口数　九四
　　自動交換局開始と同時に、加入
　　一〇〇各務原電報電話局に移行

2 電話加入者数の変遷

| 年度 | 加入者数 |
|---|---|
| S 16 | 5 |
| 26 | 39 |
| 27 | 44 |
| 28 | 51 |
| 29 | 57 |
| 30 | 57 |
| 31 | 67 |
| 32 | 72 |
| 33 | 75 |
| 34 | 83 |
| 35 | 90 |
| 36 | 94 |
| 37 | 210 |
| 38 | 228 |
| 39 | 248 |
| 40 | 283 |
| 42 | 369 |
| 45 | 471 |
| 46 | 626 |

昭和四十六年十二月末において加入申込数　七〇〇
但し山脇町は82局につき、この数に含まない。

3 郵便配達の管轄

昭三一、一〇、一　鵜沼局から那加局へ組替。
〃三八、六、一　市町村合併等事情により前宮郵便局を各務原前渡郵便局と改称。
〃四五、六、　速達配達開始

## 村　農　会

丹羽一郎

政府は農業に新しい技術をとり入れ、農村の発展に力を入れようと、政令により村農会を作らせた。

会員は農業を営む人々により構成され、各部落から一名の理事を互選して役員を作り、会長を選挙して、村農会が作られた。

農業指導が中心に運営されたため、技術員と事務員が役場に配属され、技術員中心の活動がはじめられた。

会長は当時としては珍しく、会員全員の選挙によって選ばれたが、村農会の経費が村の予算に組み入れられていることや村農会が役場内に併設されていることから、だいたい村長が会長に選ばれていた。

農業指導は技術員によって行なわれ、主に農業技術の改善、品種改良、三毛作奨励、農産物共同出荷であった。

当時の農家では、米、麦、甘藷作りを毎年同じように繰り返し作っていたが、新しい農業のいき方として、蔬菜作りが奨励された。

生姜、大根、里芋、白菜などの栽培の仕方を、技術員から教えてもらい生産に励んだ。

また、品種改良のために指定試作をしたり、生姜の種作りをしたりして改善に努めた。

三毛作では、大根、白菜、里芋の早取りが奨励された。

農産物の共同出荷もこの時に始まり、生姜や里芋は遠く大阪まで出荷された。生姜は石油箱に箱詰めされ、貨車で運ばれた。

村農会は農業指導の中でも蔬菜作りが中心であったため、蔬菜作りに興味のある人、また、新しい農業に積極的に取り組んだ人には喜ばれた。

技術員は新しい農業の方向として、推進してきたが、耕地面種の少ない人や改善に興味のない人々にまでは、指導が行き届かなかった。

従って、技術員は篤農家の家を訪問して、指定試作をさせたり、品種改良や農業技術の改善に努めた。

年数を重ねるごとに、農業技術も向上し、蔬菜作りも軌道にのり、生産も高まってきた。

当時あった信用組合は、金融関係、肥料販売、生活必需品販売が中心であった。ところが農業会になった頃、農業指導が中心になっていた村農会は、農業会の中で考えられるようになった。

こうして村農会は農業の新しい方向を示した、農業指導中心の会であった。

次に昭和初期の統計二、三を拾って参考に資そう。



一、世帯数　四一三戸

| 種別 | 戸数 本業 | 戸数 副業 | 本業就業数 男 | 本業就業数 女 | 本業就業数 計 | 副業就業数 男 | 副業就業数 女 | 副業就業数 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 農作業 | 二四五 | | 八九五 | 八九九 | 一、七九四 | 一、〇〇八 | 一、〇五〇 | 二、〇五八 |
| 養鶏業 | 二 | 三〇〇 | 六 | 八 | 一四 | 一、〇七〇 | 一、一〇〇 | 二、一七〇 |
| 養蚕業 | | 三〇〇 | | | | | | |
| その他の農業 | 一 | 一 | 一 | 一 | 二 | 三 | 二 | 五 |
| 計 | 二四八 | | 九〇二 | 九〇八 | 一、八一〇 | 二、〇八一 | 二、一五二 | 四、二二八 |

二、耕作面積別世帯数

| 種別 | 五反歩未満 | 五反歩以上 | 一町歩以上 | 三町歩以上 |
|---|---|---|---|---|
| 耕地所有別 | 二六三 | 六一 | 三九 | 一 |
| 耕地使用別 | 二三二 | 二〇五 | 五六 | 一 |

三、全国平均比

| | | 自作農 | 自小作農 | 小作農 |
|---|---|---|---|---|
| 農家 | 本村 | 四四・七九% | 四〇八五% | 一四・三七% |
| | 全国平均 | 五〇・六六% | | 四九・三四% |

四、農家一戸当耕地

| | 田 | 畑 | 計 |
|---|---|---|---|
| 本村 | 一・一反 | 三・七反 | 四・八反 |
| 全国平均 | 五・四反 | 五・一反 | 一〇・五反 |

## 五、主要農作物生産状況（主として自家用）

| 種別 | 収穫高 | 価格 | 単価 |
|---|---|---|---|
| 粳米 | 七七六 | 一三、九六八円 | 一八、〇〇円（当石） |
| 糯米 | 八三 | 一、九五〇 | 二三、〇〇 |
| 陸米 | 四八 | 九六〇 | 二〇、〇〇 |
| 大麦 | 六二五 | 二、六八七 | 四、三〇 |
| 小麦 | 三一一 | 二、八〇〇 | 九、〇〇 |
| 裸麦 | 一〇 | 九五〇 | 九、五〇 |
| 大豆 | 一 | 一三 | 一三、〇〇 |
| 小豆 | 二 | 三六 | 一八、〇〇 |
| 蜀豆 | 三 | 四二 | 一四、〇〇 |
| 蚕豆 | 二 | 二四 | 一二、〇〇 |
| 蕎麦 | 一三 | 一五二 | 七、〇〇 |
| 玉蜀黍 | 五 | 一一八 | 二、五〇 |
| 黍 | 二〇 | 二六〇 | 一三、〇〇 |
| 食用百合 | 二一八 | 一五二（〆代） | 七、〇〇 |
| 生恙 | 八七五 | 二一八 | 二、五〇 |
| 甘藷 | 二一、〇〇〇 | 一一、〇八四 | 一、〇〇 |
| 里芋 | 一、二〇〇 | 一、四四〇 | 一、二〇 |
| 馬鈴薯 | 一、二五〇 | 一、五〇〇 | 一、二〇 |
| 人参 | 六五〇 | 九七五 | 一、五〇 |
| 牛房 | 八二〇 | 一、二三〇 | 一、五〇 |

### 農産物品評会

収穫の秋、十一月二十三日（新嘗祭＝勤労感謝の日）を中心に農産物品評会を催して穀類・野菜・果実等を校舎三室を借用して展示し、郡農会の技師を審査長に依頼して盛大であった。ところがこれの主体が山東であり、山西の主業である織物の展示会もという話が出て、一年は一緒にやってみたが、野菜なんかと異って高価品であると共に展示の場所にも困るし、夜の警備にも問題があって、続けて行うことはできなかった。

その頃の記録

| 年次 | 出品総点数 | 一等入選 | 二等入選 | 三等入選 | 佳作 |
|---|---|---|---|---|---|
| 昭和二年度 | 三二九 | 二〇 | 三五 | 六三 | 〇 |
| 三年度 | 四二六 | 一四 | 二五 | 六三 | 二三 |
| 四年度 | 四五二 | 一三 | 二五 | 五六 | 一五 |
| 五年度 | 四一八 | 一三 | 二五 | 五一 | 〇 |
| 六年度 | 中止 | | | | |
| 七年度 | 三六五 | 一〇 | 二一 | 五〇 | 一五 |

どんな雑誌を購読しているかを調べた。（昭和七年）



| 雑誌名 | 発行所 | 定価 | 部数 | 内容 |
|---|---|---|---|---|
| 市町村雑誌 | 東京市町村雑誌社 | 二〇銭 | 一〇 | 市町村行政一般事項 |
| 家の光 | 東京産業組合中央会 | 二〇銭 | 一二 | 産業組合一般事項 |
| 蚕糸の光 | 東京大日本蚕糸会 | 一五銭 | 六 | 養蚕と製糸 |
| 使命 | 伏見使命社 | 一二銭 | 六 | 青年の修養 |
| 愛 | 伏見使命社 | 一二銭 | 三 | 女子の修養 |
| キング | 東京講談社 | 五〇銭 | 三 | 一般修養と娯楽 |

新聞はどれ位読んでいたか（昭和七年調）

| 種類 | 一ヶ月分の値 | 購読戸数 |
|---|---|---|
| 大阪朝日新聞 | 九五銭 | 五 |
| 大阪毎日新聞 | 九五銭 | 一九 |
| 岐阜日日新聞 | 七〇銭 | 四 |
| 名古屋新聞 | 九〇銭 | 一六 |
| 新愛知 | 八五銭 | 五三 |
| 岐阜新聞（夕刊） | 三五銭 | 四八 |

## 七、主要果実生産状況（主として自家用）

| 種別 | 収穫高 | 価格 | 単価 |
|---|---|---|---|
| 梅 | 二四〇斗 | 二八八円 | （升）一二〇銭 |
| 栗 | 五〇 | 一二五 | 二五 |
| 柿 | 六三〇〆 | 一八九 | 三〇 |
| 桃 | 四四 | 一八 | 四〇 |
| 葡萄 | 九〇 | 三六 | 四〇 |
| 枇杷 | 五 | 二 | 三五 |
| 無花果 | 二八〇 | 七八 | 三〇 |
| なつめ | 六 | 八 | 一四 |

五、米の問題

一人一日の消費量　三合六勺として
本村人口　三〇〇〇人
一ヶ年消費量　三九四二石
本村米の総収穫　九〇七石
本村米のある期間　三・二七月
不足する期間　八・七三月
不足する米の移入先
蘇原・各務・美濃町・本巣・揖斐地方

六、昔の常食と代用食

麦飯　米の飯を食べる時――正月・お盆・祭
大麦を搗き、石臼で引き割る――わりという。
白米一升にわり二合を混じて焚く――常食
半白飯　米五合わり五合の割合で焚く――下級
わりは後（大正末期頃）平麦となった。
大麦を搗き、水にしたし、ローラーでつぶす
これを乾燥して平麦という
わりより色が白く、柔かいので、わり飯より食べ易い。ずっと続いて終戦後、食糧事情の良くなるまで田舎の一般常食として、親しまれたものだ。
麦飯は消化が良いとか、腹がよくすくとかいったものだ。
干葉飯（ひばめし）大根葉を干し、これを細かく刻んで、麦飯の中に入れ少々塩を加えて味をつける量を増すために用いたものだ。
大根飯、大根をついて細かくし、これをゆでて、麦飯の中に入れ塩で味をつける。
（尾張大根飯塩でもつ）
小割雑炊（こわりぞうすい）　わりを作る時篩の下の細かいわりをよく水にひたし、野菜を沢山入れて味噌味の雑炊をつくる。
麦粉ボチ　小わりをとった下の粉で塩味の団子をつくる。
稗ボチ　稗で作った団子
甘藷ボチ　甘藷の屑を切干にしておき、春先きのおやつに用いる。切干を粉にして団子に作る。色は黒いが甘味があってうまい。外良（ういろ）のよ



うで中々おつなもの。藷の臭が玉に傷。
粉菓子、大麦をよく煎って粉にし、これをなめる。
砂糖を混じてたべると、こうばしくてうまい。
石垣団子、屑米を粉にして、或は小麦粉で。生甘藷を米の目に切って混じて作った団子。甘味があってちょっといきなおやつ。
そば団子　そば粉の団子
きび団子　きびで作る団子
栗　団子　栗の実を入れて作る小麦粉団子
この三種はとても上級品
砂糖が十分入れてもらえなかったのが残念
粉入れボチ（餡を入れた柏葉餅）小麦粉が普通で、上等は米の粉、楢、櫟の葉でくるむ、田植と農休の最高なご馳走。
ぶんたこ、（草餅）蓬の若葉を搗き込んだ餅。
四月二十五日蓮如様祭りに各戸で必ず作る習慣。
ぶんたことはこの附近だけ通用する方言らしい。
語源はわからぬ。
菓子の少ない時代、菓子はあっても小遣銭がもらえない時代の子供のおやつは大低老母の手製、作る手間は惜まぬが、一銭でも金を使わぬようというのが昔の田舎の家々のゆきかたであった。
手間のかかることを苦にしない昔の人、金もうけの少ない時代、まずいものを食べて働く昔の人、古縄一筋でもしまっておいて再使用を考える節約一本のゆきかた、消費時代といわれる今から見れば、及びもつかぬ、想像もつかぬ生活振りだった。節約が勿体ないことになる。
衣食住ともにその通りであった。
百年どころか五十年の変化、殊に敗戦後のここ二十年の発展は五十才以上の人にはよく判るといいたい。
勿体無いという言葉が今通用しないというならば、老人共には腑に落ちんという。消費時代の裏返えしが納得できんからさ。

# 農友会

丹羽一郎

農友会は農業熱心な青年有志の自治団体であった。

明治四十年頃、長平の青年十数人で作られ、後には村の農業指導者として活躍をした。

会の目的は人間作り、即ち、人作りであった。先づ、農業技術の修得、作業修業、精神修練と共に、教養を身につけることであった。

二宮金次郎を手本にして、昼間は各自の農業に励み、夜間は藁を持ちより縄ないの夜業であった。毎夜続く縄ないも大変な苦しみであった。そのお金をためておいて農友会の集会場を作った。集会場が完成した時の、さよりめしは格別の味であった。

今のような耕運機などの機械農業とかわって、当時の鋤、鍬の農業は大変な重労働であった。一日中働いて疲れた体で、夜には縄をない、勉学に励げんだ。

夜の勉学は眠気が襲って、とても辛かったが、丹羽久克先生の熱意に惹かれ、会員は精神修練と教養を高めるために、真剣に取り組んだ。

会員の農業技術修得のために、一反歩の試作畑をかりて、麦や甘藷の作り方を研究し、品種改良や肥料試験を行なった。研究後は研究発表会を開いて批評を受け、次の研究の足掛りとした。そして実際に役立つ、農業技術の修得をした。

当時は郡役所に技術指導員がいて、時々指導してもらったが、農友会独自の研究試作が中心であった。

堆肥作りの品評会をしたこともあった。草を苅り、藁を積んで作る堆肥は、畑にはなくてならない、大切な肥料であることを教えられた。

会に使われる経費は、試作畑の収入と会員の持ちよりで賄われていた。

毎年、春になると敬老会を開き、老人を慰めた。

こうしたことを通じて、修得した農業技術を、村の人々に広め、村全体の農業発展に尽くした。



# 川出しのいも

永井盛三郎

百年史の編纂委員長から「川出しのいも」について書いてくれと言われて、聞いたことや見たことを書こうと引き受けました。

## 薩摩藷

江戸時代に青木昆陽先生が飢饉に備えて「さつまいも」をうえよと日本全国に普及してくれました。土質が悪るい所の方がうまい藷ができるというのです。本州では、薩摩藷といいます。薩摩では琉球藷といいます。琉球へ行くと台湾藷とか唐藷（からいも）というところから、南方の熱帯地方が原産であることは間違いありません。黒ぼこ地が適地で砂地もよろしいが夏の旱魃で枯れはしないが大きい藷にならんという訳です。これ等の土質は水分が少ないから藷が堅くできる、味がしまっている。だから十三里半というのです。栗（九里）より（四里）うまいから、九里と四里で十三里、それよりうまいから十三里半という名前がついたものです。

## 飛行場と甘藷

関東で甘藷の名産地は川越所沢一帯といわれています。関西では各務原一帯と評判です。所沢といえば飛行機の発祥の地、各務原は所沢からの第一分身地、双方とも甘藷の名産地であることは、飛行機と甘藷と何の結びつきがあるでしょうか。土質が飛行場に適しているのでしょうか、それとも藷を食べたおかえしに「ブー」、飛行機は上るときからおりるまで「ブー」としゃれますか。

## 北島港

木曽川の右岸にある北島は川の港でした。上に小山港。下の左岸に草井港があり、小山港はその名が早く消え、草井港はその名が数年前まで残っていました。北島が港であったことを裏付けるものに、舟元屋・港屋・河口屋等の屋号をもつ旧家があります。川を上り下りするお客が立ち寄ったり、川便に用事の人が集まったことも想像できます。各務・関方面から出て来たようです。

## 御神木（ごしんぼく）様

伊勢神宮ご造営の檜は木曽の官林から伐り出されます。

二十年毎にご造営になり、その一番大切な数本の丸太材が白布に巻かれて木曽の山奥から流されます。筏に組まれて警護の幾人と船頭さんがあやつります。お立寄りという行事があります。七十才の私に三回あうことになりますが二回は、はっきり覚えています。お立寄りというのは勤務員の休憩所ということらしいのです。二回共春先の薄ら寒い時でした。「おがむ」という訳で早朝から遠近の人々が川岸一ぱいに集まります。お立寄の日時が宮内省から通知されるのも今以って北島港の名称が存続しているにちがいありません。水流の場所が変り、水位がひどくさがった現在では港の気分が全然でません。

こうした古代からの行事も文化の発達とともに変遷しすべてがトラック輸送なので、昭和四十八年十月第六百回のご造営ご遷宮工事が今すゝめられておりますが、今回は「御神木様下り」の行事がありませんでした。恐らく永久にお取りやめになるのでしょう。

### 甘藷の川出し

港である限り船頭の多いことは論をまちません。田を買うより舟を持つ。舟の買えない者は舟元屋から借りうけて生計を立てたものです。年中丸石運びです。笠松港が終点です。石舟は三枚腹を使います。二枚腹もあります。早朝笠松に向って下り、西風の出る頃から白帆をあげて上ってきます。二人であやつるのが普通です。風のない日は一人が岸に出て、五十米もある細綱を引いて歩いてゆくのです。一人は舟に残ってあやつります。さて秋の藷時期になると、石運びをやめて藷舟になります。仲買人が居て農民どもが荷車で四、五十貫(一〇〇キロ内外)ずつ持ってくるのを、竿秤で量っては買い集め舟に積みこみます。組合員の船頭さんは二三人づつ同じ方向に行くのです。桑名まで下って海に出て名古屋にむかう。揖斐川を遡って大垣方面へ行く。原価に運賃を加えますから相当高価になるようですが「かかみのいも」で味がよいのが評判でした。帰りは日用品を仕入れたり、大垣方面では米を買ったりしました。順風に帆をあげてという調子で

「舟は帆まかせ、帆は風まかせ」と、木曽川ならでは見られぬ長閑な風景も今は昔の語りぐさになりました。こうして出て行った舟は都合よくて五日、ことによると



十日もかかったというのです。

三枚腹舟に「かき」を張って積むと約八百貫積めた。

藷値は農民の手へ貫代八銭から上等品で十銭

掟米(おきてまい)小作料　石代十八円也

従って白米一斗金二〇円、安いのが十八円

こんな相場も参考になるでしょう。

大正末期からは舟運びより馬車運びに転換、やがてはトラック運搬にと、とかく楽に多量をそして速かにと時代の波は移ってゆきます。

### 藷の生産

夏作は甘藷、冬作は麦ときまっていた各務原四周も戦前稍〻下火になっていたのが、戦争中の食糧不足から藷作れ藷植えよで空地一帯に藷・藷・藷・今まで捨てていた茎や小粒までが食品化する。終戦後はより以上深刻化して、京都、大阪方面から買出しに来る人が列をなす。藷成金、藷で作った家などと藷様様の時代があった。次第に食糧事情が緩和して、藷の化工が始まった。澱粉工場ができる。飴工場が開業する。カリン糖屋があちこちにできます。この時代もあまり長くはなかった、今のような昭和元禄のありがたい時代に「いも」なんて誰もふりむいてくれません。

今年一月二十日中日新聞に次のような記事があったので摘録して藷の話を終ります。

### これでは名産地返上

各務原のさつまいも生産がた減り

各務原市はこのほど今年度のさつまいも生産量を推計した。それによると生産量は昨年の半分よりやや多い四千五百九十㌧。去る三十三年頃の二万四千㌧に比べると五分の一以下。各務原はいもの名産地ではなくなったようだ。市は今後、収益性の高い「高系十四号」の生産と「いも堀り園」など観光農業を指導していくという。

市農林課の話によると、各務原がいもの名産地といわれた理由は、市一帯にいもの栽培適地である「黒ばこ土壌(火山灰地)」が広がっていたのと、戦後の食糧難でいもの需要が高かったため。

農林省岐阜統計調査事務所の資料によると、去る三十三年の生産量が二万四千五百四十三㌧。去る四十三年ご

ろまでは大体、二万〆前後を生産していたが四十四年は一万六千〆、昨年は一万〆を初めて割って八千二百四十〆に落ち込み、今年度はついて推計五千〆以下、名産地の名を手放したかっこうだ。

こんなに減ってきたのは、食糧事情や食生活の変化によって需要がガタ落ちしたのが主因。農家はもっと収益性の高いさといも、にんじん、はくさいなどの露地栽培に転換しつつある。

残されたいも生産の道は、栗のような果肉で好評の、高系十四号を早出しして収益性をいっそう高めたり、蘇原農協などでやっている観光農業（有料いもほり）だといっている。

## 農業協同組合

松波民市

大正二年、時の前宮村役場助役（後に村長）田中常吉氏が時の有力者小野木菊次郎氏、足立梅吉氏、足立正幹氏長瀬林作氏等と相図り、前渡信用組合を創立せられた。

長瀬林作氏が常務として事務取扱。

数年後に購買、販売、利用を加えて拡張。

その後、前宮信用購買販売利用組合と改称。

昭和六年の調査によると、組合員約三〇％

販売と購買の内容は次のようである。

一、経済用品

| 種類 | 数量 | 金高 |
|---|---|---|
| 米 | 九三三・〇（升） | 二八八・三三（円） |
| 味噌 | 四一〇・〇（メ） | 二〇五・九二 |
| 醤油 | 一六九八・四（升） | 八一四・五五 |
| 酒 | 一一五八・〇（升） | 一〇六九・四九 |
| 麺類 | 三八九・五（メ） | 三〇六・六一 |
| 計 | | 三七一七・五四 |

二、産業用品

| 種類 | 数量 | 金高 |
|---|---|---|
| 肥料 | 一三四七（叭） | 七七七三・七六（円） |
| 養蚕具 | 三三（点） | 二五・九四 |



| | | |
|---|---|---|
| 蚕座紙 | 一四〇〇（枚） | 九八・〇〇 |
| 木炭 | 八四九（メ） | 一四六八・二三 |
| 計 | | |

その後世間一般の経済問題に左右せられて迂余曲折あるいは消長の径路をへて、昭和十八年頃農会と合併して前宮農業会と称し田中清一氏が専務となって発展に尽力せられ、薬師大門通りの北側で普通民家を利用していた事務所を改造したりしていたが、利用度も多くなり、その筋の上司からも、各種の指導があって、現在地に移転して拡充と発展に努め、村民七〇％の組合員を一〇〇％にするなど本腰を入れて、農業協同組合法にむかうことになる。

昭和二十三年農業協同組合法の施行に依り農業協同組合の設立は全国的に急速に進められた。当農協も四月十五日前渡桃春院において組合員四四三人出資金三十一万一千円（一口五〇〇円）にて創立総会を開き同年六月十三日設立登記を完了し戦後の食糧難時代の国民の食糧確保の第一線に活躍すべく力強く発足した。名称前宮農業協同組合、尚信用部に於ては組合員の貯金の増強に依る金融事業の推進、購売部販売部の活動に依り豊かな組合員の生活環境作りに奉仕した。

初代組合長足立文司氏専務が藤喜実氏一期一ヶ年間。

昭和二十四年二代組合長丹羽一郎氏専務田中農夫氏にて一期二年間。

昭和二十六年より二期四年間組合長丹羽一郎氏参事水野亘氏。

昭和三十年前宮村中屋村更木村三村が合併して稲羽町となる。この機会に同年七月稲葉東農協と改称し上中屋及び松本の二部落を合併する。この年共済事業を開始する。

組合長永井行正氏参事水野亘氏就任。

尚中屋地区に出張所を設ける。

三十一年六月二十二日全地区にわたり大降雹あり被害甚大でその復旧に努力した。筵旗を立てて町長伊藤英雄氏に陳情の一幕もあった。

三十二年事務所を前渡西町一一九〇番地より県道沿いの現地に移転し業務を開始した

三十三年農協役員の任期二年であったのを総会に於てその任期を三年にした。

三十五年時代の流れに従い燃料の革命ガス使用の機運さかんとなるに及びプロパンガスの取扱を開始した。
三十六年総会に於て貯金高一億円達成記念大会を盛大に行った。
三十九年貯金高二億円共済契約高参億五千万円達成大会を総会と合せて行った。
四十一年貯金高三億円達成大会を四月総会の席上において開き之を祝福した。又購売事業の増大にともない資材倉庫を新設した。
四十二年スピード時代に備え自動車用品ガソリンの消費量の増大に伴い、時代の要求にマッチすべくガソリンスタンドの新設をした。
四十三年農協発足二十周年記念大会と合せて貯金高五億円達成大会を行う。
四十四年組合長陣頭指揮のもと役職員一体となって共済推進の結果新規契約高三億三千六百万円を越え総契約高十一億五千六百万円を突破し全国共済連合会より農協共済優良組合として表彰を受ける。
時代の進展にともない現事務所の建物にては狭隘なる上に老朽化して改築の必要を生じた為役員会の決議に依り鉄筋コンクリート二階建の事務所を建設すべく十二月起立建設と請負契約を結んで十二月十一日起工式を行ない工事に着手。
四十五年七月六日落成竣工式を行う。
四十六年新事務所に於て購売の店舗を設けて生活品の販売も併せて行う、尚二階には結婚式場を設けて組合員の子弟の結婚式を盛大に取り行なう。
新事務所は冷暖房完備にて農協の諸会合は勿論町内各団体の会合等にも利用の便を与えて居る。
アメリカのニクソン大統領の声明に依るドルショック、財界不振の余波を受けた金融事業の不振に依る信用部の収益減退等の悪材料も役職員の団結に依り組合員の絶大なる支持のもと益々発展すべく努力を続けて居る。

# 前宮織物工業協同組合

後藤新平

前宮村の織物工業の生いたち。
徳川時代より農業をするかたわら内職として冬期の余暇の利用に幼稚な織物を作っていた。明治維新に入るや文明開化の潮流の中にあって職業の自由を得百姓も織物を本業として、人をたのんで専従するものが漸増して来た。当時は現在と反対の前渡東町地区北島新田長平の部落に沢山営まれていた。昔の話によると永井民三郎氏や熊三郎氏、丹羽弥太郎氏等が盛大に営業されていたと聞く。これは明治元年二年と続いた農家の凶作による恐慌も一因であった。更に佐賀の乱西南の役によって国内状勢は波乱を極め明治十四年政府緊縮政策に基く幣制確立の新方式による政策転換は以外に早く業界に現れた。以来不景気となり休業転廃が続出したのであった。長期恐慌が続いた十八年秋に稀に見る豊作に恵まれ、政府は翌年に亘り新鋭換券制度のもとに不換紙幣の幣貨引換を開始した。
そのため銀貨と紙幣は平衡に復した。このような政府の施策によって漸く通貨も安定し日本の資本主義が最初に体験した堅実な好況が続いた。その後二十三年に世界大恐慌に見舞われ十五年以来出超を続けた外国貿易も、二五〇〇万円の入超を来たした。この恐慌の嵐による痛手が癒えきらぬ翌二十四年十月濃尾大震災に直面し、壊滅的打激を受けた。二十六年には景気回復の兆候著しく織物業界も好況であった。二十七年八月清国と国交破れ遂に宣戦布告となり輸出は杜絶し混乱した戦局は大勝によって翌年四月早くも其の局を結んで経済界も活況を呈した。
その後三十二年一月十一日中屋村前宮村更木村川島村一円の岐阜県絹同業組合が設立された。三十七年に至り再び日露の国交破れ風雲急を告げ遂に宣戦布告となり戦争に突入した。その時戦時特別税として織物消費税が附課されることになった。三十八年戦局は相次ぐ大勝に終息する処となり制海権の獲得により北清欧州壕州への諸航路も復旧され、輸出内需共に爆発的な景気が到来した。
大正年間に入るや家内工業的形態から発展した業界の進歩は極めて緩慢であって他の産業に大へんおくれを取っ

ていた。大正九年四月欧州大戦後の経済界の変動に金融硬化し未曽有の恐慌に見舞われ、製品の値段は半額以下となり原価を度外視して投げ売り、又山間地へ行商に出かけたり、露天商に売ったり辛酸をなめ万事休する事態となって休業者が続出した。その頃までは手織機の木製にてランプをつけてななこ織りや美濃縞の賃織りをしていた。その頃当地では電燈がつき始め十二年頃最初の動力を引いたのが長平の丹羽孫三郎氏であった。それ以来漸く切り換えの機運が高まり二年おくれて十四年に至り田中清吉・田中辰五郎・後藤菊太郎・田中栄一・足立文司・磯谷力次郎・松波政一の諸氏等が動力を引いたその後順次動力が増加し現在のように軒並に発達したのである。動力織機に切り換えた頃より二百のジャカードを乗せて紋羽二重を作った。これが昭和十八年頃迄尾州産地の花型商品となった始めである。又販売方法も現在奨励されている共同販売の方式を取り大柄組合小柄組合等いくつかのブロックが出来ていた。昭和に入るや九年三月二十九日同業組合を改組して岐阜県絹工業組合を設立した。現在の中屋織物工業協同組合の事務所が当時新築されたものである。初代理事長丹羽弥太郎氏であった。十二年七月日支事変が勃発しこれが持久戦となり、我国経済が準戦時体制から戦時体制へと編成替えされた。続いて統制経済へ移行した為め従来の組合事業は戦局の進展と共に統制的事業に移り、今迄の岐阜県絹工業組合も岐阜県織物工業組合に移譲されて行った。かくして国際情勢は一段と険悪となり、高度国防国家建設、外国従属の脱却、大東亜民族共栄圏の確立の要請益々熾烈となり各種産業機構の再編成は必然性を加えるに至り国をあげて新体制の設立の準備を急いだ。我々業界に於ても昭和十四年十月二十一日県下絹人絹六工業組合が統合し、続いて十五年九月綿スフ麻の三工業組合が統合、十六年九月二十日毛織工業組合も含めて県下全織物工業を打って一丸とする岐阜県織物工業組合を結成し国策遂行上有機的な基盤を確立した。当時前宮地区の代表として理事に田中寿夫氏が選任されていた。以来旧組合は支所となり管内業界は生産命令の受け入れ態勢のため小組合を結成した。当時前宮村には第一小組合から第八小組合迄あった。戦局は太平洋戦争へと進展し重大なる様相を呈するに至



り、我が国産業は徹底的に整備し一切の施設及び努力を戦力増強の面に振り当てることになり、十七年企業整備法が公布されるに至った。当地に於ても同法の趣旨に則とり十七十八年に亘って大々的な企業整備を実施し設備の約七〇%を資材に提供した。更に政府は繊維綜合計画と配給機構の確立を強化するため旧来の綿・スフ・絹・人絹・羊毛・麻の四統制会を統合して、一元的な繊維統制会を設立したので、この運営に感謝するため十九年七月九日前記工業組合は岐阜県織物統制組合に組織を変更した。従って中屋支所管内の残存小組合も統合していくつかの施設組合となり当地にも一つの施設組合が出来た。組合長松波政一氏書記水野元由氏であった。又当時の製造規格は次の種類であった。絹織物では生絹夜具地・銘仙先染服裏地、人絹織物では壁羽二重・縮緬・サッカー綿・スフ織物では天笠ギンガム縞織・白絣・紺絣等でこれらの製品は厳正なる価格査定によって絹人絹織物は岐阜県絹人絹織物配給株式会社へ、綿スフ織物は日本綿スフ織物製造株式会社へ共販し重要部門へ配給された。戦局の拡大と共に指定生産用原糸の受給も企業整備による三〇%の残存工場の操業も十分でなかった。昭和二十年になって最悪事態に突入し主要都市は次々と爆撃に見舞れ、七月二十九日夜には岐阜市を中心に周辺は大空襲となり、惨たんたる焼野原と化し人畜の死傷おびたゞしく言語に絶するものがあった。当時岐阜県織物工業統制組合は岐阜市菅原町にあり事務所の一切を焼失したので、直ちに組合事務所の本部を美濃組合の事務所に移して事務を開始した。そして八月十五日ついに終戦を迎えた。昭和二十年八月大東亜戦争は空しく敗戦として終局を告げ、ポツダム宣言の受諾によって我国繊維業界に於ける旧来の統制は、所謂戦力増強のものであって、その統制方式も根本的に改良を加へ民主統制機構へ転換を行わしめた。これの徹底を計るため翌二十一年三月商工協同組合法が制定された。同法の趣旨に則とり、旧来の施設組合は合同して中屋織物工業協同組合に組織を変更、昭和二十二年五月十三日設立した初代理事長に宮崎肇氏を迎えた。その後業界は終戦直後の混乱を漸く脱して、一陽来福の春を迎えた感じであったが、経済界は悪性インフレに見舞われヤミ取り引きは横行し、企業整備で転廃した

業者の再建は容易でなかった。二十三年上半期頃よりぼつ〳〵復元企業も出て来たが、原材料の受配の態勢容易に至らず、統制下に唯一の自由生産である自家用の農賃の銘仙節絹夜具地等の生産によって企業の命脈を保った。同年政府は経済復興五ヶ年計画を樹立し、これによって化学繊維も本格的な復興への一歩が進められた。二十四年に至り各種統制は次々と撤廃され、ヤミ取り引きは無くなり、表看板を堂々と立て繊維品を取扱う商社も続々と名乗りを上げ業者も事業を拡張して、伸び〳〵と発展した。昭和二十五年シャープ博士の日本税制改革に関する意見書による勧告大要の発表に基き、永年実施した織物消費税もついに廃止された。二十六年朝鮮動乱の勃発を契機として内外需要の増大と製品価格の高騰により、一時的動乱ブームもあったが、僅か一年にして二十七年早くも反動的余波とポンド地域の輸入抑制策と、世界繊維相場の暴落により戦時中基盤の弱体化した我国繊維産業界は戦後最大の不況へと突入した。業界の不振は容易に回復する兆候がなく生産過剰の危機をはらみつゝ、金融問題と合わせて容易ならざる事態に突入した。丁度この頃施設組合長であった松波政一氏が中心となり、これが危機を突破するにはやはり前宮地区だけで協同組合を設立し、同業者が結束して事態を収拾すべく話し合いの結果、円満に中屋織物工業協同組合より分離して前宮織物工業協同組合の設立にふみ切った。そして昭和二十八年四月設立の登記をし初代理事長松波民市氏が就任した。この当時政府は特定中小企業安定法を公布し生産調整の基本法を作成した。この発効に基いて種々困難を伴ひ徒らに二年余の才月を費し、漸く同法第二十九条の命令発動の状勢に際し愈々調整組合の設立機運が高まり、二十九年十一月岐阜県絹人繊調整組合を設立し事務所を中屋織物工業協同組合内に本部を置き初代理事長に岩井甚一郎氏が選任された。昭和三十二年を迎えるに至り、政府は金融引締政策によって、当然起こる要条件が中小企業にしわ寄せされるに至った。本組合に於ても金融政策として国民金融公庫と契約を結び金融の斡旋に乗り出した。業界の不況は前年六月立法化した繊維産業設備臨時措置法に甚しく過剰織機の処理を強力に実施した。しかし依然として低迷状態が続いた。昭和三十三年不況克服のた



め生産調整を実施する手段として、時間短縮にふみ切る為め岐阜県繊維協会の補助金を受けてサイレンを前渡西町の薬師と下切町の火見櫓に設置した。三十四年に入って日本経済も明るみを加え、久しく不振であった繊維業界にも漸く脚光を浴びるようになって来た。同年九月二十六日史上最大の伊勢湾台風が来襲し、管内の企業にも多大の損害を与えた。工場は傾き場内はずぶ濡れとなって使用不可能の状態の物が沢山出来た。併し業者の努力によりすぐ復興して正常に復した。台風一過三十五年には比較的業界も順調な進展を見たが労働状勢は悪化の傾向をたどり始めた三十六年後半に至って、加速度的な諸物価並に賃金の上昇と更に政府の金融引締めに依る影響は、極度に中小企業に浸透し経営基盤も危まれる状態が到来したので、一部には休業して働きに出る者も出来た。翌三十七年品質向上のため設備の近代化を必要とするため県の近代化資金を受けて設備の改善と品質の向上を呼びかけた。その結果除々に売れ行きも上向いて行った。四十一年三月突然初代理事長松波民市氏が十四年間業界発展のため尽力されたが、一身上の都合で引退され副理事長の足立一男氏が選任された。以後組合員の福祉のため時間に依る生産調整と機料品の共同仕入により、安価にて購入販売を計画されて着々効果が上りつゝある時、突然病魔に襲われ同年八月就任以来四ヶ月にして他界された。再び理事長が変り後任に副理事長の後藤新平が就任した。初代二代と副理事長としてつかえて来た私は、先代の意志をついて業界発展のため努力を致す覚悟で居ります故、御指導と御協力をお願い致します。その頃当地の絹織物は平綸子が光る織物として脚光を浴び五十年来の好況が四十三年頃迄続いた。翌年その反動として恐慌が到来し値下りによる返品、値引の続出で業界は辛酸をなめた。併しこの好況の三年間に設備は大巾に近代化され、表生地の優秀な製品も沢山生産されるようになって多品種少量生産による生産調整が取れている。四十三年には積立五ヶ年計画をたて十一台一〇〇円づゝ毎日大垣共立銀行か農協に各自通帳にて積立て五ヶ年後に五〇〇万円の積立金を作り共同事業と組合強化のために実施中である。尚四十六年六月には各務原市織物展示会を開催し東西市場に宣伝すると共に、品質向上に寄与した。十二

日には市当局が事務局となり中屋前宮両組合員と卸商会員の合同で各務原市織物振興会を結成したのである。今後は両組合と織物振興会が中心となり、各務原市の織物産業として大いに発展することを祈る。尚現在の当組合の建物は昭和十七年小組合の当時田中松太郎氏が田中宗夫氏の出征中、取引先の林英一氏の協力を得て現在建物の古い方が建築された。その後昭和三十六年小野木紋一村長の時前宮村より補助金の交付を受けて二階建が増築されて現在に至っている。

「賑かなりし織物前渡市」

昔から「いち」は各地にありますが、織物に関係があったのは、古知野いち五日十日、一宮のいち一日六日、前渡のいち四日九日であった。これが始まりは明治三十七年に戦時特別税として付課された織物消費税・課税の査定を受けるため、織物業者が製品を持って薬師の査定場へ集った。午前中に査定を済まし午后絹織物仲買人佐橋商店寺沢商店等が出張しているのでそこで値決めして反物を売り渡していた。又生糸の方も古知野方面の生糸問屋が出張しているのでそこで仕入れる。附近には一杯屋やだんご焼屋が店を開いて賑かであった。このいちも戦後二十五年消費税廃止と共に幕を閉ぢた。

織物査定場の名物男田中清八氏。

織物の査定には目方をつることが必ず行れるというのは目方によって課税されたからである。この目方をつる検査役が田中清八さんで大へん大きい体格の人で声も大きく順次業者の受付順に呼び出して目方の検査をして居られた。この方が居られると大へん活気があった。

古い言葉めかにく織り。

めかにくとはジャカード織り即ち紋織りの事で最初にこれを始めた方は松波浜太郎氏であった。これから松や鶴波の紋羽二重が順次生産されたが終戦後紋羽二重は流行がすたり、現在は平綸子の紋織が流行している。

時々問題となる歩引問題。

昭和四、五年頃絹織商が歩引をつけることを提案したので織物業者は不利になるため、これに対抗策として不買同盟を作り岐阜市の野々垣商店を通じて京都市場へ直売した。この方式が二、三ケ月続いたらついに絹織物商が負けて撤回したそうである。その後三十八年頃再び歩引



を絹織物商より提案したので、理事会で反対の決議をして白生地部商組合へ強硬に撤回を申し込んだので、これもほんの一部を除いて殆んど採用しなかった。

昭和二十八年四月前宮織物工業協同組合設立登記申請者一五一名

組合の現況（昭和四十六年末調）

| | |
|---|---|
| 組合員 | 二〇三名 |
| W幅織機 | 一一一台 |
| 二幅織機 | 三九四台 |
| 小幅織機 | 九七〇台 |
| 昭和四十六年の生産高 | |
| 綸子 | 三八二、八一八反　一三五、七四〇万円 |
| 羽二重 | 七、七二二反　二、八二九万円 |
| 朱子 | 二一、二四八反　七、七五六万円 |
| 絹紡綸子 | 一二、九二五反　四、四七三万円 |
| ウール着尺 | 三八一、七〇〇㎡　三三、五四九万円 |
| カーテン地 | 四九、七〇〇㎡　一、八六七万円 |

現在の役員

| | |
|---|---|
| 理事長 | 後藤新平 |
| 副理事長 | 足立寿夫　佐々木逸雄　丹羽憲雄 |
| 理事 | 田中春雄　足立武良夫　長瀬盛久 |
| | 小林義弘　足立　楨夫　足立恭一 |
| | 足立三男　仙石　与　仙石　武 |
| 監事 | 松波秀夫　堀　定　光　安藤春一 |
| 職員 | 松波次郎　足立富右エ門 |

## 養蚕

田中松太郎

養蚕はわが国で太古から婦女子の内職として、各地で営まれていたと聞いています。あの青い桑葉のみを飼料とする虫が、はき出す生糸は、高級衣料、美術品又は装

飾品等として使用されている実に貴重な存在であります。

しかしその飼育法たるや実に幼稚であり、唯一の飼料たる桑が、畑の境界等にあちこち見受ける程度で喬木仕立ての捨て作りといった「イシマクワ」という品種です。これで自家用の副産物としてホンの僅かな繭をとり、糸にひき、「チャンコロハタゴ」で布に織り、京染へ出して、自分の着物なり羽織なりを作ります。

日露戦争の大勝利が世界中に響いて、日本の存在が認識されると同時に、良質な生糸が有名となり輸出品として明るい見透しがつき、国をあげて養蚕に力を入れるようになりました。わが前渡では加藤善太郎氏・丹羽太吉氏等が卒先して大量養蚕にふみきられたそうです。彼等は愛知県勝佐の倉知治右エ門先生に師事されました。その師倉知氏は群馬県・埼玉県等の関東先進地に数年間滞在して研究され、指導員の資格者で他日紺綬褒賞を受けられた方です。

畑を持つ者は桑を植えよ。家は開放して蚕の飼育場にせよ。家が狭い者は桑を売れ。養蚕一色の前宮村になってしまいました。私もご多聞にもれず養蚕家になりました。当時の飼育法は極めて過保護的で軟葉を細かく切り尚篩にかけて綿密に稚蚕に振りかけ、夜中にも給桑する等技術と手間の掛る方法であったが、蚕種専門学校学者の研究の結果、先ず発表されたのがメンデル遺伝の方則に基く一代交配種（日本種×支那種）あるいは（日本種×欧州種の黄繭種）によって、飼い易い、糸量の多いものが普及せられ、桑樹、蚕具等総ての改良を指導せられるようになって、将に養蚕王国時代となりました。この波にのって手一ぱい掃立て年間収繭二〇〇〆を目標とする夢を見ましたが、これが夢でなく実現したのです。年四回春蚕、夏蚕、秋蚕、晩秋蚕と連続のように思われますが、米麦農家の比較的閑期に折り込んでの労働力の配分となるので重労働にはならないようでした。盛食期の一週間は桑の取り入れに大童ですが、不眠不休ではありません。盛なるものは必ず衰えるの原則に洩れず、大正末期から昭和にかけて、化学繊維の第一陣人絹糸の改発により輸出生糸は頓に下火となり、従って養蚕には大きく響き経営難の見通しとなったので、一時休業とか中止とかいうことによって、兼業養蚕をやめることになった。



前渡では元来耕地が少ないので、兼業農家が大多数の部落であるために、気の変りも又早い。転業といったところで織物工業に転ずることは左程困難なことではないのでどこもかしこも、織機がにぎわしく回転をはじめ、純農家のみが単なる副業として飼育する程度になってしまった。

最後に桑取り入れの秘訣として天気予知法を記しましょう

田中松太郎

## 通俗天気予知法

天気予報を知ることは色々な作業に、行事に、又は旅行等に是非必要であり、計画を立てる大きな役割をもつものである。今は各種の観測機やあらゆるデーターによって十中八九までは的中する予報が日に何回も放送される有り難い時代となった。疾走する超特急が地震計によってストップする仕組になっているとは驚く外はない。

昔はそんなことは一つもない。太陽の位置によって推定の時をいい、古来からの言い伝え、永年の親天経験、その人の感などによって天気を想像したものだ。子どもの時の遊びに下駄を前方にぬぎすてて「アシタテンキニナーレ」と唱う。下駄が上むくと晴、下むくと雨、とやったり、水溜りに唾をはいて、広がると晴、広がらないと雨とやったりしたことを覚えています。

時（とき）の話をすると、今の二時間を一時（とき）十一時十二時を九ツ一時二時を八ツ三時四時を七ツ五時六時を六ツ七時八時を五ツ九時十時を四ツといい、二回繰りかえすと一日となる。

今も残っているのに子供のおやつ（八ツ）ということばがあるが午后二時のことだ。

地震は天気の変りを兆すという。

五七の雨に四ツひでり

八六風に九は病　　（病は曇を意味する）

六ツ時雨に傘持つな

九ツ上りは蓑笠を二階へあげよ

四ツでっかりは天気にならぬ

地震があって雉子啼けば揺り返えしなく
　　啼かぬ時は揺り返えしあると思え

晴か雨かを兆するものとして

彼岸太郎　八せん次郎　土用三郎　寒四郎

彼岸の入りの日即ち初日、八せんの二日目、土用の三日目、寒の四日目、この日は雨が降らない。若し降れば長雨となる。

入り降り八せんは旱り八せん。

夕焼は翌日晴、　朝焼は雨か風

朝霧は晴れる、　夕霧は晴れぬ。

夏夕焼南へ通らざれば雨近い

冬夕焼北へ通らざれば時雨となる

越前こがれは七日降

ひかた（南西）が晴れれば雪となる

雨が降って水がれ早ければ雨が近い

田や池の水が急に浅くなると雨が近い

蟻の宿替えは雨近い

日傘、月傘は雨近い

丑寅の雷鳴は雨が来ぬ　（丑寅は東北方）

南東の風で雨となり、西の風で雨晴れる。

冬の西風は時雨となる。

冬夕焼南に通り真赤にこがれる時は雪近い

たむし水むしの痒い時は雨近い

蛇が木登りすると雨が降る

日表の高い所に蜂の巣が多い年は台風は来ぬ

日裏の低い所に蜂の巣が多い年は台風が来る

夜上り天気は長持ちせぬ

地蔵大根　観音蕎麦

地蔵様は二十四日、観音様は十八日が命日であるから、大根は二十四日蕎麦は十八日、彼岸（秋）より前に播種すれば、災害がなく収量も多いというところから播種の適期をいいあらわした詞。

土用三日過ぎが大麦の旬（しゅん）

土用三日過ぎが大麦の播種適期

土用は四土用といって年四回ある。一月十八日・四月十七日・七月十九日・十月二十日

花卉に土用咲という種類がある。バラ、カキツ、



等でその頃に咲く。

営農上古来よく使われるのに、十方ぐれ・八せんということばがあるが、天候気象の変り目を示すことばらしい。

五月半夏（はんげ）は後七日、六月半夏は前七日

二十節期に半夏生がある。夏至はよく使われるが農民でない限りよく知られていない。

ここに用いている五月六月は太陰暦（旧暦）で、「農の五月」というのは百姓の一番忙しい時期を意味する、後七日前七日、同じ線になるが挿秧（田植のこと）の適期を意味する。

八十八夜の別れ霜

立春から八十八日目、霜はもうおりない、だから霜に弱い作物を植えてよろしいの意

暑い寒いも彼岸まで

これはよく使われます。

# 養蚕を語る

加藤嘉雄

四百余戸の前宮村で八〇％の三二〇戸が養蚕をしたのは昭和の初期であったことから、蚕糸業の歴史を極簡単に調らべてみることにします。

## 一、蚕糸業の意義

蚕糸業とは、桑苗、蚕種、繭、生糸の生産ならびに販売をおこなう業の総称である。

したがって蚕糸業は、農、工、商の三業にわたる特殊の産業であるが、農業的の性質が濃厚である。

わが国蚕糸業の終局の目的は、現在の国状よりみるとき、生糸及び絹織物を生産してこれを海外に輸出し、外貨の獲得を第一とし、国内の衣料の充足は従として考えねばならない。しかも生糸は純国内産である繭を原料としているから、輸出品としてはもつとも有利な地位を占めている。蚕糸業の中心である養蚕業は農家の一副業にすぎないが、農家の現金収

入および労働力の配分の面より見て、いちじるしく有利な地位にある。

二、蚕糸業の起原

家蚕の祖先は野蚕の一種である桑蚕（くわこ）である。桑蚕は日本、中国、印度などに古くから捉んでおり、欧州には見られなかったから、蚕糸業の起源は東洋であると考えられる。

三、わが国蚕糸業の歴史

㈠黎明期

我国の蚕糸業は中国、朝鮮より伝わったものと思われるが、日本書記や古事記などの古い記録によれば、遠く神代時代から養蚕がおこなわれ、歴史的に確実と思われるのは、仲哀天皇の四年に功満王（こまおう）が朝鮮から帰化して蚕種を献じて以来、中国、朝鮮などの帰化民が相ついで渡来し蚕糸業が伝えられたとある。下って聖徳太子の養蚕訓に

「蚕を養うは父母の赤子を育つる如くし、蚕を思うこと我子を思う如くせよ。寒暖、陽気の加減平生わが身にならって温からず寒からず、平和なる陽気を延ばし昼夜間断なく精力を尽すべし」

とあって、古代の養蚕技術の一端を参考とすることができる。

㈡中興期

しかしこの時代は絹織物は貴重品なりとして、物物交換用に、納税用に使用されていた。平安朝時代には文化が進んで、絹織物が上流社会に使用されだすと当時養蚕業が盛になる。醍醐天皇時代はもっとも降盛であったので中興期といえよう。

武家政治に入って、相次ぐ戦火にわざわいされて、全く衰微したが、織田、豊臣時代以後は国内の秩序が整い、徳川時代に入って、封建制度の確立によって諸大名が競って産業を奨励したので、絹織物を特意とする地方も生じている。

㈢興隆期

徳川時代の末期から明治の初期にかけて養蚕熱が高まり、安政六年の横浜開港によって、生糸輸出のみちが開けた。

蚕糸の貿易と蚕種の輸出の刺激されたことが、農家



の収入をはかるため副業として好適であることや、絹の衣料としての価値が生じたこと、政府の奨励したことの理由で、養蚕業は益々発達し、養蚕戸数や繭の産額が年々増加していった。

イギリスへの輸出を皮切りにアメリカを顧客とするに及んで、にわかに活況を呈した。

㈣発展期

このようにして、日本は封建時代から資本主義経済へと進むに及んで、蚕糸業は近代的産業として、絹業と別々の発展のみちをたどった。

第一次世界大戦以前のわが国の蚕糸業は、世界の経済変動の影響も受けることなく順調に発展していったが、大戦以後はアメリカの戦時景気の余波を受けて糸価もあがり、アメリカ絹業の発達とともに需要も急激に増加した。

しかしこの頃からアメリカにおける人絹が、いちじるしい発達と生産とをとげ、これが生糸の競争相手となって生糸の需要に大打撃を与えた。しかも日本の生糸は、アメリカでは大部分靴下の材料に使用されたため、糸質のすぐれたものが要求されるようになったので、それに応じた良質の生糸を生産するための蚕品種の改良、製糸機械や技術の改良などをはかって、人絹の圧迫に対抗する処置をとった。

とくに蚕品種の研究は、一代交雑種の発見とともに、養蚕技術の研究、栽桑法、飼育法などにいちじるしい進歩をみせたのである。かくして生糸のもつ風雅な艶や感触は完全に人絹を圧倒して、輸出品の大宗として重要な産業の地位を確保した。

㈤衰退期

このように発展した蚕糸業も昭和五年を頂点とし、翌年からはアメリカ経済界の不況の余波を受けて生糸輸出の数量を減じ、糸価の低落とともに繭価はひどく暴落した。その後世界的の経済界の不況はわが国蚕糸業界にも影響するところ多く、繭価は低落の一途を辿り、養蚕経営は漸次縮少されるのやむなきに至った。政府は補助金を出して桑園を整理させ尚進んでは桑樹の抜株によって食糧増産の誘導にまで転換の余儀なきに至ったのである。

| 年次 | 桑園面積 総数 町 | 桑園面積 畑地に対する% | 養蚕戸数 実戸数 | 養蚕戸数 農家戸数対% | 繭生産数量〆 |
|---|---|---|---|---|---|
| 一九一〇 | 三三九、九七二 | 一三、七 | | | 二七、二三三、三三〇 |
| 一九一五 | 四五三、八〇二 | 一五、七 | 一、六七三、七六〇 | 三〇、二 | 四六、四七四、二八〇 |
| 一九二〇 | 五四四、四二一 | 一七、五 | 一、八九四、八四三 | 三四、〇 | 六三、三三一、五三〇 |
| 一九二五 | 五四八、三〇七 | 一八、五 | 一、九四八、七〇六 | 三五、一 | 八四、七九九、七九六 |
| 一九三〇 | 七一四、一七六 | 二六、三 | 二、一一六、〇一七 | 三九、六 | 一〇六、四六三、五一六 |
| 一九三五 | 五八二、三三七 | 二〇、五 | 一、八九四、六四七 | 三三、八 | 八三、〇六六、〇五三 |
| 一九四〇 | 五三三、九一九 | 一八、六 | 一、八四五、〇三〇 | 三〇、〇 | 八七、五四六、三八五 |
| 一九四五 | 二四二、〇八六 | 一〇、三 | 一、〇〇四、二四八 | | 三二、五六九、五五二 |

昭和五年前宮村の養蚕調査

桑園反別　桑葉採集量　同上価格

九四・九反　三四九、六七七〆　一三二、三一二円

養蚕戸数　村総戸数　春蚕飼育戸数　夏秋蚕飼育戸数

四五三戸　三三〇戸　二九八戸

掃立数量　一九、〇四三〆　二八、〇四二〆

収繭量　正繭　玉繭　屑繭

二七、四六五〆　二、一〇八〆　一、一二二〆

価格　七九、一八五円　三、六四三　七八五円

昭和七年の春蚕調査

養蚕戸数　白繭種　黄繭種

二五〇戸　三、九八一〆　一四、七〇八〆

| 種別 | | 白繭 数量 | 白繭 価格 | 白繭 単価(一〇〆) | 黄繭 数量 | 黄繭 価格 | 黄繭 単価(一〇〆) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 上繭 | | 二、一五〇〆 | 五、三七五円 | 二円五〇銭 | | | |
| 玉繭 | | 一三八〆 | 一三八円 | 一円〇〇銭 | 七、三五〇〆 | 一八、三七五円 | 二円五〇銭 |
| 屑繭 | | 七二〇〆 | 五〇四円 | 七〇銭 | 二五六〆 | 二五六円 | 一円〇〇銭 |
| 計 | | 二、三六〇〆 | 六、〇一七円 | | 二三〇〆 | 一六一円 | 七〇銭 |
| 計 | | | | | 七、八三六〆 | 一八、七九二円 | |



養蚕業の推移として記録せなければならんことは

一、栽桑法の改良と品種の改善

二、肥料管理と病虫害の駆除法

三、蚕種と飼育法の変遷　等々

重要条件が沢山ありますが、やがて養蚕家ゼロになる校下の現況であるようですから、割愛することにいたします。

最近の養蚕家

| 年次 | 山脇 | 下切 | 前渡 | 西町 | 長平 | 両内野 | 北島 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 昭和四〇年 | 二 | 二 | 四 | 一 | 一 | 五 | 一 | 五 |
| 同 四五年 | 〇 | 一 | 四 | 一 | 一 | 三 | 一 | 〇 |
| 同 四七年 | 〇 | 〇 | 三 | 〇 | 〇 | 一 | 四 | |
| 同 四八年（予定） | 〇 | 〇 | 一 | 〇 | 〇 | 一 | 二 | |

## 畜　産

村上梧楼

畜産は頗る幼稚であるという一語につきますが、ゼロではありませんから二三の数字をあげてみましょう。

明治大正を通じて、家畜の数は極少なく、農家の庭先に二三羽の雞が遊ぶという程度で、たまたま春先きに母雞孵化の十羽が物珍らしいということです。

農地が狭少であるために農耕用に牛馬を使用することもなく大正末期の統計によると、

| 種類 | 乗用 | 農耕用 | 既肥用 | 運搬用 | 蕃殖用 | 搾乳用 | 取肉用 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 牛 | | | 3 | | | | 2 | 12 |
| 馬 | | 1 | 2 | 5 | | | | 11 |
| 豚 | | | 10 | 3 | 7 | 5 | | 30 |
| | | | | | | | | 45 |

乗用馬は時の村長村上文雄氏の愛用で役場の出仕にも岐阜市の郡事務所、県庁への公用に颯爽たる乗馬姿はその頃の呼びものとして有名であった。

運搬用の馬は荷馬車で、運搬を専業にしており馬車引と呼んでいた。現代のトラックの前身といえる。

既肥用に飼育する牛馬豚は、田畑の肥料を目的として自家餌料のみで養なっていた。

現在の家畜飼育は大量でなくてはソロバンがもてぬということになって、片手間位では及びもつかず、専業的にやらざるを得ない状態であります。従って少ない戸数

で大量飼育となりますが、一面餌料の高価と、公害問題で集団飼育場を経営しなくてはということになります。決して明るい見透しではないと思います。

| 飼育戸数 | 搾乳用 | 藩殖用 | 取肉用 | 採卵用 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 牛 | 3 | 45 | 6 | | 51 |
| 豚 | 10 | | 400 | 2,000 | 2,400 |
| 雞 | 7 | | | 4,000 | 7,000 |
| | | | | 3,000 | |

豚も雞も時期的に頭数の変動があって正確な数字とは言い難いと思います。

日比野静夫

## 養豚

### 一、養豚の変遷

本村内の養豚は明治大正を通じ昭和三十五年頃までは事業としての規模も小さく、技術的にも幼稚にして農業の一部門として飼育したるも、基の経済的ウエートは小にして家庭の残飯や残菜を利用したるに過ぎず。飼料も糠や醤油粕にして養分総量とか可消化養分とか飼料の効率等の考へはなく、繁殖又は肥育等に付ても関心も薄く、其の種豚の頭数も一頭から三頭までが大部分であり、豚房も一豚房一間四方に過ぎず屋根はトタン葺きにして、床は地面より一尺程の素堀りにして周囲を丸石で積み、農家は自給肥料の供給源としての飼育であり、品種は昔からの中ヨーク種にして、其の後昭和三十五年末期に至り食肉需要の変遷によりて、肉質良好なバークシャー種を導入雑種強制の長所を利用良肉産出の為め一代雑種を育成す。之がF1の初めなり。されどバーク種の肉質良好なるも繁殖能力の低き欠点あり、次第に其の数も減少するに至る昭和三十六年スエーデンより新品種ランドレース種の種豚が直輸入され、其の純粋種やヨーク種にランドレース種を交配し一代雑種を作出YL之なり。当時別に米国より新品種ジュロックジャーヂー種（赤豚）一部に取入れられたるもラード型品種の為二、三年にして止む。

昭和三十七年五月埼玉県埼玉養豚場より英国系ランドレース種導入、其の交配種は従来の中ヨーク種と



比較し成長も早く繁殖の場合其の泌乳量抜群にして性質も温順産児数も多く保育能力上々なれど、只欠点として後脚の弱さあれど、育成期に於ける飼育方法如何に依り其の欠点を補う事可能と考へられる。

其の後ランドレースの導入は全国的に拡大され数十年の歴史を持った中ヨーク種は昔日の面影なく全国飼養頭数の十数パーセントとなる。昭和四十年更に新品種として英国系大ヨーク種や米国よりハンプシャー種導入され、ランドレースにハンプシャーを配しLHの一代雑種や夫れを種豚にし大ヨークを交配し、LHWを作出し需要に対応し品種改良に飼育技術の向上等、其の進歩著しく昭和三十五年頃と比較する時転感慨無量なるものあり。昭和四十六年現在養豚戸数二十五戸年度額数千万円に及ぶ。農業経営型体の重要位置を占むるに至り、年中繁養種豚も弐百数十頭に及ぶ従来の養豚型体は繁殖養豚にして子豚を育成し、鵜沼、扶桑、今渡等子豚市場に出荷販売したりしが、数年前より繁殖より肉豚肥育へと一貫養豚家出現、耕種農業より養豚農業へ移行し、食肉供給源として益々研究と増産に躍進又躍進止る処を知らず彼岸の栄光を夢みて。

一、経営規模

イ、耕作農地　田　三二a　二毛作田
　　畑　七〇a　樹園地を含む

ロ、養豚　種豚　一八頭　種牡一頭を含む
　　品種L。八　LW。二
　　LH。四　W。一
　　Y。一　LH。一育成
　　W♂一。

ハ、労働力　一、五　男一。女〇、五

二、設備　豚舎、三〇坪　子豚舎
　　一〇坪　種豚舎
　　一三坪　分娩豚舎
　　四坪　飼料舎

ホ、機械　サイロ　二基　サイレージ用
　　耕運機　一　トレラー付
　　紛砕機　二
　　モーター　一　二馬力

脱穀機　一　全自動
籾摺機　一　全自動

ヘ、年間延労働時間

養豚　三〇〇〇時間
農耕　三五〇時間

決算額　六、一二五、一三〇円

売上高（粗収入）

四、五一五、九四〇円　子豚販売高
一五七、九八一円　種豚処分（廃豚）
一〇八、〇〇〇円　米
一五、五〇〇円　稲藁等
七二、五〇〇円　緑餌
一、二九五、九四〇円　期末棚卸高
六〇、三四七円　価格変動準備金

合計　六、一二五、一三〇円

決算額　六、一二五、一三〇円

経費

一七、三八五円　公租公課
三五、九〇〇円　種苗費（自給 購入）
二六、一六〇円　肥料費
二、七六七、〇七五円　飼料費（購入 自給）
一四、七一一円　小農具費
八一、六四〇円　修理費
二〇三、四〇〇円　衛生費（添加剤を含む）
二九、四一〇円　農業薬剤費
六二、五七〇円　動力光熱費
九、六二〇円　消耗品費
四、〇六〇円　作業被服費
三〇、〇〇〇円　賃借料
一一、七〇〇円　運賃
四〇、七〇七円　水道水利費
三、三六三円　支払利息
二九、三二八円　通信費
三七、五〇〇円　種付費
八五、四〇〇円　福利厚生
一〇八、六九四円　減価償却費
六、〇三〇円　賦課金
九、五〇〇円　交際費
四、九〇〇円　研修費



一、三三八、七五〇円　期首棚卸高
七〇、〇〇〇円　価格変動準備金
三九〇、〇〇〇円　専従者給与
一三二、五五〇円　雑費
五七四、七七七円　労働費

合計　六、一二五、一三〇円

飼料費内訳

一、九〇八、四九五円　子豚購入飼料費（年間）
五五二、六四五円　種豚購入飼料費（年間）
一七三、五〇〇円　種豚自給飼料費

繁殖現況

四一回　年間分娩回数
四四五頭　年間産児数
三七七頭　年間成育頭数
八五％　育成率

# 水　産

足立輝男

先祖代々木曽川右岸地区に住居していながら、漁業を営業として生計を立てているという人はこの地区にはないようです。けれども趣味の漁師（りょうし）は相当数に及んでいるように思われます。時期的には趣味が転じて金儲けになるというケースもあります。八月九月の鮎猟がその主なものです。

## 漁業組合

木曽川長良川下流漁業協同組合が組織されています。この組合は正組合員四〇〇名余で、年々鑑札を受けて、時期的に組合員となって魚漁を楽しむ遊漁者と称する准組合員が三〇〇〇人以上あります。

管轄区域は鵜沼・坂祝の境界地点から始まって、千本松原四粁下となっています。下流で長良川が合流しますから、木曽川長良川となっているのです。組合員の拠出金と鑑札料、そして県の補助金を受けていますので、色々事業を実施しています。

## 魚　類

水清ければ魚住まずとか申しますが、昔は清流に手でもすくえる位、ごったがえしていた雑魚が、近頃は公害によって魚の影が見られぬ程に減少しました。でも川です。淡水魚は捕る方法によって、とれますから始めたら中々やめられぬものです。

鮎・鯉・鮒・鰻等は毎年放流しています。雑魚としてシロハエ・スナクジ・川エビ等がいます。大体上流には鮎が最も多く、下流地域には鯉・鮒・鰻・鯰等が多いのです、ボラ・川マス・イグイ等が相当上流にまで上ってくる事があります。

魚類の習性として上へ上へと登る性質のもの、海へ海へと下る性質のものがあることは皆様の御承知の通りです。この性質を知って時期と場所をうまくキャッチして猟をするのが漁法のよい所です。

## 漁　法

釣り　釣りは年中誰にでもやられます。北風の強



い寒中に手拭で頬被りして釣糸を垂れる寒釣りはいかがです。その魚の捷む所を見つけて、その魚の好む餌を釣針につけて気永に待つ味は又格別です。ウキを引いた瞬間に手早く操るあのコツこそ素人に教えて教わらぬ妙味です。太公望など申しますが、気永に待つウキの動きこそ釣りを始めたらやめられんというところでしょう。

蚊がしら　五月から六月にかけて浅瀬でやります。明日は雨というような夕刻によく釣れます。普通日沈前一時間というのが適期です。それは魚が夜になるので早く餌をと欲する時期なんでしょう。これにもコツがあります。同じ場所で釣っていても一人は一〇〇尾一人は一〇尾という大差が応々にでます。

どばがけ　八月末から九月にかけて、上る鮎をひっかけるのです。浅瀬がよろしい。郡をなして上る鮎を十幾本の針を仕掛けた糸を流して引っかけます。頭といわず尾といわずに引っかけられるのです。素早くはずさないと銀鱗を見ただけで水中に落してしまうという悲劇が多いので上手に籠に入れないと駄目です。流れの相当強い股までもある深い所に立って一〇㎞もある竹竿をふり廻して釣を楽しむのも趣味とはいえ決して楽ではありません。

中ろう網　舟を使って鮎群のいそうな上流に網を張り、ガリガリ音を出して鮎を網の方へ追いまくり網取りの方法ですが夜松明やガス灯を使って鮎を追います。

夜川網（ひぶり）　岸近く網（テーナ）を張って、松明で鮎を追いあげ網にかけるのです。勿論夜の仕事ですから川岸の地形や深浅状態などをよく知っていることが条件です。一網二三十尾もあれば夜の更けるのも忘れて三粁も五粁も遡ることがありますが、時にはゼロの夜もないではありません。

## 料　理

色々な方法でとった各種の魚は淡水魚とか川魚として評判がよく、夫々の料理によって食膳を飾ります。塩焼蒲焼・甘煮・てんぷら、刺身などが普通で、小魚はいかだばえとして喜ばれ、つくだ煮として保存食品に数えられています。

## 養　殖

川が汚れて魚が減る、魚の影も見えぬといわれることは、いかに公害をやかましく言っても昔にかえることはありますまい。してみると稚魚の放流が無駄であるとは言いきれませんが、安全性のある池を作って鯉鰻海老、などを大量に生産し、又一方釣を楽しむ客に満足を与えようという考え方もあって、組合では各所に人造池を、計画して、それぞれの稚魚を放流して養殖しようと準備を進めています。約り場の経営も見逃せない問題です。交通機関と場所も考慮の中に織りこんでいます。

## 水　防

水産を語った付記として水防事業を紹介します。全国どこも河川の堤防を守るために水防組合が設立されています。河川は古来内務省に属していましたが、今は建設省の管轄になっています。木曽川については川島町に「建設局木曽川出張所」があります。

明治初期からでしょう？笠松以東木曽川水防組合が設立されていて、不動山を起点に岐阜県側を守っています。不動山の麓からの堤防に沿って川の側に石積の石堤があって三〇〇m位で終っています。猿尾といって織田信長時代に丸石ばかり積みあげて堤防にしたという話です。万一堤防が欠潰して冠水だけにとどまらぬ流失さわぎになったら大変なことになるからその地域の人は組合員であり組合費を納めています。

前渡下切地区・上中屋松本地区といった具合に笠松まで六地区あって、堤防上に水防倉が立っています。一地区に水防長一名と水防夫三〇名となっています。水防倉には万一の場合の備えとして土のう材料や流木材料それらに使う器具類、縄・鋸・鎌・斧等が格納されています。この単位組合が各河川にあって、木曽川筋の組合、河川筋の組合となります。この組合を県が統率して一本となり、東海三県である愛知岐阜三重が連合会を組織しています。年一回岐阜県の合同演習があり、どこかの川へ集合させられます。又三県の連合演習も交互にやられますので、三年目毎に県の当番年ということです。

上流にいくつものダムせきどめが出来又下流の改修によって、安全水位のオーバーなどちょっと考えられませんが、何百ミリという集中豪雨に見舞われると予想もつかぬ鉄砲水がないとは断言できません。災難は忘れた頃にやってくるとかいわれますので、備えよ常にで水系につきものの水防態勢を極簡単に記しました。



## 揚水用水（西区）

加藤嘉雄

古来この地域は水田の少ない土地で、一戸平均一反歩と聞いている。深い山もなく、原野の各務原から水源を求める程度で、全くお天水田といわざるを得ない。

荒井山の裏に大釜、小釜の両池があり、これから流れ出る水が一番大切な用水、各務原の南端から湧き出る清水が三ヵ所、喝をいやすに足る程度の清水が、田の用水とは聞いてあきれる話でしょう。細い溝で水を引き、我が田の所で畜め、馬穴で汲み込むという幼稚なやり方、これを我田引水（がでんいんすい）といったものです。

大正八年から各務原が陸軍飛行場として、各所に散在する松林は伐採され、百曲り溝も姿を消し、整地されて鉄砲水的に降雨直後どっと流れ出て、あとは露もなしという具合に変化してしまった。木曽川端に在りながら、この水は一滴もよう使わず、使いたくとも国の大事業で容易に手も足も出ない、国に呼びかけて用水路を築くよう陳情する術もなかったらしい。年々干魃のため、多労少益の憂き目を繰り返すのみであった。

悩み抜いた挙句、昭和十年頃から揚水用水の議が起り先進地数か所の視察をしたりして、漸く発起人会が成立した。村長仙石藤治郎氏を先頭に

一番地　足立五三郎、足立仙吉、小野木紋一
二番地　長縄吉十郎、足立文司
三番地　松波米三郎、足立勇造
四番地　五島久太郎、加藤善太郎、長瀬義夫
五番地　長瀬　春作、田中兵四郎
六番地　田中　源二、田中源之進
下　切　仙石　興助、仙石　藤吉

諸氏の当時の長老連が幾回となく協議し、昭和十六年

に着手した。

水源地の井戸を、字中畑一二五五番地に二畝十四歩借り受け（現前宮保育所の西服部三郎氏の屋敷）

直径　三メートル

深さ　十五メートル

の井戸を掘り、八インチ鉄管によって、三十馬力のモーターで汲み上げる方法である。照る、降るに影響されて水位が常に変るから、ポンプ位置を移動せねばならぬ。ワイヤー巻によってその作業をする。チェンブロックを使う、梯子で深くはいる、却す揚げるで大げさな仕事、五月から九月までは役員はつきずめという位。

溝も従来の土堀溝では切角の水が逃げてしまうから、コンクリートで巾六〇センチ、深さ六〇センチの幹線溝を作って、供水が始まった。

給水区域は字飯山、神明前、代官田、大釜、一色、沢尻、巾下、大島、横枕位で三年四年五年と逐次延長した。長田、仲張、下切大島、松本大島、山脇南大島まで位で約二十五町歩の灌漑が可能になった。秒何トンの水を汲みあげたかその記録が全々見つからない。

これでも真夏には満足できない。二日目三日目毎に給水地城の字を変えたり、昼夜を分って給水したり、役員が巡視したりで、様々な方法が繰り返えされた。

機械は雨ざらしにはしておけないので番小屋を兼ねて長十米、巾四米八十の家を作った。

年中番をする必要があるけれども、中々番をしてくれる人はない。終戦となると機械やら部品やらを盗難にあう心配が生じた。仙石村長は物色中村内にない理髪屋を求めてここに住んでもらい、番をしてもらおうということにした。幸にも岐阜市出身の海軍復員軍人服部三郎氏がこの要求に応じてもらえることになったので「やれ安心」ということになった。羽島用水完成後この揚水用水水源地は不要になったので、道具一式を掃い下げ、土地は服部氏の希望によって分譲した。

こうして揚水用水は終止符を打ったのである。

記念碑　昭和三十一年十一月時の用水組合長仙石藤治郎氏の発案によって衆議院議員野田卯一先生の揮毫になる記念碑で水源地に築山を築いて建立されたが現在は前渡西町の村社神明神社の境内に移転してある。

（昭和三十九年最後の組合長之を録す）



## 灌漑用水（東区）

日比野静夫

往年東区八町歩の用水は主として両内野三軒屋地間の葭池の水を以て之に充当したりしに隣接せる各務原に大正六年六月所沢飛行場より徳川大尉滝川中尉塔乗のモ式複葉飛行機弐機飛来せるを創として爾後大正九年拾年頃より飛行場の建設が初められるや附近一帯の森林は悉く樹木を伐採され飛行場として使用されるに至り水源を失いたる段池は其の後全く用水たるの価値を失う玆に漸く用水路開鑿し南部を流るゝ木曽川よりの揚水の必要を感ずるに至れり乃ち丹羽芳太郎氏等発起人となり村会の承認を経電力に依り小山地内南部に揚水所を設け揚水する事に決し大正十四年東区事業として着工す同時に段池九段歩を埋立て耕地となせり

小山揚水場より段池に至る水路延長千八百米中八十糎にして費用節減の為既設の排水路を利用し又は畑の一部を利用し加るに素堀の為決壊や漏水等甚だしく水路周辺の畑耕作者より苦情絶えず従って田への灌水量減少し田耕作者よりの苦情又多く灌漑の用を達する事能ず九千円の費を投じたる本事業も遂に不成巧に終れり憶うに工事計画書の不充分なりし事もさる事ながらかゝる折よく村民の一致協力して事に当らざりしは返す返すも遺憾なり其の後は専ら雨水に頼り不安定な耕作を続けたりしが昭和五年（?）丹羽一郎氏等発起人となり三軒屋儀平庵前に揚水場を設け再び灌漑せり此度の計画は三十馬力のモーターに八糎の揚水管にて堀抜きに依る揚水の為水量多く加るに揚水場より田迄の距離も約百弐拾米にして中約参拾糎のコンクリート水路を設置したる為洩水もなく成巧せり爾来水不足の声を聞かず四拾年近く利用羽島用水が流れるや揚水組合も解散し今日に至る昭和参拾九年羽島用水建設の話起るや前宮地内の土地改良事業計画進み往年の食糧消費村は一変して自給自足の村となり今日に至る。

# 羽島用水と土地改良

永井行正

私の村は畑田を合せて三〇〇ヘクタール程の小農村でありました。故に工業即ち機屋も多く半工半農の村でありり田は僅か東区西区にて七ヘクタール位でありましたので、当地は主食としての米の生産も少なく農家と云っても米を買う家ばかりでありました。

田は昔ながらの天水で乾魃して米のとれない年も多く困って居り昭和初年に井戸の揚水の用水を行なう様進んで来ました。併し之れも木曽川水位の低下によって灌漑に支障を来たして参りました。

亦昔ながらの小さい区割で昭和の御代の機械化農業を行なう事の出来ない状態でありましたから、土地改良の必要を感じて居りました折り、たまたま羽島用水も木曽川の水位低下で今までの上中屋取入ではだめになり鵜沼南町南岸に用水頭首口を設けなければ充分なる用水を使う事が困難となったのであります。羽島用水組合では止むを得ず上流に取入口を造る事に決定し、私達の村を縦断する事と成り協力方の申込がありましたが土地所有者は仲々承諾を致しません。用水敷地の用地分が減るという地主の考え方に困ってしまいました。そこで当時農業協同組合長永井行正を始め丹羽一郎氏田中松太郎氏加藤嘉雄氏等が此際土地改良を行って前述の困難を排したいという意見があり羽島用水組合側からも是非ともという要請があって土地所有者（羽島用水敷地に掛る人）と一般の方々と話合い両者の意見が纏り土地改良区設立にふみ切ることができました。昭和三十六年初めより度々相談し設立委員を産んで組合組織造りに努力し昭和三十七年八月十七日土地改良事業の認可を得て事業に着手致したのであります。

設立認可昭和三七年八月一七日

工事着手　昭和三七年一〇月

完了　昭和四〇年　五月

総経費　一二二、三五九、〇〇〇円

供入金　四八、七八〇、〇〇〇円

補助金　三一、八五一、〇〇〇円



賦課金　四一、七二八、〇〇〇円

合計　一二二、三五九、〇〇〇円

反当経費　一〇六、三〇〇円

反当賦課金　三二、六〇〇円

従前の土地

| 筆数 | 地目 | 地積 |
|---|---|---|
| 一、七八六 | 田 | 四一九、二二七m² |
| 二、二二一 | 畑 | 七七三、九三六 |
| 六六 | 山林 | 四一、八二三 |
| 三六 | 原野 | 二九、二六六 |
| 計 四、一〇九 | | 一、二六四、二五二 |

換地

| 筆数 | 地目 | 地積 |
|---|---|---|
| 一、二二〇 | 田 | 七五〇、八六九m² |
| 七六五 | 畑 | 四〇五、一七六 |
| 一一 | 山林 | 九、一四三 |
| 九 | 原野 | 一六、一〇二 |
| 計 二、〇〇五 | | 一、一八一、二九〇 |

理事（当初）

理事長 永井行正　副理事長東部工事主任 小沢珣一　村上梧楼　丹羽一郎

田中松太郎　長瀬寿一　副理事長西部工事主任 加藤嘉雄　足立明道

足立仙吉　副理事長若宮地区工事主任 仙石茂　岩井寿松　佐藤藤吉

小島啓一（準理事）永井元一

監事（当初）

松波民市　丹羽栄　仙石昭治

請負業者

松野組　本巣郡穂積町

大野土木　美濃加茂市

堀組　各務原市那加町

南谷組　羽島市

東海建工　岐阜市

本土地改良の道路は幹線道路五m支線道路四m道路と通路間隔八〇m特に必要なる道路一〇m河田地内に於ては中間に二mの道路を設ける。

水路　幹線水路巾員一・七mから下流にては二・〇m～二・五〇mとなる支線水路巾員一・〇m～一・八〇m

用水路　幹線用水路は羽島用水よりの取入口より巾員〇

・四〇m～〇・四五m高サ〇・五〇m
支線用水路は〇・三〇m、〇・二五m、〇・一八mのU字溝を以て伏設す。

## 簡易水道（西）

田中松太郎

昭和二十八年の十月頃、私の部落前渡西区六番地の或る集会の席上で、井戸水が渇れはじめて困っているという声が数多く出て、地下水位の低下によるものだからなんとか考えなきゃ、と話は進んで簡易水道布設の動議となり、わたくしに責任をもって計画を樹てて欲しいと要望を受けました。

ちょうどその時は、部落からおされて村会議員に出ておりましたので、期待に応えるのはこの事業だ、と思い堅い決意で引き受けました。

そこで二、三名の有志と、当時の県会議員水野後八先生を訪ねてこの趣旨をお話したところ、それは時代の要求にこたえて良い着眼だ、僕が大先生を紹介してやる、といって設計会の権威者として有名な安部源三郎技師を案内して、設計を依頼して載きました。安部氏いわく、県も国もこの事業に補助を出したり、起債も許可したりして奨励しているので、申請が殺到してくるから、切角だからもっと規模を大きくして、早くまとめて来いと勧告されました。

早速部落に諮り、賛成を得て隣りから隣りへと、かん誘したところ、西区一円はもとより下切区までも仲間に入れてくれと予期以上の広範囲となりました。その間二週間、早速安部技師に設計方を申し入れました。技師は



直ちに現地調査を実施され、水源は木曽川流域の松林、貯水池及び圧力タンクは矢熊山の中腹にと指定され、設備次第では東区にも配水出来ると促がされました。

ちょうどその頃、東区でも既に永井行正氏、小沢寿平氏等が中心となり北島、両内野両区が結束して水道事業が計画されており、長平区もなんとかしたいと話題になっており、たまたま丹羽一郎君が前宮農協の理事長として常勤して居られたから、私の意中を話たところこれまた二三日待ってくれといって直ちに部落に諮られ、これも一晩で話がついたから頼むといって、極めて順調に話は進んで行き、以上の範囲で発足しようとした矢先きに水野先生から、一村から二つの組合では県当局が困るから何とか一つにはならんか、でないと認可がおくれるおそれがある、と内通が有ったので両組合の発起人が合議し、名称を前宮簡易水道組合として発足することに一決して、設計及び申請書等一切を安部先生に一任することにして、設立総会を開催する運びとなりました。

なお計数的なことは省略し、次のような内容の記事を印刷して、村内一円に配布して、理解と協力、併せて組合加入を進め承諾をとって計画を進めました。

## 前宮水道のあらまし

一、水源の位置及取水量

水源は稲羽町前宮地内矢熊山の南部松林内で鉄管経八吋を深一六・五〇米打込み木曽川の伏流水を汲揚ぐるものである。取水量は一日最大給水量五四〇・立米を昼夜連続取水するとして毎分三七五リットルである。

二、給水区域及給水量

給水区域田前宮村の内字山脇を除き全地域である。

給水量一人一日最大給水量一五〇リットル（八斗二升五合）給水人口三、六〇〇人

是は過去五年ヶの給水区域内人口の増加率によって十五ヶ年後を計算し余裕を見て三、六〇〇人とした。

三、各種構造物について

(イ)水源

前途の通りで鑿井管に内経四吋管を連結して即筒により矢熊山の配水池に送水する。

(ロ)ポンプ室及室内設備

ポンプ室は内経三米の二階建鉄筋コンクリート造りである、又それに接続して間口二・五米奥行三・〇米の同じくコンクリートで原動予備室を建築する。何れも木曽川の計画洪水位を考慮して設計してあるポンプモーターは一階に据付てある。ゐのくち六五耗S川M。B型一〇馬力電動機直結及ベルト掛兼用三段タービンにて予備器亦同じである。

予備動力　ヤンマーILDL型十五～十六馬力型

単気筒無気噴油式ヂーゼルエンヂン一台を据付け停電時揚水に備えてある。

(ハ)滅菌室及滅菌機

ポンプ屋二階を滅菌室とし、滅菌機は二五二W二五二A塩素滅菌（東式）で自動始動停止装置付である

(ニ)配水池

配水池は水源地より三二・〇米の高所即ち矢熊山の西側中復に内経六・〇米有効水深三・二〇米容量九一、〇立米で構造は鉄筋コンクリート造で四時間分の給水量九〇立米を入るものである復蓋上に厚三〇糎の盛土をなし水温の変化を無くし尚換気筒及バルブ室を設けてある。

四、鉄管の布設

鉄管は総て亜鉛鍍鋼管を使用した

(イ)送水管延長　九五四・〇米　内経　四吋

(ロ)配水管延長　内経　配水管延長　内経

三五七・五米　四吋　三五九・〇米　三吋半

一、〇一三・〇米　三吋　二、四五〇・〇米　二吋半

四、九五〇・〇米　二吋　二四七・〇米　一吋半

二、五〇〇・〇米　一吋　七四〇・〇米　3／4

一六、八〇〇・〇米　1／2

五、消火栓

総て地上式とし二吋半を三十一ヶ所給水区域内要所に設置した消火の場合は最高二五・〇米最底一四・七米の高に揚水し得られる。

註　設計上にあるとおり一人当り一日の使用量は八斗二升でありますから家族を乗じた量を基準として



なるべく乱費しないよう御注意願います。

## 簡易水道（東）

丹羽一郎

水道になったら便利になり、衛生的で、作業能率もあがるだろうということから、西町六番地で、簡易水道をひく話がもちあがった。

それなら、我々も仲間に入れてもらいたいと、次々と申込みがあり、前宮地区全体に広がって、前宮簡易水道組合ができた。

村会議員の人々が中心になり、当時の村の予算と同等ぐらいの経費をみつもって計画された。

パイプは日本鋼管から、貨車に十ばいぐらい直接購入をした。購入した後に、すぐパイプの値上りがあり、結果的に値うちに購入できた。ポンプも名古屋から直接購入するなど大掛りな工事が始まったのである。

工事は会員や役員の奉仕によって進められ、ほぼ一年近くかかって完成をし、水が出るようになった。

すると、すぐ水不足に悩まされた。水道が珍しいからどんどん使ったこと、また、井戸が東町の川原にあるため、西町の方や三軒屋の一部分では、水が少なくなったことなどを考えて、もう一つ大きな井戸が堀られた。

水不足の原因には、メーターが取り付けてないために節水をすることがなく、無駄使いが多かったことも考えられる。おもしろい話がある。メーターがないから、水が自由に使えるというので、田んぼに水をひいたり、畑に水をうったり、水を大量に使って、苗づくりをしたという人もあったそうだ。

普通の家庭では台所、風呂場、洗面所の三か所ぐらいに蛇口を取り付け、それ以上は料金を高くし、節水を呼びかけたため、水道の使い方がわかってきた。

最初に堀った井戸水の出が悪いことから、西町の方にも井戸を堀ろうということになり、学校の西に井戸が堀られた。これで一応、水不足は解消された。

いろいろな問題があったが、簡易水道をひいてよかっ

たなという実感である。

# 市水道

永井武男

わが各務原市は、昭和三十八年四月一日隣接四町（那加町、稲羽町、鵜沼町、蘇原町）が合併した新進都市で岐阜市の東南に位し南部は木曽川右岸に接し、東北部は小丘陵地をなしているが、地勢は概して平担である。

本市上水道は、昭和十六年十二月、旧那加町上水道として認可を得、戦時中に施行されたもので配水管は総べてヒューム管が使用されていたが、年を経て配水管の各所に折損、漏水事故が頻発し、また配水も圧力タンクによる方法を採っていたが、施設の老朽化に加えて給水量は施設能力を上廻ったため、全面的に改革の必要に迫られ、昭和三十五年十二月（旧那加町当時）変更認可を得て各務原市発足時も変更工事の継続中であった。

市制施行による行政区域の拡充に伴ない人口の増加と産業の開発は目覚ましく市の中央を縦走する国道二十一号線並びに、国鉄高山線、名鉄各務原線等交通至便のため、既設航空機工場、織物工場は勿論、関連産業の進出に金属工業団地は操業を開始し、人口も年々増加し、新給水区域への給水も加えて給水量は日日増加の一途をたどり、今後市勢の発展と共に大巾に増量されるものと思われ、この様な現状から都市衛生上、防火上の見地から計画を変更し給水の円滑化を計ると共に、簡易水道を統合し、経営の合理化を計るために計画を変更したのである。

市制施行の昭和三十八年四月一日現在の水道設置状況は旧町各種多様な施設で、上水道一、簡易水道四十三、特殊水道十二、専用水道九といった小区域毎に数多い各種の水道が設置されていたものであるが、そのうち那加広域、小佐野、前宮、成清栄町、上中屋町、神置町、同町西、松本町、大佐野西、上戸町、上中屋中部、上中屋、三井町宮西、北成清、成清南、三井町、小佐野南、大佐野東部、同町南、大野西部、三井町西部、下中屋中部、



同町新田、大野町七、八班、地区簡易水道事業は、この上水道第二次拡張工事による給水開始の日をもって廃止するものである。

二、計画の内容

(1) 給水人口四八、〇〇〇人（目標年次昭和五十年）

(2) 給水量　イ　一人一日最大給水量　二五〇ℓ／日

ロ　一人一日平均給水量　一七〇ℓ／日

ハ　一人一時間最大給水量三七〇ℓ／日

(3) 総工事費　二二〇、〇〇〇、〇〇〇円

〝第二回　上水道計画変更〟（昭四一・一二）

一、変更計画を必要とした理由

本市の上水道は、那加、稲羽地区に対しては、昭和三十六年度より五ヶ年継続事業として拡張工事に着手し、近く完成の運びとなりのこる蘇原及び鵜沼地区は、簡易水道事業が多く統合の必要を感じつつここに至ったのであるが、この地区には川崎航空機岐阜製作所をはじめ日本毛織、天竜工業等五十数社の会社、工場が存在し給水申込みは年々増加してきたが、当時の各簡易水道施設ではこれに対処出来なくなり、新市建設基本計画に基づき既設の簡易水道事業を逐次統合し、整備して、第二上水道事業として施設を拡充し、給水量を増加して産業の発展と公共福祉の増進を図るはもとより、統合により経営を合理化のためこの計画を実施した。

二、計画の大要

(1) 現在鵜沼、蘇原地区にある十七ヶ所の簡易水道事業のうち、蘇原北部、南部、旭、吉新、西野口、各務、須衛、川崎、三池中部の簡易水道を統合するものである。

(2) 統合する各簡易水道施設は本計画完成後廃止するが、蘇原南部の取水井二基は使用することとし、その他は存置する。

(3) 蘇原南部地区に新取水井三基を増設すると同時に浄水場一ヶ所、配水池（有効容量二、〇〇〇立方米を新設するもの。）

(4) 統合による連絡配水管の布設と同時に、市内配水管を増設、拡充するもの。

三、計画の内容

(1) 給水人口　二〇、〇〇〇人（目標年次昭和五一年）
(2) 給水量　イ　一人一日最大給水量　三〇〇ℓ／日
　ロ　一人一日平均給水量　二五〇ℓ／日
　ハ　一人一日時間最大給水量三七〇ℓ／日
　二　一日最大給水量　六、〇〇〇立方米
　ホ　一日平均給水量　五、〇〇〇立方米

〃第三回　上水道計画変更〃（昭四四・一二）

一、変更計画を必要とした理由

前記のとおり本市上水道は、昭和十六年創設された旧那加上水道に昭和三十八年旧稲羽地区の簡易水道を統合した第一上水道、及び昭和四十一年十二月旧蘇原、鵜沼地区の簡易水道を統合して設立された第二上水道の二企業により運営されていた。

第二上水道は、昭和四十二年度から四ヶ年計画で拡張工事中であったが、この第一上水道地区の給水量が大巾に増加し、また那加北部宅地開発等が計画されるにあたり、第一上水道は拡張の必要に迫られ、又施行中の第二上水事業においても、工場、住宅団地の進出により、計画の一部変更が生じたため、この機会に第一、第二両上水道を統合すると共に、大伊木、朝日の簡易水道も統合し各務原市上水道として、将来ますます発展が予想される市の給水の円滑と、経営の合理化を計るべく、この計画を実施するものである。

二、計画変更の大要

(1) 水道事業の統合

第一、第二上水道事業を統合し、各務原市上水道事業として一本化をした。

(2) 給水区域、給水人口、給水量の変更

給水区域を拡張し、給水人口六八、〇〇〇人（第一四八、〇〇〇人、第二　二〇、〇〇〇）を九〇、〇〇〇人とし（昭和五十五年度）、一日最大給水量一八、〇〇〇m³／a（第一・一二、〇〇〇m³／a、第二・六、〇〇〇m³／a）を三六、〇〇〇m³／aとする。

(3) 水源の拡張

三井水源に深井戸四基、西市場水源に深井戸二基、蘇原水源に深井戸一基、各務水源に深井戸一基

(4) 各施設の拡張

三井浄水場に着水中、浄水池を増設するとともに、



過水ポンプ施設を増設する。西市場水源に浄水池、送水ポンプ施設を増設すると共に、北部開発地区への配水池（有効容量一、五〇〇m³）を新設する。

前記各施設の拡張に伴なう連絡送、配水管を新設する。

(5) 簡易水道事業の廃止・統合

大伊木、朝日簡易水道事業を廃止し、各務原市上水道に統合する。

三、計画の内容

(1) 給水人口　九〇、〇〇〇人（昭和五五年度目標）
(2) 給水量　イ　一人一日最大給水量　四〇〇立
　ロ　一人一日平均給水量　三二〇立
　ハ　一人一日時間最大給水量五二〇立
　二　一日最大給水量　三六、〇〇〇立方米
　ホ　一日平均給水量　二八、八〇〇立方米
　ヘ　一日時間最大給水量四六、八〇〇立方米
(3) 総工事費　五五〇、〇〇〇、〇〇〇円

〃第四次水道施設計画〃

急激に市の人口は増加し、前記のごとく三次にわたりその統一と合理化に併せて施設設備の計画変更が実施されつつあるが、それに加えて鵜沼東部開発事業が本格的に進められるに伴ない、鵜沼地区に造成されつつある住宅団地（大和、興人、名鉄、東海）に給水するための水道施設計画が昭和四十六年～同四十七年度の継続事業で六二五、六一四、〇〇〇円の巨額をもって、目下工事が実施中である。

一、計画の概要

水源は既設三井浄水場附近に取水井を築造し、これより三井浄水場に導水し既設の各施設を利用して三井配水池より、既設蘇原浄水場に送水し、蘇原浄水場を中継として、既設施設により蘇原配水池より鵜沼住宅団地の受水池に送水する。

住宅団地内には、低区、高区の両配水池を築造し、受水池より低区配水地に送水された浄水は、住宅団地内GL一九〇、〇m以下の給水と東海土地団地への給水のため一部を、また既設小林住宅団地内低区配水池に送水する。東海住宅団地は、今回計画される住宅団地の最東部

にあり、その間に小林住宅団地があるため、新設低区配水池より直接給水では配管延長が伸びると同時に住宅団地の標高を考慮して、既設の小林団地内低区配水池に送水し、既設施設を利用して小林住宅団地高区配水池より給水して施設費の節減をはかるものである。

二、計画の内容

| 団地名 | 給水人口 | 給水戸数 | 一人一日給水量 平均 | 一人一日給水量 最大 |
|---|---|---|---|---|
| 名鉄団地 | 一〇、〇〇〇 | 二、五〇〇戸 | 三六〇ℓ | 四五〇ℓ |
| 大和団地 | 三、〇〇〇 | 八五〇 | 〃 | 〃 |
| 興人団地 | 五、〇〇〇 | 一、二〇〇 | 〃 | 〃 |
| 東海土地 | 四、二〇〇 | 九五〇 | 〃 | 〃 |
| 計 | 二二、二〇〇 | 五、五〇〇 | | |

| 団地名 | 時間最大 | 一日給水量 平均 | 一日給水量 最大 | 時間最大一日換算給水量 |
|---|---|---|---|---|
| 名鉄団地 | 六〇〇ℓ | 三、六〇〇m³ | 四、五〇〇m³ | 六、〇〇〇m³ |
| 大和団地 | 〃 | 一、〇八〇 | 一、三五九 | 一、八〇〇 |
| 興人団地 | 〃 | 一、八〇〇 | 二、二五〇 | 三、〇〇〇 |
| 東海土地 | 〃 | 一、五一〇 | 一、八九〇 | 二、五二〇 |
| 計 | | 七、九九〇 | 九、九九〇 | 一三、三二〇 |

以上のとおり新市発足以来の計画変更の概要を掲げ、現在における上水道簡易水道の規模および現況をご承知いただきたい。

〃水道行政と水道普及発達における今後の課題〃

ここ数年来、特に昭和三十年代の後半以降、日本の経済全般の非常な伸びに伴なって人口の移動、また大都市やその周辺のみならず、農山漁村でも生活水準が向上して十年前あるいわ二十年前に比較して格段の変りようである。

そうしたことから水道事業そのものも、つい十数年前までの一部だけのための施設であり、事業であってよかったものが、既に今日では、人間が住んでいる限り、農山村でも、漁村でも総べての人に対して水道の施設がなくてはならない――というようになって来たのである。

このように、わが国水道の普及率は昭和四十四年度までつまり一番新しい統計では七十九％ということが公式に発表されている。

平野部の市街地では八十％以上、大都市とその周辺の



都市では九十五％というような、非常に高いレベルになっているがわが各務原市においても市営上、簡水合わせて八十四％を示し、将来の水資源問題としていうまでもなく水道事業といえば、水量と水質が最も大きな基礎となるわけで、この水量と水質が整わなければ水道といえないわけで、それには先づ量の問題が非常に重要なものとなってくる。それでも今日までは地表水だけでなく、地下水も含めて、こういう非常に大きな水需要の増加に対応した水資源の対策を維持してきたのであるが、今後はさらに、僅かに残る未給水家庭に対する水道の普及整備とさらに一人当りの水使用量の増大にともなって、水資源の問題はますます重大なものとなってくるであろうと思われる。

このように、如何に大量の水があっても容易には浄水できない、あるいは非常にコストがかかるという水では水源として使えないわけで、少なくとも質と量と兼ね合った水源でなくてはならないということになる。

特に最近は、水質の問題、いわゆる河川の水質の汚染あるいは汚濁が非常な勢いで浸透しておるが、これはやはり、経済の発展というものとは裏腹に起っている現象であるが、水道事業の担当者としては施設の充実と、水質の管理に意を注ぎ、かつ豊富なる水を供給する原則に徹して邁進すべきであろう。

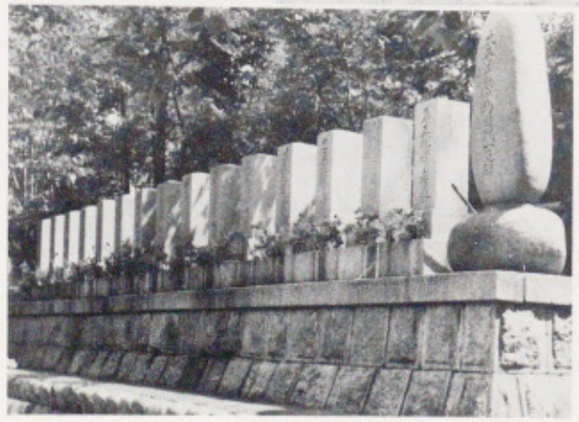
なつかしの不動山頂から
西方土地改良された前渡西町田園地帯
直線は農道幹線と排水路

# 第十一編

# 終戦直後

昭和二十年
警防団表彰を受く
（牧田芳太郎氏提供）

昭和十八年五月八日
忠霊塔除幕式
（牧田芳太郎氏提供）



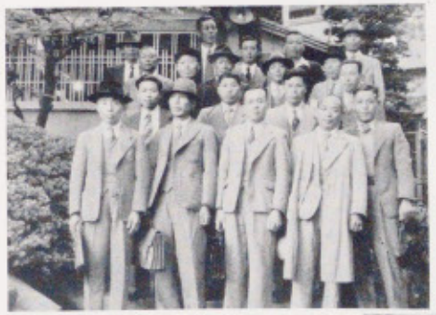
昭和二十八年建立
常真寺境内の戦死者碑
（加藤義雄氏提供）

愛岐大橋
関江南線 建設促進大会

（小野木三巳氏提供）

愛　岐　大　橋

昭和２０年１２月
北島青年団再結団
（磯野さか子さん提供）



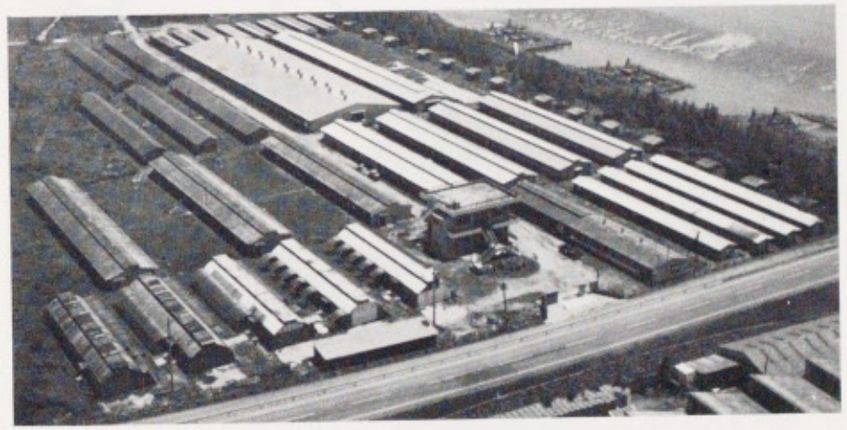
←昭和２８年５月
食糧調整委員会
（富樫源十郎氏提供）

大正末期のお嫁入 →
（武山秀雄氏提供）

昭和３年８月
朝顔展示会
只野文也氏主催

（丹羽久義氏提供）

岐阜プラスチック工業株式会社稲羽工場の正門（加藤嘉雄氏提供）



エンヤ育種研究場　（同上）

# 戦禍

皆川総平

市街地の空襲

昭和二十年三月十九日、名古屋市街の空襲

（毎日新聞名古屋大空襲記事による）

投下爆弾　一、〇一八発
投下焼夷弾　一九六、八一七発
死者　八二六名
負傷者　二、七二八名
罹災家屋　三九、八九三棟
罹災者　一五一、三三二名
国民学校、中学校、高等女学校の被災　三六校
警戒警報発令　一時四五分
空襲警報発令　二時〇〇分
〃　解除　四時五五分
警戒警報〃　五時一二分

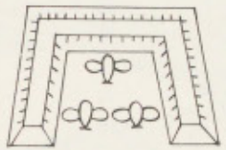
これは昭和二十年三月十九日、名古屋市爆撃の僅か三時間足らずの空襲による被害状況です。如何に爆撃の恐ろしさがご想像できましょう。この日の前後大小の差はありますが、何十回この目にあった名古屋市民ほんとうにお気の毒でございます。

私は昭和十八年一月より、岐阜飛行師団司令部飛行班に勤務―、中支北支の戦場基地、朝鮮、九州、東北、台湾等との、空中輸送業務に従事して居りました。硫黄島が敵に占領されてからは、B29の出撃は次第に其の数を増し、爆撃も亦熾烈さを加へ、其の都度大都市は灰燼に帰してゆきました。機上より見をろせば、赤茶けた焼土のみが其の市街地の原形を保って居るのが、何とも淋しい思いです。其の都度何千、何万と数えきれない犠牲者が居られる事を思ふと、頑張ってやらなければいけないと、武者振いするのも幾度かありました。

## 掩体壕

昭和十九年も終り頃、明朝より掩体壕を構築するため、徴用者が来られる事を飛行班長より聞かされました。当日百人近い人が飛行班の前に整列されました。此の人達は、商売を休み、事業を犠牲にして来られた年輩の人達

ばかりでした。半月位の予定で飛行機を分散して、敵機の攻撃に対し、被害を少なくする為の壕掘です。此のために使用する道具といへば、ただスコップ、それにモッコだけです。モッコといったとて、竹二本に莚を縄で巻き付けた担架のようなものです。これだけの道具で飛行機が二機か、三機はいれる壕掘りです。現在であればブルトーザ等で、簡単に出来たでしょうが、本当に毎日が重労働の連続でした。若者は皆徴兵、又は召集で、軍隊に入隊して居られる以外の年輩の人の作業でしたので、本当に大変だったと思います。



ちなみに、昭和二十年を迎へる頃の配給を紹介しましょう。米は成年一人当り三百三十瓦の配給で、一ヶ月分が十日位で終ってしまう、それも、七分づきから五分づきに、最後は玄米になりました。三度の米飯はとても無理、甘藷や大豆を炊き込んだり、大根菜の花カボチャを煮た中に、小麦粉の団子汁でした。また脱脂大豆、玉蜀黍、粟などの雑穀や、甘藷、ヂャガ芋に依る、代替配給が次第に多くなって来ました。こうした食生活の中で、掩体壕を、三ヶ所も造って戴いた事を、軍に居た私ども「どんなに感謝して居たか」をご想像下さい。これがお国のためになるものと、空腹をも顧みず、頑張ってやって戴いた事に本当に頭がさがりました。

### 各務原の爆撃

それから間もなくB29は、各務原飛行場周辺にも、攻撃の目標を向けて来ました。其の都度、各務原航空廠、三菱航空機整備工場、川崎航空機製造所と、爆弾の雨を降らせる様になり、多くの従業員の犠牲と、工場設備資材の破壊により、飛行機の製造は、遅々として進まなかったのが、実情でなかったかと思います。

### 特攻隊

其の頃陸海軍の特別攻撃隊が、非常に戦果を挙げて居る事が、新聞紙上に報道され、それからは「特攻隊に続け」とゆう言葉が、合言葉のようになって、使われ始めました。或日、九九式偵察機（軍偵）十一機の整備を、飛行班に命ぜられました。之は特別攻撃隊の出撃者、特攻隊員の飛行機です。塔乗する攻撃隊員は、夫々の飛行機



に配置されて居りました。まだ二十才前の少年飛行兵出身者ですが、其の落ち付いた態度には、敬服させられました。もう十日、或は十五日過ぎれば、死が待って居るのですが、何の懸念味も無く、私達の飛行機の整備を、喰入る様に見て居られます。そして修理箇所や、部品の機能を質問される等、其の態度は、生死を超越した者にして、始めて出来る事と思いました。私達も此の飛行機が、敵艦に突入する迄は、決して事故のない様にと、一本のボルト、一個のナットにも心を込めて、整備致しました。漸く整備も終り「宣敷お願い致します」「征って来ます」堅い握手を交した其の暖味が、今でもひし〳〵と感じられます。此の気持をなんと表現してよいか、其の言葉が私には見つかりません。後日此の特別攻撃隊は、第四靖国特別攻撃隊と聞かされ、フィリッピン沖に於て、立派な戦果を挙げられた事を聞き、何ともいいようのないものが、心をかけめぐるのを、どうすることも出来ませんでした。只この攻撃隊員のご冥福を心からお祈りするばかりです。

### 分散

それから私達飛行班は、各務原飛行場の台地では、何時飛行機に莫大なる、被害をうけるかもわからん、之を予想してか、下切町、及前渡西町の一部に、飛行機の分散と、兵員の分宿を命ぜられました。当飛行機の誘導路は現在自衛隊に通ずる道路を拡幅し、之に当てました。兵舎は堤防近くの砕石場附近、当時は立派な松林に、バラック小屋を建て、生活を始めました。庶務、炊事、下士官集合所、空中勤務者詰所、等は下切町の民家をお借しました。空輪の際の飛行機の搬入、搬出は二十人位の兵員で行いました。こんな時に、家の仕事をさておいて、軍のためにお世話下さった近所の方々は勿論ですが、部落の皆様には、ご迷惑ばかりお掛したにもかかわらず、ご親切に、心持良く、ご協力下さいました事を厚くお礼申上げます。之は当時飛行班長長谷川大尉と会ふ度、一度は話題に出て、前渡、下切の人々はほんとうに良い人ばかりだったと、今でも喜び合って居ります。

### 岐阜空襲

さて夜間の空襲といへば、名古屋方面が常識の様でした木曽川堤まで出て見れば、本当に古知野、岩倉附近に

見える名古屋の空襲、焼夷弾で空は昼間のように明かるく、民家の焼ける火災と相まって、言いしれぬ無気味な明かるさを思い起します。其の夜間空襲が岐阜にも襲いかゝりました。六月八日例の空襲警報により西の空が真赤になり、一夜の中に岐阜の市街地は、焼土と化しました。翌朝私は参謀長に同行して、九州に出張することになって居ました。何時も離陸すれば、金華山上を左旋回して、市街地を左下に見るのが常識でしたが、今朝は違います。まだ焼跡も生々しく、煙はくすぶり、中心街は焼土と化し、たゞ外周に点々と、其の被害を免がれた家があるのみです。また此の空襲では、隣接町村にも、相当被害のあった事が特筆されます。任務を終って家に帰ると、焼出された班長さんの家族四人と、知らぬ子供連の親子さんも、家に来て居られました。当時の配給は、先にも書きました様に、苦しいものでしたが、私達にはまだ家が残って居る、何とか分け合って、やれるだけやっていこうと思いました。こうした事は、何処の家庭でも多かれ少かれ、やって居られた事と思います。そして励ましあい扶けあって、一つの目的に向って進んだ事は事の是か、或いは非かは別にして、生涯二度と経験する事の出来ない人生のひとこまとして、話し合うのも意義ある事ではありませんか。

### ドラム缶運び

私達は岐阜空襲の三日後、焼け果てた岐阜駅にあるガソリンの入ったドラム缶数十本を笠松競馬場に運搬を命ぜられました。皆さんはどうして運搬したとお思いですか、これは五十数名の兵員があるだけです。この人により貨車から降ろし、一本のドラム缶を、一人が転がかして今の名岐国道を笠松の競馬場迄、汗と土にまみれて、運搬したものです。途中荷車に家財道具を積み、(岐阜で焼出された人でしょう)他に疎開を求めて行く姿は、お気の毒でありました。そうした情景を眺めながら、二三の落伍者もありましたが、空腹を克服して、夕方無事競馬場に到着いたしました。此の時兵隊におやつが出されましたが、ただむしたての甘藷一個宛でした。それでも当時は、それなりに不平もなく過ぎ去った事を思うにつれ、感慨深いものがあります。

### 防空壕



それから以降は、昼は敵の艦載機の来襲、夜はB29の爆撃と、戦争を経験された家庭では、自己の命を如何に守り、家族をどう退避させるか、此の爆撃をどうして切り抜けるかで、精一杯でなかったかと思います。寝ていても空襲があったらどうするか、家族で話し合い其の都度(警戒警報)家を飛び出して、防空壕に飛込むの連続でした。其の間光の漏れは、絶対に許されません。雨の中をびしょぬれで、飛び出した事もありました。雪の真夜中す足で出た事もありました。又暑い夜中、飛び出して空を仰ぎ、なぜこんなにせねばならないか、汗と涙を、こすりながら、誰にもぶつける事の出来ない怒りを、どうすることも出来ませんでした。皆様いかがですか。こうしている間にも、何十人かの生命が、或はもっと多くの生命が、爆撃のための犠牲となって失われ、傷ついてゆかれるかを思う時、やるせない気持で一杯です。生後三ヶ月の乳児が、余り出ない母の乳房を、無情に探し求める姿を見る時、人間として一日も早く戦争の終結を、願う気持で一杯でした。多くの皆さんも、恐らく一諸の気持でなかったかと思います。

### 前宮を一なめ

二十年七月初めの夜でした。すごい雨です。此の雨なら空襲はなかろうと、誰しも心にゆるみを持っていました。ヒューとサイレン、又来た、空襲警報だ、丁度家へ帰っていた夜です。家族は防空壕にはいりました。私は雨の中にたゞづんでどっちから来るかなと、方向を知りたいと耳を傾けていました。「南からだ、航空廠をやつけるかな」雨はますます猛烈に降って居ます。低空だぞ、どんな編隊かさっぱり見えないが、B29で相当数の編隊であることは判断がつきました。帯状の前宮を横なめにするのかなとも思いました。恐らく木曽川の線も見えぬだろう、どこで爆弾か焼夷弾を落すかなア、こうすると私は防空壕には入る気にはなれぬ、来たぞ頭上に爆音が聞こえる、馬鹿野郎と大声でどなって見たが何もならない。ならないけれども思わずどなった。西の空が編隊の中心らしかった。雨闇を照す焼夷弾の無気味な光、ドカンドカンと連続聞える爆弾のひゞき、「やったな今に見ていろ」私の敵愾心と噴怒は燃えあがってくる。ものの十分も立っていたかしらん、爆音は北へ遠ざかって行く、航

空廠の辺で落したかしらん位で解除のサイレンを聞くまで雨の中に立っていた。翌日前渡西町北部、各務原台地の南部の田園地域に幾千発か田圃一面爆弾が落ちたと聞き、其の一部を見に行きました。此の時荒井山の南側にあった飯場の十何軒かが焼けた。此の飯場は朝鮮から来ている労務者の小屋で死傷者はなかったが、小屋は全焼してしまった、そのグループは間もなく何処かえ流れ去ったということであります。この雨の夜、敵は航空廠を南からやっつけようとしたのか、或は原の南部落前渡には人と資材があるので、なめてやろうと思ったのか、どちらにしても、この夜晴れていて木曽川の流れがよく見えたら前渡地区が滅茶くちゃにたたかれるか滑走路か航空廠の原に面した倉庫の一部が飛び散ってしまうかである。雨の降る量、自分の速度と偏流、スイッチを切る時間とにタッタ一秒の差があって、前宮地区殊に前渡西町一帯に空襲の難から免がれ得たように思われます。

此の七月始め豪雨は前宮のお天水田には絶対ほしい雨だし、此の時この雨のお蔭様で家屋人畜に被害のなかったことを喜こばなくてはいけないでしょう。

ただ残念に思うことは六月九日前渡西町堀おばあさんが食糧増産中、敵機の機銃により他界せられましたことが心残りでなりません。心から哀悼の意を表します。

### 原　爆

私の同僚が奥さんの不幸で、広島の田舎に帰省中、広島に大型爆弾が投下された事を知らされました。その話によると、物凄い光が出て、それを見たら大やけどをする広島の市街地は大混雑をしている、この爆弾に依って何万人かの生命が一瞬のうちになくなったそうだ、大本営発表は敵の大型爆弾と報ぜられたに過ぎません。私達は半信半疑で聞いていましたが、之が広島に投下された原子爆弾であると知ったのは戦後の事です。其の悲惨さは広島の原爆堂で永久に後世に伝へられております。

### 終　戦

こうして本土が戦場と化した中にも、郷土の人々は食糧の増産に、或は防衛に、職域奉公と、献身的努力をしましたが遂に昭和二十年八月十五日敵の軍門に下り天皇の詔勅が降され、終戦を迎へたのです。前の木曽川は、何もなかったかの如くその清流を伊勢湾にそそいでいます。



郷土の不動山も亦確実に夕暮を知らせてくれております。喜びたいことは、郷土が爆撃の被害からまぬがれた事であります。それと今晩からは空襲がない、安心して寝られること、もう防空壕へ飛びこまなくて済む安慰感は、誰もが同じであったと思います。

然し敵が上陸して来ると婦女の暴行を心配する声が伝わり、娘さんを持つ親さんは、遠い親戚に預ける人もあったと聞いております。こうした戦後の混乱期に、食糧の問題、郷土機業の発展等は、先輩諸氏によって此の書の編纂を飾っていたゞけるものと確心致します。只言える事は京都、大阪方面より甘藷の買出しの列が続き其の潤を受けた事は事実です。

### 米軍の進駐

戦後間もなく各務原の飛行場に米軍の進駐を見るようになりました。これにより今迄軍の支配していた箇所は総べて、進駐米軍の手に引き継がれました。私達も飛行班長以下十数人で、飛行機、及資材の引渡を完了して七年半の軍隊生活を終らせていただきました。

私達は今迄中国人以外の他国人とは、接する事が出来ませんでした、しかも今度は征服された引目も手伝って、黒人等数人部落を歩き廻る姿を見る時、なんともいえない気持でした。時々不快な暴行事件を聞くにつれ、一たい何時駐留が解除されるか、そればかりが気掛りでした。

進駐軍へは各部落隣保班交替で勤労奉仕作業に出かけた事もありました。那加の町は駐留軍人で賑いを見せるようになりました。同時に女性が外出駐留軍に、よりそう姿は目を蔽うものがあり、混血児も此の頃より多数出生したと聞いています。

### 民主主義

私達は消防の出初式に、小学校の校庭に集合して、那加警察署の署長さんの訓示をうける機会を得ました。其の訓示には消防団以外団結を許されない、将来消防団こそ国民の心のよりどころであること、そしてこれからは、民主主義の世の中になることを聞かされました。此の時始めて消防団の存在価値を知らされ、民主主義という言葉を聞きました。此の民主主義の意味は、誰にも今はぴんとこないが日時の経過と共にだんだん理解出来るようになるでしょうとのことでした。

復員

其の間戦地で消息のなかった郷土の戦友達も徐々に引揚げて来られました。父を、夫を、我子の無事を神仏に念じてこられた甲斐あって、喜びの対面をされる姿、或は出征中妻子を亡くされ悲痛の帰宅をされる方、或は親の死と、それぞれ当時を振返って忘れられない感激をおもちだと思います。それにつけても郷土の激励を一身に受けて出征され無言の帰還をされた百幾柱の英霊のご家族のお気持を感ずるとき、どうしてか生残った私はなんだか済まない気持で一杯です。私はこの尊い犠牲者のお蔭で今日があるを肝に銘じて将来の自己の心の支えとしてゆきたいと思って居ります。

戦後建築法が発令され家を新築されても十五坪以下とされたのも戦後の特記事項と思います。又航空機の製造は一切禁止され、自動車は貨物自動車に限られて居りました。又終戦前よりガソリンの欠乏が甚だしく松根油を燃料とするとか、或は木炭車、瓦斯新車等色々一夫されて生活の支えとして耐乏生活を続けたのも特筆されることと思います。又戦後長平、及び前渡西町の一部に腸チブスが流行して多くの死者を出したのも医薬品の不足、防疫の不備等に原因があった事も附記いたします。

結び

以上私は私の近辺に出来た事実を回想して忠実に記載致しました。いづれにしても之が戦禍であったかは別として私達が先輩同窓生より享け継いた光栄ある郷土を、戦争を通じて経験した、精神的、物質的窮乏を発展のために生かし、困苦のときの糧として立上ってきたのも事実でした。そして今日の繁栄した社会が出来上るには四分の一世紀の日時を要しました。私達は何如に戦争の犠牲の大なるかを知り、二度と郷土を戦火の巷と化さないためこれを後世に夫々が経験した尊い教訓を、夫夫の責任に於て伝へ、この光輝ある日本を又郷土を、平和で秩序ある豊な社会として次の世代に引継義務があると思います。又これが此の世代に生抜いた者の責任ではないでしようか。

（昭和四十七年新春に）



# 大東亜戦争戦没者

大沢光子

| 戦没区分 | 階級 | 氏名 | 戦没年月日 | 戦没場所 | 遺族住所 | 続柄 | 氏名 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 戦病死 | 陸軍兵長 | 佐々木 健三 | S18・3・11 | ブーゲンビル島 | 山脇町八三八 | 弟 | 佐々木 弥平治 |
| 戦死 | 陸軍伍長 | 佐々木 康雄 | S20・8・13 | 牡丹江省 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 海軍兵曹長 | 佐々木 基治 | S19・12・19 | 南洋群島方面 | 〃 八一五 | 兄 | 佐々木 軍治 |
| 〃 | 陸軍伍長 | 佐々木 孝雄 | S18・8・10 | 中支 | 〃 六六六 | 〃 | 佐々木 逸雄 |
| 〃 | 〃 | 苅谷 義男 | S19・12・14 | 比島レイテ島 | 〃 九四三 | 〃 | 苅谷 利光 |
| 〃 | 陸軍上等兵 | 岩井 笹夫 | S19・7・18 | サイパン島 | 〃 九七一 | 父 | 岩井 喜助 |
| 公務死 | 陸軍一等兵 | 佐々木 太三 | S19・10・11 | 岐阜市長住町吉村病院 | 〃 八三二 | 弟 | 佐々木 三郎 |
| 戦死 | 陸軍兵長 | 佐々木 和夫 | S19・12・1 | 東部ニューギニヤ | 〃 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 〃 | 磯谷 太一 | S21・2・4 | ソ聯邦タイセット基地下切町 | 〃 | 妻 | 磯谷 西枝 |
| 戦病死 | 陸軍上等兵 | 日比野 春夫 | S21・6・17 | 福岡市野多目国立病院 | 〃 | 〃 | 日比野 きく |
| 戦死 | 陸軍技手 | 日比野 光義 | S20・7・12 | ニューギニヤブーツ | 〃 | 母 | 日比野 のぶ |
| 〃 | 陸軍上等兵 | 仙石 一雄 | S19・7・18 | サイパン島 | 〃 | 母 | 仙石 かぎの |
| 〃 | 陸軍兵長 | 仙石 通雄 | S19・9・30 | テニヤン島 | 〃 | 父 | 仙石 貞雄 |
| 〃 | 陸軍曹長 | 磯谷 吉正 | S19・12・10 | 比島レイテ島 | 〃 | 兄 | 磯谷 力雄 |

| 戦没区分 | 階級 | 氏名 | 戦没年月日 | 戦没場所 | 住所 | 続柄 | 氏名 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 戦病死 | 陸軍上等兵 | 伊神庄五郎 | S25・3・10 | 帰郷下切町 | 下切町 | 妻 | 伊神花子 |
| 戦死 | 陸軍伍長 | 仙石周治 | S19・12・14 | 比島レイテ島 | 〃 | 父 | 仙石茂 |
| 〃 | 〃 | 日比野利勝 | S15・4・28 | 中支応山県 | 〃 | 弟 | 日比野兼光 |
| 〃 | 陸軍兵長 | 日比野馨 | S19・12・10 | 比島レイテ島 | 〃 | 兄 | 〃 |
| 〃 | 陸軍伍長 | 郷地鈴雄 | S18・1・6 | ガダルカナル島 | 〃 | 妻 | 郷地花子 |
| 〃 | 〃 | 磯谷公一 | S20・2・1 | レイテ島 | 〃 | 兄 | 磯谷肇 |
| 戦病死 | 海軍上等水兵 | 仙石桂 | S20・4・21 | 呉海軍病院 | 〃 | 長兄 | 仙石敏雄 |
| 戦死 | 陸軍伍長 | 仙石勝 | S19・9・30 | マリヤナ島 | 〃 | 父 | 仙石藤一 |
| 〃 | 陸軍上等兵 | 仙石一郎 | S15・12・10 | 南支那 | 〃 | 弟 | 仙石寛治 |
| 戦病死 | 海軍一整備兵 | 仙石善市 | S20・1・8 | 藤沢航空隊内 | 〃 | 弟 | 仙石三郎 |
| 〃 | 陸軍伍長 | 磯谷正夫 | S19・10・7 | ニューギニア | 〃 | 母 | 磯谷いゑ |
| 〃 | 陸軍上等兵 | 安藤忠光 | S18・7・7 | 中支 | 〃 | 妻 | 安藤千代子 |
| 戦死 | 海軍軍属 | 安藤一郎 | S20・1・2 | グアム島 | 〃 | 妻 | 安藤スミエ |
| 戦病死 | 陸軍伍長 | 丹羽清美 | S19・9・9 | ビルマ | 前渡東町長平 | 妹 | 丹羽智恵子 |
| 〃 | 陸軍技手 | 丹羽梅夫 | S19・4・8 | 比島ルソン島 | 〃 | 妻 | 丹羽ゆき子 |
| 〃 | 陸軍伍長 | 丹羽登己 | S12・9・9 | 宝山県呉湘鎮 | 〃 | 妻 | 丹羽美子 |
| 戦死 | 陸軍伍長 | 丹羽宇佐美 | S19・8・19 | バシー海峡 | 〃 | 兄妻 | 丹羽いちゑ |
| 戦病死 | 陸軍二等兵 | 丹羽賢一 | T9・3・16 | 豊橋衛戍病院 | 〃 | 〃 | 丹羽元子 |



| 戦没区分 | 階級 | 氏名 | 戦没年月日 | 戦没場所 | 住所 | 続柄 | 氏名 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 戦病死 | 陸軍技手 | 丹羽幸一 | S20・6・4 | フイリッピンルソン島 | 前渡東町長平 | 妻 | 丹羽すぎゑ |
| 戦死 | 陸軍伍長 | 丹羽金夫 | S18・1・22 | ガダルカナル島 | 〃 | 妹 | 小川文子 |
| 〃 | 陸軍兵長 | 丹羽嘉七 | S18・7・1 | ニュージョージャ島ビル港 | 〃 | 兄 | 丹羽又衛 |
| 〃 | 〃 | 丹羽武 | S18・9・30 | ニューギニヤパラオ諸島 | 〃 | 妹夫 | 丹羽史朗 |
| 戦病死 | 陸軍上等兵 | 丹羽悠紀男 | S13・10・23 | 奉天陸軍病院 | 〃 | 兄 | 丹羽末一 |
| 戦死 | 陸軍伍長 | 丹羽光圀 | S18・12・22 | 中華民国雪南省黎果北方 | 〃 | 母 | 丹羽きよう |
| 〃 | 陸軍軍曹 | 丹羽梅二 | S17・12・30 | ガダルカナル島 | 〃 | 兄妻 | 丹羽きむゑ |
| 戦病死 | 陸軍軍属 | 丹羽元 | S17・4・22 | タイ国盤谷一〇四兵站病院 | 〃 | 父 | 丹羽藤蔵 |
| 戦死 | 陸軍兵長 | 永井只夫 | S20・6・22 | 比島ネグロス島 | 前渡東町北島 | 兄 | 永井金吾 |
| 〃 | 陸軍上等兵 | 永井忠郎 | S19・2・6 | ニューギニヤ | 〃 | 父 | 永井斧太郎 |
| 戦病死 | 陸軍兵長 | 永井政司 | S19・10・28 | 中支 | 〃 | 妻 | 永井すみゑ |
| 戦病死 | 陸軍上等兵 | 永井正一 | S20・9・6 | 中華民国江蘇省南京一五六兵站病院 | 〃 | 兄 | 永井定郎 |
| 戦病死 | 海軍主計兵曹長 | 永井勇郎 | S19・1・12 | 南方海面上 | 〃 | 弟 | 永井武男 |
| 戦病死 | 陸軍軍属雇員 | 永井隆郎 | S20・4・30 | 比島 | 〃 | 兄 | 永井三郎 |
| 戦死 | 陸軍伍長 | 大橋良一 | S19・9・30 | マリヤナ島 | 両内野 | 母 | 大橋やえの |
| 〃 | 海軍水兵長 | 大橋義正 | S20・5・20 | レイテ島 | 〃 | 妻 | 大橋すみえ |
| 〃 | 陸軍曹長 | 尾山秀雄 | S19・10・5 | 〃 | 〃 | 父 | 尾山三郎 |
| 〃 | 陸軍伍長 | 日比野京市 | S20・1・15 | ガダルカナル島 | 〃 | 兄 | 日比野静夫 |

| 戦没区分 | 階級 | 氏名 | 戦没年月日 | 戦没場所 | 住所 | 続柄 | 氏名 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 戦死 | 海軍一等兵曹 | 日比野久一 | S19・11・21 | 支那海 | 両内野 | 兄 | 日比野正衛 |
| 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 比島ホロ島 | 〃 | 父 | 大橋一重 |
| 戦病死 | 陸軍兵長 | 大橋太郎 | S20・1・15 | 〃 | 〃 | 兄 | 永井鈴夫 |
| 戦死 | 陸軍伍長 | 永井謙吾 | S20・7・22 | マレー半島コタバル上空 | 〃 | 母 | 永井つるへ |
| 戦死 | 陸軍伍長 | 永井親章 | S20・6・19 | 比島ルソン島リザール州 | 〃 | 弟 | 永井秋治 |
| 〃 | 〃 | 永井岩夫 | S20・3・18 | ニューギニヤ島パロン方面 | 〃 | 弟 | 村上栄之 |
| 〃 | 〃 | 村上孝保 | S20・6・15 | 比島 ルソン島バギオ島 | 〃 | 妹 | 村上きくゑ |
| 在郷死亡 | 陸軍曹長 | 村上忠次 | S20・12・29 | 岐阜市日野 | 〃 | 母 | 苅谷ひな |
| 戦死 | 陸軍軍属 | 苅谷徳久 | S19・11・8 | 比島方面 | 前渡西町一丁目 | 妻 | 上村奈津子 |
| 戦病死 | 陸軍兵長 | 上村久治郎 | S19・11・2 | ビルマサガイ州 | 〃 | 妻 | 足立志づ江 |
| 戦死 | 陸軍上等兵 | 足立源右ェ門 | S20・7・18 | マリヤナ方面 | 〃 | 妻 | 奥村美子 |
| 公務死 | 陸軍技手 | 奥村美代司 | S16・7・18 | 江島の近海 | 〃 | 母 | 足立ひで |
| 戦死 | 陸軍兵長 | 足立国夫 | S20・7・1 | フィリッピン | 〃 | 姉 | 足立久子 |
| 戦病死 | 陸軍伍長 | 足立源一 | S21・7・10 | 自宅 | 〃 | 兄 | 足立正一 |
| 戦死 | 海軍二等飛行兵曹 | 足立新一 | S17・1・21 | シンガポール | 〃 | 弟 | 足立重雄 |
| 戦病死 | 陸軍上等兵 | 足立部 | S17・12・31 | 恵那郡大井町大井傷夷軍人療養所 | 〃 | 妻 | 長縄貞子 |
| 戦死 | 陸軍兵長 | 長縄吉文 | S19・12・10 | フイリッピンオルモック | 前渡西町二丁目 | 養母 | 足立くに |
| 〃 | 陸軍上等兵 | 足立松太郎 | S13・10・29 | 支那応山域南方五千 | 〃 | 父 | 足立文司 |
| 〃 | 〃 | 足立孝司 | S19・12・29 | 中支安徽省 | 〃 | 妻 | 長縄芳子 |
| 〃 | 陸軍曹長 | 長縄進司 | S20・5・27 | フイリッピンルソン島・リサール州 | 〃 | 兄 | 倉知鉦重 |
| 〃 | 陸軍兵長 | 倉知道一 | S20・6・10 | フイリッピンルソン島 | 〃 | 父 | 長縄林一 |
| 〃 | 海軍二等兵曹 | 長縄千秋 | S19・9・8 | 比島方面 | 〃三丁目 | | |



| 戦没区分 | 階級 | 氏名 | 戦没年月日 | 戦没場所 | 住所 | 続柄 | 氏名 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 戦死 | 陸軍伍長 | 堀勝次郎 | S20・6・27 | ビルマ「シワタン」河 | 前渡西町三丁目 | 兄 | 堀金次郎 |
| 〃 | 陸軍兵長 | 久保江正三 | S24・5・22 | スマトラ | 〃 | 兄 | 久保江喜代司 |
| 〃 | 陸軍兵長 | 松波正夫 | S16・10・23 | 中支 | 〃 四丁目 | 母 | 松波よね |
| 戦病死 | 〃 | 田中進 | S19・9・14 | 〃 | 〃 | 母 | 田中きん |
| 戦死 | 陸軍伍長 | 田中良一 | S19・7・26 | 〃 | 〃 | 母 | 田中との |
| 〃 | 海軍上等機関兵長 | 瀬義一 | S19・8・9 | 広島 | 〃 | 母 | 長瀬みきえ |
| 〃 | 陸軍兵長 | 堀秀夫 | S20・4・26 | 沖縄伊江島 | 〃 | 母 | 堀まさよ |
| 〃 | 陸軍伍長 | 堀口音市 | S19・12・10 | レイテ島オルモック | 〃 | 母 | 堀口はな |
| 〃 | 〃 | 田中真佐衛 | S20・8・19 | 北支 | 〃 | 母 | 田中よう |
| 〃 | 〃 | 田中敬治 | S19・8・7 | ビルマ | 〃 五丁目 | 妻 | 田中あや子 |
| 〃 | 陸軍兵長 | 岩井二三夫 | S19・8・24 | 〃 | 〃 | 妻 | 田中フミ子 |
| 〃 | 陸軍軍曹 | 田中秋夫 | S19・9・29 | テニアン | 〃 | 父 | 田中義一 |
| 〃 | 海軍一等整備兵曹 | 長瀬敏秀 | S19・10・31 | 太平洋方面 | 〃 | 兄 | 長瀬進 |
| 〃 | 陸軍軍曹 | 丹羽万治 | S18・6・22 | ニューブリテン島 | 〃 | 父 | 丹羽巌 |
| 〃 | 〃 | 五島重幾 | S19・4・10 | 南太平洋 | 〃 六丁目 | 父 | 五島光三郎 |
| 〃 | 〃 | 田中守夫 | S19・9・30 | テニヤン | 〃 | 弟 | 田中博 |
| 〃 | 陸軍伍長 | 田中菊夫 | S19・12・10 | レイテ島 | 〃 | 弟 | 田中久夫 |
| 〃 | 陸軍上等兵 | 後藤庄一 | S15・1・17 | サイパン島 | 〃 | 母 | 後藤ゆう |

戦傷死　陸軍曹長　大野信吉　S26・4・20　自宅　前渡西町六丁目　妻　大野千代子

## 日露戦争戦没者

| 戦没区分 | 階級 | 氏名 | 戦没年月日 | 戦没場所 | 遺族 住所 | 遺族 続柄 | 遺族 氏名 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 戦死 | 陸軍上等兵 | 丹羽久吾 | 明37・8・23 | 旅順要塞盤龍山 | 前渡東町長平 | 長男 | 丹羽征 |
| 〃 | 陸軍一等卒 | 丹羽藤吉 | 明37・11・13 | 旅順要塞二龍山 | 〃 | 弟 | 丹羽藤蔵 |
| 〃 | 陸軍上等兵 | 永井太三郎 | 明38・3・2 | 奉天盛京省 | 〃 北島 | 姪 | 永井志津 |
| 〃 | 陸軍上等兵 | 永井杢太郎 | 明38・3・2 | 奉天 | 〃 | 甥 | 永井弘道 |
| 帰郷死亡 | 陸軍上等兵 | 村上吉太郎 | 明41・4・30 | 自宅 | 〃 両内野 | 甥 | 村上吉一 |
| 戦死 | 陸軍上等兵 | 長縄喜一 | 明43・7・15 | 台湾ポンポン山 | 前渡西町二 | 甥の妻 | 長縄芳子 |
| 〃 | 陸軍上等兵 | 長縄勘之丞 | 明38・3・7 | 奉天造化屯 | 〃 | 甥 | 長縄吉夫 |
| 〃 | 陸軍上等兵 | 足立宗五郎 | 明38・3・10 | 奉天 | 〃 | 姪の夫 | 足立秀夫 |
| 〃 | 陸軍上等兵 | 田中新吾 | 明37・12・28 | 奉天 | 〃 五 | 甥 | 田中富男 |



## 物資の窮乏

足立勘二

校歴一世紀　その永い歴史の中には色々の事があっただろう。しかし何と云っても最大の激動は第二次世界大戦前後の事にちがいない。

人々は戦争の苦しみと悲しみをまともに受けて生きる為には何事も辞さないと云う時代であった。戦中は「撃ちてし止まむ」の精神で国民一人一人の権利は奪われ官民一体となって軍需産業に全力を挙げ戦後は物資の窮乏と食量難にあえぎながら生きてゆくのが精一杯と云う時代であった。当時小学生だったわれわれも例外ではなかったひもじい腹をかゝえ、ろくな教材もなく全く勉強どころではなかった。今その想い出の一端を記すと——

私が母校(当時前宮国民学校と云った)に入学したのは開戦間もない昭和十七年四月だった。戦時下とはいえ最初の一年はごく平穏な学校生活を送る事が出来た

開戦と同時に破竹の進撃をした日本軍は東南アジアに進軍しシンガポールを陥落した。これでマレー半島のゴム資源が思う様になったとの事で全国の小学生にゴムマリが無償で支給された。その頃のゴムマリは我々にとってこの上もない贈り物でお正月にお年玉を貰った様な大変なうれしさであった。ところが明るいニュースはこれが実質上最后となり戦争の旗色は日本にとって不利な方向に動き出し物資の窮乏が目立ちはじめた。

昭和十八年頃、勝つ為には先ず節約せよとの事から学校へ持ってくる昼食の弁当は必ず麦飯であらねばならん。つまりいわゆる「銀メシ」が禁止された。

桑の枝の皮をむき繊維を取る事がこの頃から始まった。学校から帰ると桑畑のある家へ頼んで桑の枝を貰い皮をむいて一握り程の束にして翌日学校へ持って行く、学校では各個人別に出荷した量を記録してグラフに書き教室に貼り生徒達の競争意欲を盛り立てた。その皮がどんなルートで何処へ行ったかは知らない。只これがお国の為になるのだと強く教えられた事だけは今も覚えている。そういえば学生服が配給制になり一ケ月に一クラスに一着か二着ずつをクジで分けたのを覚えている。

軍馬の為の干草かりに出かけたのもこの頃がはじまりだった様に思う。この頃より授業が奉仕作業に変る事がしばしばだった。

昭和十九年私が三年生になった頃――　この頃から大都市の空襲が初まりこの辺の学校でも防空帽子なる綿入れの頭巾を持って通学する様命令された。最初はよく忘れて家へ取りに帰ったものだが冬になってからは防寒帽子として結構役に立ったものである。学校では授業中に訓練空襲警報等という避難訓練が時々行なわれる様になった。この訓練は両方の親指で耳をその他四本の指で、目をおおい机の下にしゃがむというものであったり一斉に校庭へ出て木のカゲにかくれる等という全くバカバカしい様なものだった。戦争が激しくなるにつけ授業も益々軍国調を強め音楽の時間は軍歌ばかり図画の時間は戦車や飛行機の絵ばかり運動会は高学年はアメリカ兵やイギリス兵のワラ人形を作り高い塀を乗り越えて行って竹ヤリでその人形をつきさすといった様なものが多く低学年のお遊戯も「白衣の兵隊さん」等と云ったものが多かったそんな中でもわれわれはわれわれなりに平和な世界を望んでいたのだろうか、今尚心に残っている歌に「お山の杉の子」がある。戦時一色の中にも本当に明るい歌声として子供達の間に大流行したものだった。

そして昭和二十年六月アメリカの艦載機P51カーチスが各務原飛行場を襲い相次いでB29の爆撃がはじまり岐阜も一宮も焼野原になった。灯火管制は一段ときびしくなり夜の勉強はほとんど不可能になりおかげで宿題はほとんどなくなった。授業中に敵機の来襲を知らせるサイレンが鳴るとすぐ授業を中止して各部落別に隊を組んでかけ足で家へ帰ったものである。その為にいやな授業になるとサイレンの口マネをする不とどきものがいて教室中が大さわぎになり先生にひどく叱られた事も多々あった。

当然の事乍ら食糧事情は益々悪くなり学業よりも食糧増産が優先する様になり堤防内の原野を開いて甘藷や馬鈴薯を作った。それだけでは足りず中之島(現前渡東町)のあたりまで開墾にも行った。学校の運動場迄も通学路とトラックの部分を残して耕し甘藷を作った。おかげでこの年は運動場はイモ畑となり運動会も出来なかったの



も悲しい想い出の一つである。みんなが丹精こめて作ったジャガイモを収穫し水で洗って玄関に積んでおいた処が三日もたたないうちに大部分が腐ってしまい先生も生徒も一しょになってワイワイ泣いた事もあった。

学校ですらこの様な状態であったので個人の食糧事情はいうに及ばず生徒の大多数が栄養不良児で朝礼や一寸した式等があって校庭に三十分も立っていると青くなって倒れる者が一人や二人は必ずいたものである。

各務原の飛行場が爆撃を受ける様になって軍需工場の大疎開が始まり不動山の南側に大きな穴があいたのもこの頃だった。その人夫として大勢の朝鮮人が動員されその子供達が続々と入学して来た。名古屋や大阪からの疎開者もあり只さえ物資が不足している時に益々生徒が増加しては机も椅子もあるはずがなく又買う事等とうていい出来なかった。音楽室や理科室で使っていた机や椅子を持って来て臨時に間に合わせ今迄三十数人だった級は一挙に五十人近くにもなった。教室の中にはニンニクやとうがらしの臭いがプンプンとし金君や実君等と云う名前が聞かれたのもこの頃だった。中には日本語もろくに話せない様な者迄いていろいろなハプニングも起きた。

ガラス窓は破れたら紙で貼るしか方法がなく椅子はこわれたら自分で修理しなければならなかった。授業中に椅子がこわれて尻餅をついても誰も笑えなかった。中には放課後にそっと人の椅子と取り変えておく悪賢しこい奴もいた。

そして校外活動としてヒマと云う植物を栽培しこの実を取り学校に供出した。これから油を取り戦争に役立たせるのだと教えられた。同じ様な理由で椿の実や樫の実拾いをした事もあった。

そんな時飛行場の兵舎が戦災にあい大勢の兵隊が学校の講堂に移って来た。不安な毎日だっただけに何とはなく心強く思った事だった。又必ず日本は勝つと教えられその通りに信じていたわれわれ小学生にとって兵隊は憧れの的でもあった。折をみて仲良くする機会を見つけ出そうと努めたものだった。

又この村からも多くの人が召集されて行った。祝入営の幟を立て全校生徒で「我大君に召されたる…」と出征兵士を送る歌で送ったものである。処がこの年には「海行か

ば」の曲に迎えられて声なき帰郷をし校庭で行われた村葬の何と多かった事か「立派にお国の為に名誉の戦死をされ本当におめでとうございます」と挨拶する大人達の言葉を聞いた時は「日本の軍隊は勇ましい」と教えられ死ぬ事が最大の忠義だと聞かされていた吾々にも何となく割り切れないものがあった様に思う。

そしてその年の夏休みが来た。外出の時は必ず父兄に同伴し防空帽子を忘れない様に空襲にはくれぐれも気をつける様にと受持の先生は不安な目でわれわれに訓示してくれた。そして八月十五日午后、日本は戦争に敗けたと親達から聞かされこれから先どうなるのかと子供乍らに大きな不安をいだいた。二学期が始まってもどうも落着かなかった。大勢いた朝鮮人達は大部分が本国へ引揚げて行った。教室は元の静かさを取りもどしたが彼がより安全な処へ逃げて行く様で余計に淋しかった。

あれ程きびしく一つ間違いがあるとすぐにビンタを取った先生が急に優しくなったのも何となく気味が悪かった。アメリカ兵が進駐して来て大人も子供も皆殺しにするそうだ等と云う噂が学校でも聞かれ不安な毎日だった

教科書は軍国調の部合は全部切り取り又はスミでぬりつぶしてそのまま使用した。

昭和二十一年今からして想えばこの年が一番惨めな年だった様に思う。　空襲の不安は去ったものの教科書はワラバン紙で三十ページ程の表紙も何もないお粗末なものでそれも国語算数理科地理位のものでその他は全くの教科書なし、習字紙は清書の時だけウラ表のはっきり分る破れ易い粗末なもので練習の時は全て古新聞を使いクレヨンや絵の具は手に入らないので専らスミ絵ばかり、鉛筆も思う様に買えないしやっとの思いで手に入れても芯が弱くて使いものにならず乾電池の芯を抜いてそれで絵を書く等全く想像を越えた窮乏状態だった。

戦車や飛行機のモケイばかり作っていた工作の時間は下駄やゴミ取りを作ったり自分達の使っている机や椅子を修理した。図画の写生は風景よりも静物特にカボチャや茄子の写生が多かったのも食糧不足時代の反映と云ったらひがみだろうか。

あれ程きらっていたアメリカ調が一旦戦争に敗れたとなると今度は何もかもがアメリカばやりとなり野球が大



流行となった。戦前正課であった武道(剣道)は廃止になり武具は不用品として生徒に支給された。それはそれぞれに家庭に持ち帰り分解してキャッチャーの面にしたりボロにしてまるめてボールにしたりした。こうして生れたボールと古い鍬の柄のバットで日のくれる迄遊んだ。

その頃学校にだってドッチボールが二個位とソフトボールが一個あっただけである。これも体操の正課でなければ借りられず休みの時間は人取り(陣取り?)とか石けり女子はお手玉又は直径二十センチもある様なお手玉の親玉の様なものを作りドッチボールの代りにして遊んだ。

歌の方も軍国調のものは一切なくなり出征した異国の父や兄を待ちわびる「里の秋」とか戦災孤児を扱ったNHKドラマ鐘の鳴る丘の主題歌「とんがり帽子」又「ウサギの電報」等と云うお伽話調のものが流行した。

この年も食糧事情は依然として悪く栄養不良児は相変らず多かった。先生達はそれを痛く心配して下さった様子だった。その証に時々次の様な調査が行われた。

あなたの食事についておたずねします。

1　毎日食べたいだけ食べている

2　時に制限されることがある

3　いつも腹がへっているが心棒している

これを番号だけ書いて無記名で出した。その結果は一度も聞かされなかったがこの調査はこの年一年のうちに四～五回位された様に覚えている。

勿論不足していたのは食糧や学用品だけでなく衣料品もまともなものはほとんどなくズボンのバンドは布ヒモで空腹になると下ってくるのには閉口した。

工作の時間に下駄は作ったもののハナヲはスフや古い木綿が多く雨降りにはこうものならたちまちに切れてしまう。勿論長靴等あろうはずがない。夏の間は雨が降ればハダシで通学する事は珍らしくなかった。足の裏が痛い等と思った事は全然なかった。

かくしてやや落ち着きをみせかけた昭和二十三年

われわれはろくに勉強もしないうちに最上級生の六年生になっていた。この年になって台湾から引揚げて来たと云う新らしい校長先生が来た。詰襟の海軍服を着て下駄ばきで肩から雑納カバンをかけ遠くから歩いて通ってくる校長先生は校長としては余りにも貧弱であったがその

顔はいつも明るく笑顔に満ちていた。あの戦時中の校長はコワイと云うイメージは何処にもなく何となく親しみがもてたのを今も覚えている。

修身や歴史の時間はなくなり新らしく社会科が誕生しはじめて教科書が出来た。小学社会科「土地と人間」であるそれは部厚つい天然色刷りの立派な本だった。久しぶりの教科書はまぶしい程に美しかった。二学期になって「こくご小六」の教科書が出来た。

新らしい教科書をはじめて開いた時――あの感激、本当にうれしかった、涙の出る程に――

あれから二十数年――

過日久しぶりに母校を訪れた、一流ホテルを思わせる様な豪華な校舎、見事な音楽室、VTR装置を持った校内テレビ放送ETC……只々おどろくばかりの至れり尽せりの設備――

あの苦しかった体験は遠いゆめだったのだろうか。校庭一杯に遊ぶ戦争を知らない子供達、そこには肥満児はいても栄養失調の子は見当らない。この子達にはあんな辛い思いはさせたくない。否、させてはならない。

それはあの苦しい体験をして来た我々に課せられた最大の使命ではないだろうか。

終

昭和四十七年正月に執筆

富樫源十郎

## 戦后の食糧事情

此度稲羽東小学校百年史編纂の大事業を企画されました事は誠に喜しい事であります。私も此一頁に加えて戴く事を誇とする者であります。

私の様な小学校卒業の極めて低い学歴で加ふるに七十一才を数える老人となり何を書く事が出来ましょう。たまたま編纂委員長加藤君より是非共食糧問題に付いて筆を取れと進められましたので其の器でない事は充分覚悟していますが、次に述べる理由によって決心をしました読者の皆さんお笑い下さい。

戦后食糧事情は日を追って悪化してまいりました。国



にありては、農業行政の重大なる役割として、昭和二十一年食糧の供出配給の円滑を図る為に、未端の町村に主要食糧需給調整委員会の設立を命じたのである。我が前宮村も委員会を設立せられました。私の部落からは田中清一氏が此の委員に選任せられましたが、不幸にして間もなく故人となられ、其の後任として私が拝命しました。爾来此の委員会が食糧調整委員会又は農業調整委員会、最后には現在の農業委員会と名称が変って、昭和三十年まで十箇年の委員生活中に見た事、感じた事、行った事をありのままに執筆する事に決意しました。

さて主食とは何をいふのであるか、第一番手には米、次に大麦小麦小麦粉である。代用食の甘藷・大豆・馬鈴薯まで最后には主食に加えられたのである。此の主食は配給制度が定められて各家庭に配給せられたのである。此の配給量は終戦二三年前より、大人一日分が三合で、其の他は十五才以下十才以下幼児等の段階に、それぞれ其の量を定められた。三合とても戦后の人にはわからないと思いますが、一合の御飯は茶碗に約二杯位である。

此の配給量も戦后二年程で二合八勺まで減らされた。此の二合八勺の配給も、米の基本率で代用食の甘藷・大豆・馬鈴薯等の配給のあった場合は、米の基本率より差し引いて行ったものである。かくして米の配給量即ち主食の配給量が充分でないが為に、我々は一生懸命に増産又も増産と毎日を働き続けたのである。増産をするには第一条件として肥料がなくてはならないのである。此の大切な肥料まで配給制で充分ならずであるから、雑草を刈り集めて堆肥を作り、或る時は現在の自衛隊旧飛行教育隊、又は大伊木裏の高台にあった飛行二聯隊に行き、人糞尿の吸み取りまでして、肥料の確保に努力し、耕地の少ない人は増産のため耕地を作る仕事から始め木曽川堤内の河川地を二十余町歩も開拓して、甘藷・馬鈴薯の増産に努力して、各家庭の食糧危機を乗り切ったのである。

調味料に於ても同じ事がいえよう。砂糖・味噌・溜り等主食に次いで一日かくべからざる物資まで配給制が実施せられて、充分ならず、砂糖もあく抜きのしてない赤いもの、食塩にしても現在の様な真白のものは少なく、

山より取った赤味色の岩塩を配給せられた。此の岩塩を以て小麦或いは大豆等で自家用味噌を作り、溜りは、醤油の素を使用して作り、不足の分を補った。魚類は全々なく、たまに配給があれば鰯の古い品物位の有様で、現在の生活態度より見れば、栄養も取る事が出来ず、よく活き抜かれたものだ。ただただ不思議な位であった。又愛煙家にとっても非常に苦しい配給で、一日分が僅かに五六本、時には原料で配給せられて、それを紙に巻いて巻煙草を自分で作った事もある。米を原料とする酒も同じ事で、農家には田植時、秋の稲刈の時期に五合位であった。働く人にはたまに活力をつける為に必要な物資であった。暗で買うにも金では求める事が出来ず、少量なる米との物々交換ならばといふ有様で、到底米の余裕のない者は泣寝入りといふ惨めな実態で、憩いの一服、晩酌の一滴にも恵まれず、正に生地獄の生活と戦ったのである。かくの如く米の存在は、金銭よりも尊い貴重な物資だけに、政府は統制品として取締る為に、重要道路・橋・駅等には検問所を設けて警官を駐在させて、統制違反防止に努めたが違反者の摘発は次から次へと続出した。

昭和二十三年には稲葉郡は、食糧の配給供出の円滑を図る為に、地方委員会が生れて、各町村より推選委員一名と、農業調整委員会より一名と、二名の地方委員が選出せられる事になった。前宮村よりは推選委員として村議会議長足立章氏と、委員会よりは私の二人が選任せられました。これによって郡下の配給供出問題と取組んで、円滑を期したのである。

当時の稲葉郡は岐阜市を中心に、東部八ヶ町村、北部二ヶ村、西部三ヶ村、南部四ヶ村合計十七ヶ町村であった。

東部八ヶ町村　鵜沼　各務　蘇原　那加　前宮　更木　芥見　岩
北部二ヶ村　黒野　方県
西部三ヶ村　鏡島　日置江　市橋
南部四ヶ村　佐波　鶉　茜部　厚見

東部は主として甘藷の産地、其の他は米の産地として終始配給供出の協議には対立した。

供出の割当としては耕作反別を基本として、地方事務所総務部より示された。当局よりは反収を協議の上決定



したもの、決定はあくまで委員会の協議の上決めた数字である。耕作反別は地方事務所より各町村に割当反別として示したもので、この割当については、各町村共不平不満を以っても、意義の申立をしても、仲々聞入れてはくれなかった。

前宮村の米の作付割当面積は第一回は二十九町五反歩と示されたのである。実際の反別は四十五町歩位であった。其の内東区山の鼻の田が約九町歩、前渡西区堤外前河原六町歩、其の他前渡西区若宮河田で約三十町歩であった。然しながら堤外前河原は木曽川底の低いため水位が下り、水が減り早魃の時が多く収穫皆無の年があり、東区山の鼻の田は用水の便がなく、自然の雨を待つ有様で半作位の年が多かった。実際は其の他の水田を以って供出の対象としたので、中々大変な事であった。さて反収は各町村の情況によって一定はしていなかったが、最高は二石八斗最低二石一斗位で、総務部より委員会に町村別に示されてよく検討して決定したものである。年々此の割当の最低は前宮であった。各町村は示された前宮村の線には不賛成の声が多くて、此の割当会議にはいつもながら苦労の種であった。然しながら会長に各町村の代表を説得させ、部長に真実を訴へて要請し、最低の時は一石八斗の線まで決定を見た事もある。或る年は堤外前河原の青枯情態があった。其の時は地方事務所当局にはたらきかけて、委員会より特別の調査団派遣を要請して認められ、其の後供出の対象より除外された。最高は反収二石までの決定を見た事もあった。何れにしても六割の配給を受けて生活している前宮村としては、米に対しては非常に重大な役割であった。

米の供出量を決定するには各農家の保有量を定められた反収より差し引きして、残り米全部が対象になるのである。一般消費者と米作農家とは一日配給量に付いて少々違いがあったので、米作農家は努力をして反収を決定量より多く収穫すれば、それだけ保有米が多くなるわけであるから、一生懸命増産に意欲を出したのである。次から次へと郡の割当面積は年々加算せられて、最后には約三十四町歩と云ふ膨大なる数字が示されて、苦しい上に一段と苦しんだのである。かくして食糧事情はどん底に落ち、二十六年頃であったと思うが、食糧営団より

配給する米がないと役場に申込みがあったので、小野木村長は早速委員会に協議の結果、県庁に要請する事に決定して、二三人行く事になり、私も其の一人となってお供しました。県庁に赴き、小島農林部長に実情を説明して、特配の恩典を受けて、危機を補うて来た事もあった。

甘藷の供出に付いても、米の供出と同じような形式を取って実施したのである。郡よりは作付面積や反収を示される。各農家には割当会議の上で、それぞれ適当な方法を以って算定をなし、納得の行く供出を実施した。東部八ヶ町村の主産地は鵜沼の百弐拾万貫を筆頭に、那加蘇原各務の順で前宮村は弐拾貫位であった。供出は生甘藷・干甘藷の二本立で行ったのである。其の内干甘藷の供出には一苦労したものである。秋の短い日太陽の熱の弱い時期に日当りの良い場所を選んで、一枚一枚ならべて干し、晩になれば取込み、これを一週間位繰り返えして、やっと出来上るというような並々ならぬ骨折をして供出の責任を果したものである。かくして供出供出で追われ、少しでも保有量を多く持つために、野菜畑も減らしてこれに充当する有様で、或る時は甘藷の葉柄まで副食物の代用に食った事もあった。

馬鈴薯の供出はまず種芋の配給によって作付面積を定められ、其の配給量に応じて算定方法を取ったのであるから、これも増産に努力せざれば自家保有量に関係するので、一にも増産二にも増産で毎日毎日が追いまくられて只食わんが為の生活であった。

昭和二十二年食糧問題の重大なる時に、社会党片山内閣の誕生によって、農業行政に一大革命を起こし、農地法とかによって大地主より零細農家に農地開放を実施したのである。世の中は損する人と得する人で上を下えの大騒ぎとなった。此の農地開放については各町村に農地委員会が設立され、地主・自作・小作の三者間より選ばれて構成され、此の委員会が法の示す所に従って行ったのである。此の農地委員会も農地開放問題が解決して用がなくなり農業調整委員会と合流して現在の農業委員会と名称が変ったわけである。

地方委員当時特別に書き残したい事項は昭和二十五年頃であったと思う。稲葉郡流血地方委員会として騒いだ事件である其の真相を書いて見よう。それは各町村米作



農家の自家保有量を決定する委員会であった。当局より東部八ヶ町村には六十八%。其の他の地区即ち北西南部の米作地方には八十五%の数字が示されたのである。此の保有量が米作農家に取っては唯一の経済力としていたからである。甘藷の主産地たる東部に於て甘藷の保有量に付いてはそれと反対の立場であった。あくまで米にしても甘藷にしても保有量だけは各農家の自由になったものであるから一層深刻な問題とし取上げられた。しかしながら甘藷に頼っての食生活は不可能の為に、我々東部委員は結束して真向より反対の意気を以って委員会に臨んだ。午前中の協議を午后に持越されても話合が出来ず、流会となり、翌日改めて再検討する事で散会した。翌日は各町村長会も招集せられて別室にて諮問機関となり、二日間の長時間に渡った委員会も漸く最后には米作地区八十%。東部七十五%で解決した。然らばなぜかくまで保有量を各町村は重く考へたかは、食わんが為ばかりではなく、現金収入の少ない各農家に取っては、あくまで自由になる保有量こそ、唯一の生活面の支えであったからである。米ばかりでなく甘藷でも関西方面よりの買出部隊ばかりで、各列車は満員の有様、各務ヶ原沿線各駅は大混雑、ここにも違反摘発の眼が光っていたのである。かくの如き悲惨の情態は戦后二十余年経過した今日では、到底想像も及ばぬ食生活と取組んだ毎日であった。

かくして戦后の食糧問題は供出に配給に増産にと毎日毎日を各人が努力して働き続け、今日の様な豊かな食糧時代を迎え、遂にはあれほど貴重な米も統制から脱されて、自由販売の線まで漕ぎつけたのである。かくの如く食生活には数多き難関が横たわっていた。二十余年前の終戦直后を思い出せばよくやったというより恐しい事ばかりであったといいたい気がする。

かくの如き食糧危機突破の為配給並びに供出増産に邁進した農業調整委員は二十六年前宮村長小野木紋一氏より感謝状を受け続いて二十九年には岐阜県知事武藤嘉門閣下より感謝状を渡された。

初代農業委員名

北島　永井行正　永井則義
両内野　古川守一　小沢珣一　村上忠義
長平　丹羽一郎　丹羽　栄　丹羽三郎

前渡西区　足立仙吉　足立文司　長縄銀一
堀　定光　富樫源十郎　田中松太郎
五島伊久雄
下切　仙石梅夫　磯谷兼行
山脇　小島良一　佐々木保

## 鹿ノ子山の開墾

松波久夫

終戦によって、動員されていた人達の復員、軍関係及軍需工場に働いていた者の離職などで長らくの間ほとんど女の手で支へられて来た生活の場へ、にわかに男の手間が殖えて来た。何をおいてもやらねばならない条件は衣食住のメドをつけねばならないことである。当時直面した問題は先ずそれであった。名古屋市も岐阜市も殆んど焼け、各務原飛行場も何回も爆撃を受け、中央の川崎航空機工場・航空廠などは潰滅的で、周辺でも多数の被害を受けたが、我が村は飛行場に近い側の住家が爆風によって屋根瓦や壁がいたんだ程度で、住の問題は一応苦労をまぬがれ得たことは不幸中乍ら幸であった。敗戦のショックで虚脱の状態とは言っても、何か仕事をしなければとヤキモキしていた。二十年九月頃から二十一年前半に前宮全域に腸チブスが流行し、医者は無く、薬は乏しくて療養は思う様にならず、特に長平で多数の死者が出たことは、実に痛ましいことであった。

足らない食糧を何とか補わねばならない。いも一つでも麦一粒でもほしい。と。土のあるところならどんな所でも耕しいもを植え、麦をまいた。終戦当時既に木曽川畔の原野は前渡南地区で四町歩、下切前で一町歩、北島前で二町歩と石原以外はほとんど畑となり、二〇〇名の耕作者がいた。戦後急に増加した手間は遂に通称「鹿ノ子山」の開墾を始めた。「鹿ノ子山」は認定占用地という特殊な地域で面積七町歩あり、占用権を愛知県草井村鹿ノ子区が所有していた。木曽川本流はこの鹿の子山の南方である。開墾がほとんど完了に近づいた頃鹿ノ子区民の間に開墾反対の運動がおこり耕作阻止、立入禁止、をさけぶ「鹿ノ子」の一部の区民と、前渡がわの開墾者との争いとなり、悪るくすると血の雨を降らすような頗る険悪な空気に覆われる事態にまでなったが、当時の草井村長倉橋定八氏と前宮村長小野木紋一氏の会見や、両県の地方事務所長殊に岐阜県伊奈波事方事務所長青山静男氏のお骨折りによって、前渡開墾者一〇五名に占用権を譲り受けることが出来、一同は熱心に耕作に従事して組合を組織し、爾来二十有余年藷と麦の豊庫として、大きな潤をもたらすことができました。

食糧事情も年々よくなって、鍬を持つ人が減り、会社へ会社へと進む傾向が強くなり、切角の汗と脂の開墾畑がもとの原野に戻ってゆく傾向にあるが、点々と松苗を植えて、やがての自然公園にと一時的に手を引いたむきもあるようです。

因に終戦直後全力を鹿ノ子山開墾に注いた百余名は「青山耗地」と呼んで、過ぎし日の苦斗の思い出と調停の主「青山氏」の労に報い、鹿子島区民の寛大な理解と譲歩を後世の語り草にしようと申し合わせ、一先ず組合を解散しました。記念の名称を遺すことによって、各面えの謝意の表明であるとして久遠の平和を祈念いたすものであります。

## 4Hクラブと其の後

佐々木　保

国を挙げての大東亜戦争で総ての物資は供出と配給で特に食糧事情の悪化不足は今考えれば想像もつかない状態であった。其の為小学校を始め各学徒は校庭又は空地を利用して芋を作り又は一般農家への勤労奉仕に労力を提供したりした。一方国民は青壮年を戦地に送り「祖父チャン」「祖母チャン」「母チャン」が主体に木曽川の河原迄開墾して食糧を作ると言った「三チャン」農業が始まった。

昭和二十年八月戦争は終結はしたが食糧事情は一向に好転せず農村青少年の自主的な増産研究と学習の場としてクラブ活動を通じ、人間機能を訓練し社会に貢献する

と言ふ目的で、各地に4Hクラブが結成（ハンド・ハート等Hの四字）されて各クラブ員は各自の「プロジェクト」を持って努力し、其結果を発表する事になり昭和二十五年農業委員会制度が法律化されて、我前宮村に於ても当時小野木紋一村長の肝煎りで小沢珣一氏をリーダーに約三〇名の同志で結成されました。

競争意識の激しい各クラブ員は日夜各プロジェクトに専念努力し、岐阜県又は稲葉郡の4Hクラブ大会に毎年出席其の優秀なる成績を発表其の業績を称へられて来ました。

時代は日を追って農産物の供給と需給のバランスは変化し農業は曲り角というか壁に突当り、クラブ活動も主食栽培より一年一年蔬菜園芸又は畜産農業に方向を転向又最近では土地改良事業の実施に依り機械化農業（耕転機、田植機、トラクター、コンバインダスター等）が発達し、蔬菜園芸も温室ハウス利用の施設園芸に、又公害の少ない多頭養豚経営と言った近代都市化農業に発達し4Hクラブ員も農協青年部員に園芸クラブ員に養豚改良クラブ員にと各専業部門に活躍するようになりました。

最后に我々クラブ員は今后高度な機械力に依り有力栽培を徹底し時代の要求に「マッチ」した請負耕作と電熱電燈を利用した施設促成栽培とレジャー農業に目標を立て邁進したい念願です。

高度な機械力に依ることは、理想ではあるが、校下農民の何%が可能なりやといわざるを得ません。耕地面積の狭少であること。土に親しむ青年が果して何%あるかということなどから考えてみると、農業専従で成り立つかと首をかしげなくてはなりません。

## 終戦直後の青年団

尾関 正夫

人間は他の生物の生命を奪って生活を営なんでいる。これが人間対人間、発展して国対国、の争いとなったとき、戦争となり、人類の破滅をまねく。

太平洋戦争はその顕著なる一例である。日本国民が本格



的な戦争を体験したのは、日露戦争以来のことで、日露戦争では、十万人の青年が尊い生命を奪われている。

今次戦争の序幕をなした満州事変並びに国民が現代戦の特徴に気づきはじめた日中戦争、そして太平洋戦争があのように激しい戦になるとは国民全体が予想だにしなかった。

敗戦時の日本陸海軍の総兵力　七百二十万　その七十パーセントが二十代の青年であった。戦死者、除隊者を含めると延べ　一千万人　の若者が兵士として戦争にかりだされた。そして直接戦場で失われた兵士の生命は、約二百万人　にのぼり、空襲や、原爆の犠牲　沖縄、満州など戦火の巻きぞえとなった非戦闘員を加えれば　三百万人　の人命が失なわれていた。辛うじて生残った国民にとっても戦争の被害は深刻で、戦火に焼かれたり、強制疎開でとりこわされた住宅がなんと　三百十万戸、千五百万人　が家を失い財産を焼かれた。

昭年十二年から延々八年間の長い歳月であった。

昭和二十年八月十五日天皇の決定により無条件降伏がきまりさしもの、この大戦も日本が敗れて終止符をうった

同年九月二日東京湾上の米艦ミズリー号で調印され正式に日本の降伏が決り、この敗戦降伏は日本のながい歴史の中での歴然たる事実である。と同時に日本国民が始めての経験でもあった。

なかでも大勢の若者達は、南方諸島、東南アジアまたは中国大陸等、各戦場で命をとして戦かっていたが、八月十日ポツダム宣言受諾と同時に敗戦の兵士となり、捕虜の身となった。ある者は労役に携わり、ある者は戦争の責任を負って刑に服する者もいた。

内地部隊　四百万人　は二ヶ月で復員完了するも、外地部隊の兵士は先の見通しもたたず、なりゆきまかせの捕虜生活をつづけるのみ、ただ因縁というか、いわゆる運命というものは、自分の力ではどうしようもない心境に立つほかしかたがなかった。

幸い戦勝国の理解ある処置により、随時復員行事が進められ、それぞれ若者達も己れの村へと帰って来た。しかし彼等を待っていたものは、戦後の経済危機であった。

八月十五日鈴木内閣が総辞職し、あと東久迩内閣も、十月五日まで政権を保つことができず、続いて幣原喜重郎

氏が組閣におよぶ。
このように不安定な政府であれば充分な施政は期待できず、経済的な危機はますます深刻を極め中でも食糧危機は直接国民の生存をおびやかした。
労働力の不足、肥料の欠乏、その他戦時下のすべての悪条件が集中して、昭和二十年度の米の収穫予想量は、四百万石、明治末年以来の大減収を記録した。復員、引揚げで需要人口はかえって増え、占領であれば輸入の途もなく、特に二十年後半以後、次第に悪化をたどり、米の比率が低下し薯はもとより大豆・とうもろこし、が主食として配給される状態となった。
幸いなことに、わが村は米軍の爆撃技術が優秀だったのか、或は立地条件がよかったのか＝飛行場の南側・北側は相当の被害を受けている＝被害は極めて軽微で、旧来の機織業および田畑の耕作を素早く取り入れることができた。またそれ以外の村民達も米軍の進駐にともない米軍キャンプの労務者として明日の生活をささえるに、たいした不自由はみられなかった。
こうした好条件下で一応生活の見通しがついた時、三々五々集まった青年衆から敗戦後の青年団再編成に建設的意見が叫けばれはじめた。
前宮村青年団は創立が明治四十四年十一月、七十五名の団員をもって発足された。＝稲葉郡史より
年令十六才より二十五才までの村内に居住する男子をもって編成され、東区、西区、若宮の各分団に別れ各分団には分団長、副分団長をもうけ前宮村青年団と命名し各分団長より団長　一名　副団長　二名が選出され、これにより運営されてきた。
ここに問題点が一つ生じている。それは男子二十才になると法的に徴兵検査を受けなければならない義務があった。
支那事変が発生してからの兵力増強に意をそそいだ政府は、壮丁の六十から七十パーセント、までが軍隊に徴集され、戦争たけなわになるにつけ、除隊の年数も延びる状態となり二十一才以上の団員が少なく＝二十才以上を各分団では幹部とよんでいた＝運営にも支障をきたすこともあったが、団員の強力な団結により立派に運営されて、その業績は郡内はもとより県下でも優秀な青年団と



して何度も表彰を受け団員は、これを誇りとして団生活に生がいを感じていた。
このような青年団も終戦時には、ほとんどの若者が軍・工場にかりだされて有名無実の団であったが、戦後日時がたつにつれて該当年令層の若者が復員または徴用から開放されて、各自村に帰り青年団再編成にとりくみ、各グループごとに民主々義国家の青年団のありかたについて討議し、その意見をもちよった。その結果わりに団員の少ない分団では、さしたることもなく編成にふみきり一応分団の体制を整えたるも、西区分団においては、二つの意見が真向から対立し暗礁に乗りあげる始末となった。それは、
一、従来の青年団の行き方を踏襲し、民主々義国家の青年団として、団員各自が研さんにつとめつつ団結の強化をはかる。
二、速やかに民主国家の確立をきずくため、一つの政党に加入し、大々的に政治運動に参加すべき青年団を編成する。
以上が対立した主な意見である。
一、の意見をもつ者には、比較的高年令層の団員が多く団員生活の経験の多い者達
二、の意見の賛同者は若手グループに多く、血気盛んなある意味では感受性の強い団員達であった。
連日桃春院の御堂で激論を斗かわせ、はたまた顧問諸氏に御足労を煩わすも、依然として結論がつかめず、いたずらに日時を過ごすのみ。
敗戦国とはいえ同じ日本人同志が、同じ年代の若者達がいつまでもこのような状態であってはいけない、との意見が一部から提案され、それではしばらく冷却期間をもうけ、村の青年団行事には参加することで、西区分団の編成も一応のめどをつけ、当時の青年団長、丹羽浅七氏に届ける。
従って団員を拘束して青年団行事に参加させるということでなく本人の意志に基づいて出欠席は自由であるということで、甚だあいまいな結論であるが、二十年後の今から考えると最良の処置であったと思う。
そうこうしている間に、稲葉郡青年団主催の体育大会が陸上競技・野球大会にわけて実施されることとなり、

当然本村青年団からも勇躍して選手を送る。

過古郡大会の成績をみると常勝前宮村青年団といってよいほど抜群の強さを示していたが、陸上競技は当時の村長故小野木紋一氏の応援もむなしく男女とも三位に終る＝戦後男女共学、婦人参政権など女性の進出が目ざましく、青年団も男女をともにして運営されていた＝

次の野球大会は絶対優勝と確信をもって大会にのぞむ、他町村青年団でも前宮村青年団の優勝間違いなしとさえその実力を認めてもいたが、強者必ずしも勝者でないところにチーム・ゲームのむつかしさがあるのか、第一回戦で那加町青年団に「二対一」と惨敗、まったく良いところなし、チーム・ワークの必要性、団員の団結の重要性を充分知らされる一幕でもあった。

昭和二十一年度の青年団行事も翌年三月をもって終る。その後満年令によって二十五才までの若者が青年団を受け継いでゆくのであるが、先輩諸氏の築いた伝統のある青年団という場において、団員個々が、戦争のない、民主的な明るい文化国家の歴史をつくりだす力の根源となられんことを願って、小学校百年史発刊に際し、表記の題名にて投稿させていただきました。

水野元由

## 老人クラブ

老人相互の親和をはかり、老後の生活を健全で豊かなものにし、以て老人の福祉増進に資することを目的に、昭和三十九年六月に校下（東町二、西町三、下切一）一斉に六クラブが発足しました。六十歳以上の男女五十人余で一単位クラブを組織して、毎月一人五十円宛（年間六百円）の会費と、市よりの補助金年間単位クラブ毎に金壱万八千円と各公報会より幾許かの助成金で補う程度の経理で、行事としては、講師に依る教養講座を開設して如何にしたら世人に愛される年寄になれるだろうか、親切と思った世話やきも、若い人にはやかましく響くかも知れない。何時も時世の違いを意識して、ほほえましくある様につとめ、年寄は見ただけでも、きれいとは云



へないから適当な身たしなみで、さっぱりと感じよく又人生の経験は、充分のはずですから先輩として、世の悩み事等の相談相手にもなれる様に勉め、家庭では生甲斐のためにも此れ位はと年寄に出来る程度の仕事は受け持って（お爺さん・お婆さん）が居ないと困ると云はれる様に慕われ、荷物にならない様に健康である事は勿論、家の人に厄介負担をかけない様に心掛け、最後に一度、明渡した城に未練を持たず、若し未練が出たら種々或る趣味に没頭して「年寄りのくせに」と云われない様家族のよい一員となる様心持の修養に努力する。又老人に適した手細工等の講習会、研修会等の開催、特に健康保持のため、医師に依り血圧の測定、健康診談等一層と健康に留意。年二回総会を開き、一堂に会食しリクレーション、浪花節等の余興で終日童心になって楽しみ、毎年一回クラブ中で亡くなった方の法要を営み併て法話を聞く一日家事を忘れ皆仏心になって喜び話合って楽しみ、時折り神社境内の清掃も行い、単位クラブ毎に都度実費にて、日帰りバス旅行も年一、二回を楽しみ実行します。又稲羽地区の連合総会も客年に行はれ、会食を共にし余興も盛大に行われ終日楽しく大いに意義あり。

老人相互の親密による、自主的な活動の結果健康保持、教養の向上しかして余生を明るく楽しく、暮すことが出来、老人福祉増進に、寄与する処大である。

### 校下の老人クラブ（昭四八、二、一調）

| 名称 | 区域 | 結成年月日 | 会員数 |
|---|---|---|---|
| 前渡西第一老人クラブ | 西町一、二丁目 | 昭和三九、四、一一 | 四八 |
| 同　第二老人クラブ | 西町三、四丁目 | 同　三九、四、一一 | 五六 |
| 同　第三老人クラブ | 西町五、六丁目 | 同　三九、四、一一 | 五五 |
| 下切老人クラブ | 下切 | 同　三九、六、三 | 五七 |
| 長平長寿会 | 長平 | 同　三九、九、二〇 | 六一 |
| 稲羽東部老人クラブ | 北島、両内野 | 同　三九、九、二〇 | 六八 |
| 若松長寿会 | 山脇 | 同　四六、四、一 | 三二 |
| 計 | | | 三七七 |

# 校下の大企業

加藤嘉雄

## 岐阜プラスチック工業株式会社

岐阜市清に、昭和二十八年四月、プラスチック製造販売の呱呱の声を挙げた社長大松幸栄氏は、人並優れた先見の明と時代の波に乗り、日進月歩の発展はすばらしく、清の工場敷地三、〇〇〇㎡では狭隘となった。

昭和三十六年二月、社長は近代的生産体系を企画し、六〇、〇〇〇㎡の敷地を稲羽町に求めた。町は工場誘地をもくろんでいる矢先であるから、前渡東町永井医院の南で木曽川沿岸松林一帯約二〇、〇〇〇坪を候補地とした。

プラスチック製造には多量の清水と乾燥地であることが第一条件なので、同工場は最も適地とし買収の希望切なるものがある。地主八十余名の協力が成立したのは、二三か月後であった。

一反歩＝三〇〇坪＝九九一㎡

買収価格　金一五〇、〇〇〇円也（坪当り五〇〇円）

一反歩十五万円がその時の最高値である

現在では愛岐大橋の北側関江南道沿線一坪八万～十万

岐阜プラスチック工業株式会社の現況

創立　昭和二十八年四月十六日

資本金　八、〇〇〇万円

年商　一〇〇億円

従業員　男五〇〇名　女一五〇名　計六五〇名

内前宮地域より八〇名

本社　岐阜市清一一三七番地

稲羽工場　各務原市前渡東町三六二〇番地

福岡工場　福岡県粕屋郡志免町別府

支店　東京　大阪　名古屋

営業所　福岡

出張所　広島　札幌　仙台

営業部

日用品課　家庭日用品雑貨　食品容器等

包材課　各種軽包装容器　食品カップ

スチレンペーパー成形品　カバ



—等

特需課　運搬用大型成形品

農業・漁業用資材

コンテナー、パレット等

受註品・継手（リス興業）

給水用塩ビ管継手

排水用塩ビ管継手

工業用部品（機械部品　電気器具部品等）

開発商品（リス興業）

エビアン　ブロー

便槽　土留　等

稲羽工場案内

愛岐大橋北詰の西側に六万平方米の敷地を構え、プラスチックの伸びと成形の技術とを平行させております。品質の向上と製品のコストダウンを常に要求され合わせて一人当りの生産額を上げるよう生産の合理化、技術の改善に真剣に取り組んでおります。多様な材料を使い分けて年間約三万トンを消化しています。又、真空成形品射出成形品に印刷も行ない、成形と一貫して作業を行っており、消費者の皆様によい品を早く納められるよう頑張っております。

厚生施設

「企業は一つの生活グループである」

全社員が幸福になるよう

と当社の経営方針にうたってあるとおり、当社では従業員の福利厚生に力を入れ、健康的で明るい環境をつくり気持良く働けるよう幾多の注意を払っています。従業員の寮も近代建築の男子寮四階建二棟鉄筋五階建の女子寮一棟があり、又工場に隣接して鉄筋四階建の社宅を建設し従業員家族が楽しい生活を営んでおります。

寮では生花、茶道、洋裁、和裁等の各々講座を持ち、知らず知らずの内に、高い教養と資格を身につけ、その他の文化活動、スポーツ活動も行っております。

屋内体育館、総合グランド、プールも設けられ、若者が体力づくりに一生懸命です。社員食堂並びに喫茶室は冷暖房完備で社員の憩いの場所として喜ばれております。

大松社長はこういっています。

岐阜プラスチック工業株式会社を創立致しましたのは昭和二十八年四月であります。ここに当社も漸く十九年目を迎えることになったのでありますが、今日までの発展にご尽力をいただいた方々に深く敬意を表し、一層の発展のため決意を新たにする次第であります。

当社の事業も日用品雑貨を始め、機械工業用部品、軽量包装容器類、塩ビ管継手、大型コンテナーの製造販売等着々その他角化と拡充を行ってきました。当社の一般の発展を期して、更に延べ六六、〇〇〇㎡の敷地を求めて第一期・第二期・第三期設備を完了し、更に体育館も完備いたしました。これ等の事業は当社がこの分野で伸びて行くための礎石となるものであり、内外の期待も大きく我々も万全の体制でのぞむ所存であります。当社の過去十八年間は企業としての最初のひとこまであり、幼年期から青年期へと一つの峠を越えたに過ぎません。峠を越えた今、更に次の段階に発展するための布石はできているといえます。内外企業間の競争は楽観できるものではありませんが、この十八年間当社が養って来ました「飛躍」の力を見事に開花させ今後の二十年、三十年が更に光輝を添えることを期して力を尽す所存であります。最後に再び当社の創業以来、今日まで直接又は間接に多大のご援助を賜った関係各位に謹んで深謝いたしますと共に今後一層のご支援をお願いする次第であります。

経営理念

企業は一つの生活グループである。全社員がより幸福になるように、企業経営はすべて、我々グループの生活の向上を期することが目的である。そして企業を通じて社会に奉仕することである。

経営の方針

人は生れながらにして平等である。企業経営のために組織は作られているが、人それぞれが払われた努力に対する報酬は平等であらねばならない。社員は将来株主となり、経営に参画して、全社員の智恵を結集して経営を行ない、社員の会社となるよう努力することである。

社是五訓



一、信頼　社員はお互に信頼し合って会社の発展に努めよう

一、団結　社員はお互に団結しあらゆる苦難に打ち勝とう

一、開拓　社員はお互に新分野の開拓に努め生産の向上をはかろう

一、奉仕　社員はお互に企業の公共性を認識し製品を通じて社会に奉仕しよう

一、健康　社員はお互に健康に留意し健全な楽しい生活を送ろう

## エンヤ株式会社

昭和六年四月、本巣郡穂積町只越に現社長塩谷三郎氏が個人で養鶏孵卵場を開業し、好調に発展したので、同三十年法人組織として株式会社エンヤ農園孵化場とし、後にエンヤ株式会社と改称した。

昭和三十四年十一月、木曽川畔右岸地区の白砂青松の地に育種研究場として約三五、〇〇〇㎡の地を求め、鶏舎五〇余棟を建てて飼育を開始した。

「エンヤ株式会社の現況

創立　昭和六年

資本金　四、八〇〇万円

年商　三億五、〇〇〇万円

従業員　本社　男三四名　女一二名

育種研究場　男一三名　女　二名

養鶏試験場　男　一名　女　一名

第二種鶏場　男　三名　女　二名

外国（出向）　男　九名

本社　本巣郡穂積町只越九六五番地の二

育種研究場　各務原市前渡東町二九三二番地

養鶏試験場　岐阜市江崎一八九番地

第二種鶏場　岐阜市西中島一七四三番地

関連会社　西日本エンヤ

福島エンヤ

合弁会社インドネシヤ其他

孵卵能力　本社　一万卵入　一〇〇台

西日本エンヤ　一万卵入　二〇台

福島エンヤ　一万卵入　一〇台

マンギス種鶏場　一万卵入　一〇台

事業内容

一、初生雛孵化販売、鶏の育種改良及び輸出

二、養鶏に関する器材、薬品、飼料の販売及び輸出

三、孵卵、卵肉加工品、加工販売、鶏卵、鶏卵加工販売

四、冷凍食品の加工販売

業界における地位

初生雛生産規模においても、トップクラスに位置し特に技術分野においては広く官民関係者の間で認められている。

当社の初生雛は育種改良により、強健多産と連産性を有する優秀雛にて国内はもとより広く海外（西ドイツ、イタリー、スペイン、マレーシア、チリ、シンガポール、ベトナム、インドネシア、台湾等）に輸出している。

塩谷社長はこういっています。

私が産卵鶏の品種改良という地味な仕事と取組んでから四十余年、茨の道を一筋に貫ぬいて来ました。

昭和六年「技術のエンヤ」をスローガンに創業して以来、技術と性能を世界に知られました。今日日本へ進出している米国や、欧州の数社が、原種をエンヤに求めているのを見ても証明されます。エンヤはあくまでも日本の気候風土の中で、みずからの手で改良した基礎鶏をもとに、大規模化する養鶏に向く鶏を黙々と育種し、見事に産卵能力、強健性、経済能力で外国鶏を凌ぐ事を再確認されるにいたりました。

ご存知の通り最近の日本経済新聞は、エンヤ育種研究場を取材して『外国鶏に劣らない優秀鶏開発がわが国の種鶏孵化場の努力で「結実」した。高い生存率を誇った筈の外国鶏が、却って病気に弱い』と報道しました。

元農林省畜産経営課長牧野忠夫氏は、講演の中で「ドイツなど欧州各国を歩いたが、米国雛は成績が悪い。日本のエンヤのものが最も良いと高く評価していた。その日本が、外国から雛を輸入しているのは認識不足ではないか」と報告されています。



一九五二年以来欧米各国を視察した頃すでに外国ではマレック氏病、CRDなどが養鶏家を恐怖に陥れている事実を知り、近い将来の日本を予想し、直ちに〝抗病性育種〟と取組んだのです。その結果世界各国から〝抗病性最高レベル鶏〟とまで絶讃されるに到りました。育種という地味な仕事は、一朝一夕では出来ません。エンヤは常に大地を踏みしめて今日も前進しています。常に養鶏新時代の担い手の皆様のご信頼にお応えする熱意と、技術の向上にたゆみなき努力を続けます。絶大なご支援をお願いする次第であります。

## 愛岐大橋

愛岐大橋の工事概要については昭和四四年三月岐阜土木事務所のパンフレットを抜粋転載して参考にご覧いただこうと思います。

一、まえがき

本橋は岐阜・愛知両県を結ぶ重要路線である主要地方道　江南――関　線の岐阜県各務原市前渡東町と、愛知県江南市草井町立合である。木曽川に、国庫補助橋梁整備事業にて新設する橋長六一〇・四〇m、巾員九・五〇m（車道六・五〇m）歩道（一・五〇m×二）の長大橋であって本箇所は、永年の間、人のみを許す渡船の不便さを忍んで居り、現在は愛知県管理の渡船（草井渡し）を行っている。

本橋架設については十数年前から、地元愛知・岐阜両県において強い要望があったが諸般の事業により実現が遅延して、昭和三十九年度から国庫補助事業で採択され着工し、昭和四十三年度の工事を以て完工するものである。

本橋は岐阜県、愛知県の境界を流れる木曽川に架する橋梁であるので、工事の施工者、費用の負担、架橋地点については両県が協議し覚書を取りかわし、岐阜県に於

て、愛知県の委託分を合せ施工したものである。尚本橋梁工事は、現在施工中の江南――関線道路整備事業の一環であって、本線の全線整備をもって、その効果を大にするものであり、江南――関線一九・五km及び名古屋――江南線一八・二〇kmの計三七・七kmをもって、名古屋――関間を直結する唯一の路線となり、国道四一号・二二号線の中間路線として将来交通の円滑緩和及び沿線地域の文化産業開発に寄与するところ大なるものがある。

二、計画の概要

本地点は河川流域四・六八四km²、既往洪水量一〇・九五五m³（計画一二・五〇〇m³）比流量二・四（計画二・七）河床勾配四五〇分の一（計画四五四分の一）流速五・一九m（計画四・六〇m）を有し、洪水は四月より十月に亘り屢々あり、十一月より二月間は上流今渡調整堰堤の門扉操作により、水位は大体一定に保たれている。堤防は、左右岸とも建設省直轄工事にて計画中であるが現在は未改修である。

河床は河心より左は寄洲があり、流心は右岸に極端に偏している。本箇所地質調査の結果は生成年月はごく新らしく第四紀沖積世代約一〇・〇〇〇年以前～現代に至る間に堆積形成された河成沖積土層で大きく三層に分けられている。

巾員構成については交通地域ゾーンの設定を次表の如く定め、本路線の将来交通量の増加を、次の如く推定して道路、橋梁巾員はC―3級として決定した。

交通地域ゾーンの設定表

岐阜
北濃　美濃市　関市　各務原市　岐阜市
愛知
江南市　小牧市　一宮市　西春日井郡　名古屋市
春日井市　愛知西　愛知東　愛知南

将来交通量

昭和四三年　一日　二・二八九台（自動車）
〃　四五年　〃　二・九七〇台（〃）
〃　五五年　〃　六・四〇三台（〃）

下部工の基礎は、現地点の地層が比較的よく締った砂礫層で目っ玉石が点在しているので全てRC潜承として確実性のある工法を採用した。又橋脚躯体は小判型断面



上部張出し型、又橋台は短型断面上部張出し型とした。

橋梁上部工は、経済的かつ優美なる型式（三経間連続ツーレントラス三連）を選定した。全橋長は六一〇・四〇〇m、巾員車道六・五〇m、歩道一・五〇m×2の熔接鋼橋である。縦断勾配は全長に亘り〇・二五%抛物線とし、横断勾配は車道一・五%抛物線、歩道は二%直線である。設計荷重は鋼道路橋設計示方書によるTL―二〇である。

本橋は一般的な連続トラスであるが特徴としては、

a 外観及び治水上を考慮して全橋に亘り等径間とし

b 歩道をトラス外に設けることにより、車道と完全に分離し歩行者等の安全を確保した。

c 橋梁の外観的連続性を強調する為各連の端部橋脚上に連結機を設置した。

d 床版に入る斜材部分は床版コンクリートと斜材との間に振動吸収材として厚一〇mmのエラスティックフイラー（ネオプレーン樹脂系）をセットする。

橋梁照明は橋梁出入口に街路灯を四基、橋梁部にカットオフ型二〇基を設け、最低五ルックスを確保出来るよう設置した。

塗装は愛知・岐阜両県協議の結果コバルトブルー色に決定した。

三、主要資材

| | | |
|---|---|---|
| 鋼材 | 上部橋体 | 九八一・四一トン |
| | 下部刃口金物 | 二一・九三トン |
| | その他 | 一三六・四九トン |
| | 計 | 一、一三九・八三トン |
| セメント | 上部床版 | 一、二三八・三立方米 |
| コンクリート | 下部工 | 五、八二六・三立方米 |
| | 計 | 七、〇六四・六立方米 |
| アスファルト | | 三七四・三トン |
| コンクリート | | |
| 鉄筋 | 上部床版 | 二九九・八トン |
| | 下部工 | 三四九・四トン |
| | 計 | 六四九・二トン |

四、年度事業費

年度計画は、次表の通り予算措置に応じ、分割施行となっているが、下部工及び上部工（橋体工）は工事の一貫性によりして債務負担行為にて、それぞれ（株）間組、（株）滝上工業と一括契約を結び、工事を施行した。

| | | |
|---|---|---|
| 昭和三九年度 | 一三、一三〇千円 | 岐阜・愛知両県取付道路、用地買収及び調査費 |
| 昭和四〇年度 | 四九・八〇〇千円 | 岐阜県用地補償費、下部工事着手 |
| 昭和四一年度 | 一三八・四〇〇千円 | 愛知県用地補償費、取付道路費、下部工事 |
| 昭和四二年度 | 一五五・四〇〇千円 | 上部鋼桁護岸工、躯体 |
| 昭和四三年度 | 二一一・一九〇千円 | 上部橋体工、床版工、昭明工 |
| 合計 | 五六七・九二〇千円 | 愛知県、岐阜県合併費 |

五、あとがき

本橋については既に昭和二九年より地元愛知県（江南市、扶桑町、大口町、岩倉町）、岐阜県（各務原市、関市）において「愛岐大橋建設期成同盟会」及び「主要地方道江南―関線改良促進同盟会」を結成し、その実現に多年尽力されたのであるが、この悲願がここに漸くその完成を見るに至ったのである。

一方橋の完成に伴って現在整備中の道路改良事業の早期完成を期し、本橋架設の効果がより大になることを望むものである。

昭和四十四年四月二日渡橋式があげられたので「広報かかみがはら」は次のように報導しました。

## 愛岐大橋が完成

四月二日　はなやかに渡りぞめ



かねてより念願であった愛岐大橋が完成し、この完工祝が、さる四月二日午前十時から渡りぞめを行ない、引きつづき十一時から江南市体育館において盛大に竣工式ならびに祝賀会が催されました。

この日、九時三十分には各務原市、江南市、および近郷から約千人余の人々が集り、この橋の完成を祝いました。

神事は江南市側で十時から約三十分間行なわれ、つづいて平野岐阜県知事、桑原愛知県知事が渡りぞめの紅白のテープにハサミを入れ、神官を先頭に、両県知事、各務原市長、江南市長、野田、江崎代議士ら来賓多数と親子三代夫婦の各務原市前渡西町、足立磯右衛門さん一家、江南市草井、馬場嘉重さん一家の人々が二十台の車に分乗して、にぎやかに渡りぞめをしました。

各務原市側に到着すると平野、桑原両知事らは喜こびの握手をかわし、松原市長の手でクス玉が割られました。五色の紙ふぶきが舞う中をハトが大空にむけて飛びたちまた河原では威勢のよい花火が澄みきった春の空にこだまし、この完成を祝いました。

つづいて式場は、江南市体育館に移り、竣工式および祝賀会が催されました。

式典は、両県知事の式辞につづき、野田、江崎代議士から祝辞があったあと祝賀会に入り両市を代表して江南市長からお礼のことばが述べられ、終りに坂井県議の音頭で万歳を三唱し全員で愛岐大橋の完成を祝いました。

この愛岐大橋は、本市前渡と江南市草井間を結ぶ延長六百十・四メートル巾員は両側六・五メートル歩道一・五メートル×二の橋で、昭和四十年から四年がかりで建設が進められていたもので総工費は五億六千八百万円投じられています。

かつてはここも、草井の渡し場としてみなさんになじまれ、親しまれたところで清流木曽川を岡田式のわたし舟で荷馬車をつんで、のんびりと渡った風情も今は姿を消し、ブルー一色に連なる雄姿は時代の推移を如実にものがたっています。

今後は、川島大橋とならび名古屋、一宮、江南の南部都市との産業、文化の交流に大きな役割を果すことになります。

# 附

# 録

# 前宮村の風俗習慣

武山秀雄

国造本紀に依れば第十三代成務天皇の朝に三野を前後に分ち三野前国、三野後国と云う。又武芸国あり。各々国造を置きて治めしめ給ふ。文化革新に至り前の地方制度を改め旧三国造支配を合併して御野国とせらるとある。

但し奈良朝に至りて美濃の文字に改めらる。

稲葉郡は往古美濃国造今の岐阜市南方に国府を置きて附近の地を管治し居たりしが、後分れて方県、厚見、各務の三郡となれり。前宮村は各務郡に属せり。

前渡は承久記には大豆渡とあり。又吾妻鏡には摩免渡とあり。これ等古文書に依れば我郷土前渡という土地は少なく共三千年以前より存在せるものと推測される。これを証する資料は当村北部に横わる長根山、荒井山の山腹に穴居時代の遺物たる自然石を積み重ねたる住居多数現存することに依っても明らかなり。

而し村はあっても南には木曽の大河をひかえ、北には連々たる山を隔てて広漠たる各務野にはばまれ見るからに哀れな寒村に過ぎなかった。

徳川時代となり坪内家この地を領するに当り稲日の目を拝むかに見受けられたが、何といっても耕地は少く交通の便のない僻地中の僻地なるがため、この地に住む者の心所謂「井の中の蛙大海を知らず」の譬喩の如く平凡な生活を送りしものの如し。

ここで暫らく坪内家に付いて書かざるを得なくなった。

元来坪内家は加納の人富樫の庶流にして藤左衛門尉頼定なるもの、戦国の始め尾張の国に遷り犬山城主織田信康に仕へて坪内氏と称し羽栗郡松倉を領す。

孫喜太郎利定信長に従ふ。永録年中信長美濃を計略するに当り利定地理に通ずる故を以て重用せらる。

是より各地に戦功ありて三千八十七貫を食む。

信長の没後は秀吉と善からず。武儀郡金山に閑居せるを天正十八年徳川家康利定父子五人を召し、上総国山口村に千五百石、信濃国伊那郡木峰に五百石合せて二千石を

賜ふ。其の子等亦上総国にて千四百石を賜ふ。

関ケ原戦争の功に依り慶長六年父子五名連名の朱印にて羽栗各務の二郡の中六千五百三十三石を賜ふ。

即ち封に就き之を内分して父玄蕃頭利定新加納（三千八百三十三石）長子惣兵衛家定（家督）九百五十八石余。次子嘉兵衛定安　前渡六百石　三子佐左衛門正定。平島　六百石。四子太郎兵衛安定。三井六百石。

所謂前渡様と呼ばれる坪内氏は子孫皆嘉兵衛を通称して維新奉還に至る。

初代嘉兵衛定安　二代俊定　三代定勝　四代定矩
五代不詳　六代貞行　七代定該　八代定効
九代不詳　十代定昌　十一代昌盛　十二代昌寿
十三代昌蔵　十四代護氏は目下東京に居住し二男二郎氏は元当小学校に教鞭を採られ後那加第三小学校長として教育に尽力せられ停年に至る。

坪内家代々宗教を重んじ、人心をやわらげ寺院を創設して領民の信仰の目標を定め、治政よろしきを得て農業を奬めて来たりしが、明治の初年より尾張との交流も繁くなるにつけ、各々自活の道を切開くべく努力しつつあり。

就中前渡西区地内は耕地至って狭く農業を以って家を調える能はざる情態から機業に志を立てる者日増に多くなり、その取引を古知野に求め販路は除々に拡り、村の燭光を見るに至る。

それより先坪内家の理解ある援助により民族的民謡も勃興し夏の夜祭りや村の祭礼には賑かなお囃しが欠くことの出来ぬ村の風習となった。

特に前渡西区青年の倉庫には立派な屋形が備えられて、村祭りにはこの屋形を青年によりて担き上げられ賑やかな村独特の打囃しと共に延々行列して村社にお旅する慣わしは、江戸時代より明治大正昭和の初期まで続いて行われたが、大東亜戦争のため中止され、終戦後は青年の倉庫も荒れ果てて、仕舞われてあった屋形も哀れに腐ち果て、今は一人として昔を偲ぶよすがもない姿となった。

今項目を分けて習慣風俗の一端を述べて見たいと思う。

一、村民一般的心理

本村は地勢に於て記されたる如く、北は山南は木曽川により、他方の連絡を絶たれ、交通の便に恵まれない土地



なれ共、終戦後バスも通じ特に昭和四十四年には草井と前渡を結ぶ愛岐大橋の架橋を見るに至って、やや交通の便は開けたといい得るも往古は如何に不便なりしか思い半に過ぐるものである。

交通不便のため村の発展が遅れていた点は言を俟たず。文化は地勢上甚だ低い感はあったが独立自営の念頗る強く耕作地の少なきを歎き野菜の栽培に力をそそぐ者又は機業に志す者多く次から次へと増加し機業家は目下では西区下切山脇の戸数七割程に伸びて来ている。

従って一般的に機業地は派手好みにて流行を追うの風潮あり、これに反し農業を以て生活の根源となす東区方面は生活も簡素にして質朴温順なり。

二、団体的行動にも前述の事情の相違より幾分相容れざる傾向も見受けられたが村内有力者の尽力により諸種の施設を通し又学校を中心として円満なる歩みが続けられている。

三、人情　前記の坪内家の善政により貧弱村なれ共人情頗る細かにして、一致団結して非常に当る風習は他に誇るべき事実が数多い。

四、教育　教育については貧弱村のこと故生活も豊かならず。従って進学する者極めて僅少なりしが、現今は学制も変り他との交渉も盛んに行われる様になり進学を望む者非常に増加し、村は町となり、市に合併され、その都度校舎の改築が行われ現在は市内小中学中、最新式なる防音装置の施された鉄筋三階建の立派なものとなった。

五、宗教　宗教は坪内家が代々宗教に関心を以って居られ村内の寺院は殆んど坪内家の息がかかって創立したものが多い。従って村民はこの寺を中心として集り信仰を語り合い村内各部落の行事は寺院中心に行われている。東区は重に禅宗が多く大安寺、瑞泉寺、法光寺に属し、西区下切山脇は浄土真宗にして常貞寺、法蔵寺、上徳坊西入坊其他に属している。

六、方言　特に他村と離れたる一寒村なるが故にこの村独得の方言がある。方言とは或一定の地にのみ通用する言葉であって、其の土地の人情風俗等を表現するものなり。前宮風土記後編に記載されたる方言だけでも百以上ある（他記者による）

その代表的なものを小話の形で紹介することとする。

「今日はオヌシンターの運動会ぢゃがドベコツになったらドズクぞ」とヂヤケラを云うとこれを聞いて居たうちのオババが「ナニコクえらそうに、オマハンだっていつでもドベコツぢゃったがや」「アカン〳〵そうインサルけどワッチンターの組は皆んな走り手ばっかりだったでヨー」そう言わずにオイチョクンサイ」「それをガテンして一等とらなきゃダチヤカンげー」「ソウカエモはいはい」

斯の如き土地柄故小学校の創立は明治六年とて古いことは県下でも指折だったが、目立つ程の発展はなかった。明治四十二年永井牛太郎先生校長として就任せらるるや、旧来の風習を一掃し学校は申す迄もなく一般村民に呼掛け、現代的な教育に一身を捧げられ、学校の環境は見る〳〵うちに改善され田舎の小学校としては近村に先立ち立派なる運動会が催される様になった。村民又永井校長の挙に協力を惜しまず、学校の運動会は挙村一致の大行事となった。

終戦後米国占領下にあってはキャンプの米国小学児童も参加しその盛況は将に国際運動会を見るの感があった。

永井校長はいつも生徒に向って斯く言った。

「君達が進学しても又社会人として離村することがあっても日曜や夏休みは必ず小学校へ来い。学校には君達の手の跡足の跡が残っている又先生達がいつも待つているよ」と言われたお言葉が忘れられない。

当時中等学校に学ぶ者が集って同窓会を設立したのは多分大正五年八月だったと思う。

今回同窓会が中心となって百年史編纂に踏切ったのもこうした教訓が蘇ったのではなかろうか。

とにかく村の青年団婦人会を始め総ての会合が学校を中心として行われたことは歴代の校長始め職員各位が理解と協力培養に努力を惜しまなかった賜であり他町村にその比を見ない良い習慣となった。

かくて月かわり星移りて住宅も日々に改築され衣食住共に長足の進歩をした。電話の架設数の多きこと、自家用車の多数なること、電気器具の設備等他に遜色なきまでに進歩発展したる姿を百年史を通して共に喜び、一面校舎の優秀の美を飾り、尚将来益々発展の経路を突進することを念願して筆を擱することとする。



# 方言と伝説

丹羽久義

## 一、方言

方言とは或一定の地方にのみ生きている言葉であって、その土地の人情、風俗等を代表するものである。

方言は「土に生まれて土に育つ」。一定の地に限られたるものなれば地方によって色彩があり、相違があるものである。

本村において多く使われている言葉を列記しょう。

い　イカケ　米をあげるかご
　　イビ　指
　　イコカヨウ　ゆきましょう
　　イキスカン　好まない
は　ハリコト　針仕事、裁縫。
　　ハンド　水がめ
　　バンドコ　こたつ
に　ニスイコト　馬鹿なこと。
　　ニイジン　人参（にんじん）
　　ニガク　磨く（みがく）。
ほ　ホッタロ　螢。
　　ホットク　引蛙。
　　ホウレ　溝。
　　ホトコロ　ふところ。
へ　ヘドック　嘔吐。
　　ヘンビ　蛇。
　　ベロバナ　木蓮。
と　ドベコツ　最後。
　　ドズク　たたく。うつ。
　　トウスミ　燈心。
ち　チャノム　朝飯を食うこと。
　　チョクレ　……してくれ。
　　チャマガ　茶釜。
り　リキム　暴言をはく。

ね　ヌシト　泥棒。
　　ヌカス　言う。
お　オンサレンカ　来ないか。
　　オラレタ　来なさった。
　　オクンサイ　ください。
　　オテボ　杓子。
　　オマハン　お前さん。あなた。
　　オンボ　尾。
わ　オカシチョクレンサイやめてください。
　　ワランジ　草履。
　　ワッチンタア　私たち。
　　ワンゾ　無理。
か　カンス　蚊。
　　カマゴロ　こおろぎ。
　　カイブッタ　ひっくりかえった。
　　カズワラ　サーカス。
　　ガイロ　蛙。
　　カゲンボシ　影法師。
よ　ヨダルイ　たるい。
　　ヨウサ　夜。
　　タンゴ　絹布の単衣。
　　タワケ　馬鹿。
　　ダイコ　大根。
　　ダチカン　駄目。
そ　ソウカエモ　さようですか。
　　ゾロ　うどん。
　　ゾメク　口ぎたなくさわぐ。
つ　ツイ　露。
　　ツヨ　杖。
ね　ネブカ　ねぎ。
　　ネッカラ　一向に。
な　ナスビ　茄子。
　　ナンデカ　色々様々。
　　ナニコク　何をいう。
ら　ラレル　暴れる。
　　ラッシモナイ　乱雑な。きたないこと。
む　ムリット　態々。
　　ムゴイ　可愛想。



う　ウデル　ゆでる。
　　ウッカリ　気がつかない。
の　ノソイ　おそい。
　　ノンボリ　のぼり。
　　ノグ　脱ぐ。
く　グスイ　ずるい。
　　グシャワルイ　ぬかるみ。
や　ヤンカス　いじめる。
　　ヤクトニ　無理に。
　　ヤラカイ　柔かい。
　　ヤットカメ　久しぶり。
ま　マンノ　草かき。
　　マイコマイコ　たびたび。いつも。
け　ケンカイ　喧嘩。
　　ケツネ　きつね。
ふ　フルシキ　風呂敷。
　　フシヤク　柄杓。
こ　コマシャクレテ　ませて。
　　ゴイゴイ　嘔吐物。
え　エット　久しく。
　　エライネッカラ　まことにどうも。
て　テンペツ　かご。
　　テノゴイ　手ぬぐい。
　　テンマル　てまり。
　　デカス　作る。
あ　アリンコ　蟻。
　　アカン　駄目。
さ　サラス　する。
き　キリモン　着物。
　　キシヨロ　きせる。パイプ。
　　ギッチョ　左手きき。
ゆ　ユンベ　昨夜。
　　ユウナベ　夜業。
め　メメゾ　みみず。
　　メレタイ　目出度い。
み　ミットモナイ　見苦しい。
　　ミヤツシャイ　見なさい。
し　シチョクレンサイ　してください。

シンジョカ　どうやら。
シカン　下駄。
ジダマメ　落花豆。
ジョリ　草履。
ジャケラ　冗談。
ジョウヤ　いつも。
エ　エエカゲン　いいでしょう。
ヒ　ヒンナラ　それなら。
ヒッククル　しばる。
ヒキズリ　すき焼き。
ヒボ　ひも。
モ　モッサラコイ　乱雑な、きたないこと。
セ　セメ　ボタン。
セバイ　せまい。
ス　スモトリ花　すみれ草。
スズム　沈む。

## ニ、伝説

### (一) 蛇の渕

往古木曽川の本流は本村内前渡なる欠下の地を流れしという。その木曽のとうとうとして流れ、尽くるなき、しかも奔馬の如き流水は欠下なる神明神社（村社）の鎮座ます大岩石にせき止められ、一旦水はここに深渕をなし再びここより波頭を転じて瀬をなして流れたり。

よってここを岩瀬とよび、またその神明神社をその名岩瀬神社ともいう。

現在この神社の境内にある蛇渕といえるは即ちその本流深渕のあとにして、その後その渕の周辺には緑樹うっそうとして昼尚くらきまでにおい茂り大蛇がここにすめることありとて、ここを蛇の渕といえり。

### (二) 波止岩と七日巻

蛇の渕より数町下流に海抜八七・〇三mの矢熊山あり頂上に不動明王を安置せる仏眼院といえる堂宇あり。

この山の南面はすこぶる険峻にして断崖絶壁をなす。その直下に広さ約十平方m高さおよそ十五mの大岩石あり人称して波止岩という。

岩瀬をへて流れし木曽の本流は再び波濤を立てて河岸なるこの大岩石に又もや打ちつけ渕をなし、今度は水大



いに荒れくるい、その狂う怒濤のひびきは近郷の住民の眠りをさまたげ夢を破りたりという。時の人大いに悩みこれはたしかに水神の怒りならんとその地に在りし弁財天に祈りたり。

しかるに奇か妙か人の一念こそ恐ろしやその願、そのいのりとどきて、七日目の朝もや尚あたりをたちこむる頃その大岩石の頂端に幻の如く現実の如く、たえなる楽をかなでつつ彼の弁財天あらわれまして、その怒り狂える波濤を愛撫するが如く手をかざし給えば、たちまちにして波静まりたりしが、弁財天の姿は人のひれ伏し拝みいる間に忽然と消えさりしという。

その後波は静まりしも大いなる渦巻を生じたり。

当時川を下れる筏はこの巻に入り七日間巻き廻して漸く流下したり。この時土地の人この大岩石の上より握り飯を提げおろして筏乗りに与えたりという。

故にこの大岩を波止岩と称し今も尚その上に弁財天をまつりてあり。巻を七日の巻といい、或は弁天池と称する。

### (三) 不会の提灯（あわずのちょうちん）

しとしとと雨でも降り出しそうな闇夜に今の常貞寺前より神置町に至る間の河原づたいの堤をあるく時はるか前方に提灯をともし、足音高くしてくる者あり、その提灯が約二～三間前にきたる時、ハタッとその灯その音消え失せたりと思いきや、今度は後方二～三間の処にて灯をつけ足音立てて行くものありという。之を称して不会の提灯という。

時は徳川幕府も漸く衰運に傾き尊王攘夷の論四方に蜂起し世論喧そうを極め来たりし幕末のこと。一人の武士あり、鼻すじ通りて高く、眼光烱々真一文字に結べる口元みるからに魅力を感ぜし好男武士、村の乙女の胸をさわがせるには十分にして余りありたり。

かかる凜としてうるわしき武士に如何なる縁にてか既に一人の許婚者あり。しかもその娘はみる目をして伏せしむる如き、顔には赤黒いアザあり、足はビッコのみにくい姿の娘なり。

はじめは武士も何の異議もなくていたりしに次第に成長するに従ってそのみにくき容姿の女とつれそうは如何

にも身の一生の不利、何とかしてこれを破棄したきものと思えども女は恋慕の情深くその上社会道徳、貞操観念の着実堅固なりしその頃にあってはその術もなし。

されど武士はたえ難くなり遂に一大決意をするにいたれり。

或夜一寸先きも見えない真の闇夜に彼女と甘き物語りせんとて呼び出せり。今の常貞寺前の河原より下りて彼女は恋しき人に会えるものと喜び勇んで何の恐れも何の不思議も疑念も抱かず約束の地に向って一路足を運ばせるのであった。

然るに行きても行きてもその武士には会えず遂にはるかむこうの神置町なる約一里もある八幡神社の鎮守の森が見えだしたり、と問一髪突然彼女の背後より秋水ひらめきたり。あわれ彼女は恋しき人にも会わで其の場に斃れたり。

即ちその怨霊今に到るも残り、恋慕せる武士に会わんとて人の姿をみると現われるのだがその人でないため、姿を消して再び後方に現われて幽界に返るのだという。

## 神社と仏閣

富樫心行

○医王山　桃春院　（曹洞宗）

当院の本尊は聖観音菩薩（薬師如来）にして、御丈量一尺五寸の座像にましまして蓮葉の台座に安置ましまします。施願印の印相を現わし身光の舟後光にあらせらる。尚本尊の右肩には一寸八分の薬師如来の金仏ましまします。

桃春院は元薬師院と号す。元禄四年四月僧禅厳の開基による、享保二年五月十一日地頭坪内惣兵衛薬師院を大文字に改号せり後野々山内匠が改めて桃春院と称す。加納町全久院第十六世知了徒第十七世大英をして開山とせり、明治三十四年火災のため本堂を焼失せり、現在の本堂は明治四十四年再建せるものなり。

○松岳山　常貞寺　（本願寺）



常貞寺は延宝五年知行所取立の所有地にして即ち前渡村田領主戒名直操院殿松岳常貞居士俗名藤原朝臣坪内嘉兵衛定勝公寛文三年五月十日逝去のためその墓所の上に堂宇を建立せり、これに依って松岳山常貞寺として本願寺に届出たり折坪内家は祖先代々仏教に帰依し特に前渡領主は念仏宗に帰依深く常貞寺はその感謝の念により創立されたるものなり。

現在の本堂は昭和八年に起工して同十二年に完成しているが以前の本堂は建坪四十坪の総欅の建物にて百八十年間度々の大洪水にも濃尾地震にも堪えて来たが余りにも狭少を感じ昭和七年当寺十三世秀雄の代に再建の議が決せられた。

常貞寺開山貞玄―二代貞順―三代恵空―四代聞秀―五代泰然―六代恵孝七・九代祚門―八代俊了―十代恵秀―十一代恵淳―十二代恵見―十三代秀雄―十四代秀道―と続いている。

○矢熊山　仏眼院　（真言宗醍醐派）

当山に安置し奉る本尊不動明王は下総国成田山の御分身なり。

当地領主旗本坪内家（富樫左衛門の子孫）の家臣山本軍八郎、藤原盛行の一子秀之助盲目となり成田山に参籠して開眼しその報恩のため得度し僧名を明心と名づく、明治二十三年十一月当所に勧請して諸人の祈る霊場となる。

翌年春京都醍醐山より土御門天皇建仁三年成賢御創建にかかる豊臣秀吉公の御祈願所仏眼院を当山に移転し安置し奉る。

仏眼院開山明心―二代目了明―三代目了英―四代目心行と続き現在に至る。

○興聖山　宝林寺　（曹洞宗）

本寺は江戸時代享保元丙申年八月（吉宗八代将軍に就任した年）本寺久運寺七世雲心法子仁山伝英が開山。（本寺久運寺は岐阜市に加納姫の菩提寺として門構も立派で伽藍もそれは立派でしたが時代の流れと共に現在は昔の栄華を偲ぶ何もなく小さに御堂があるのみ）

開山以来法地相続十六世徹山樹英に至る。